
訳有りの記憶喪失でも生きていける

駄作工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

訳有りの記憶喪失でも生きていける

【Nコード】

N8335V

【作者名】

駄作工場長

【あらすじ】

全身を大怪我した状態で発見された少年。そんな彼は記憶喪失だった！？しかも気づけば貴族の屋敷で執事になっていた……。唯一残されたのは名前だけ、今、前代未聞の物語が始まる……。かもしれない。現在、解雇中……。

独自設定、原作改変などが含まれます。ご注意ください

タイトルが違いますが旧題「執事にされた記憶喪失少年」です

番外編は幻想入り・・・？

プロローグ（前書き）

どうも、過去から学べない馬鹿、駄作工場長をしている者です。今回もいつもの発作が起きて完結できるはずの無い新作……。もうさ、寛大な人だけ読んでください。私はもう知らない！

プロローグ

「君、大丈夫！？今手当てするからね！」

綺麗なブロンドの女性が大怪我をしているらしい俺を抱きかかえる、
どうやら近くにいる人間に指示を飛ばしているらしいが・・・そこで視界が真っ暗になった。

「う、ん？ここは・・・」

次に目覚めたのは薬品の匂いが充満する場所、白い天井には蛍光灯が設置されており部屋を明るく照らしていた。おそらく病院なのだろうが・・・如何せん身体が痛い、すぐに動けるような状態では無かった。

「あら、起きたみたいね。気分はどうかしら」
「あなたは？」

見覚えが無い、まあ当たり前ではあるが・・・。

「私はミリア・オルコット、あなたは？」
「ご両親に連絡しなくちゃいけないのよ」

「・・・・・・・・・・」
「どうしたの？」

わからない、自分が何者なのか。記憶を探っても何も出てこない、家族も、思い出も。

「お、思い出せないです。なにもかも・・・」

「あらあら、それは大変ね。名前はどうか？」

どうにか探る、それだけはすぐに出てきた。

「き、如月音羽きつるぎおとのは」

「如月君ね、あとは覚えてないのね？」

「は、はい。それ以外は・・・あの、俺はどうなるんですか？」

一番気になることを尋ねる、おそらく孤児院行きだろうと思っていた俺の耳に驚くべき言葉が飛び込んできた。

「家で働いてみない？ 孤児院に行くよりは良いと思うわよ」

プロローグ（後書き）

なんかさ、一巻から読み返したら衝動的に書きたくなったというww

今までもこうやって始めてさ、何回も失敗してるのにね。やっと「IS・ゴースト」で克服できたと思ったのに・・・orz

多分、向こうで行き詰ったときにこっちを更新すると思います。

過去から学べない私を誰か許して！

1 始まり（前書き）

ゴーストが投稿の一手手前で消えたショックから立ち直れないままです

1・始まり

「は？」

わけがわからない、ただそれだけだった。普通ならば見ず知らずの子供などを面倒みるよりは預けてしまったほうが良い。まして働かせるなど……果たしてそこまでの余裕があるのか？

「簡単な話、執事をやってほしいのよ」

「いや、正直俺はまだこんなですし」

事実、10歳程度なのだ。どうやら知能レベルは高いみたいだが……できるのだろうか？

ポケットに入っていた身分証らしきものには11歳とあったが、戸籍記録に俺の存在は無いらしい。

つまりは「存在しない人間」ということだ、はっきり言って面倒ごとなのは目に見えている。

「細かいことは気にしなくても良いわよ、まあ執事と言うよりは護衛だけだ」

む、むう。ここは好意に甘えさせてもらうのが得策なのか？戸籍が無いんじゃない孤児院にも預けられないし、この人にも要らぬ迷惑を掛ける。

「やります」

「はい、よろしくね」

こうして、俺、如月音羽の新たな生活が始まった。

1・始まり（後書き）

原作5年前からです、えっと・・・セシリアは10歳ですね

2 初仕事（前書き）

短い！

2・初仕事

「もしもの為に私の娘を守ってほしいのよ」

そうして連れて来られた場所は大きな屋敷、門の前にいるのだが・
・外壁の端が見えないとはどういうことなのだろう？まあ、気にしている暇は無いのだが・え、娘・・そりゃあ、11歳には自分の身を任せられないだろうけども。

「今日から配属になりました、如月音羽です。よろしく願いします」

ひとまず、最初の挨拶は大事だよね。これから世話になるんだ、助けてもらった恩もある、全力で頑張ろう。

「軍隊みたいね、その挨拶」

「ふへ？ああ・・・そうですね、以後気をつけます」

うゝむ、一体以前の俺は何をしていたのだろうか？気になるなあ・
・まあ、気にしても仕方ないか。

「・・・・・・・・・・」

なんなんだ、この俺をじゅつと見つめてくる金髪の娘は？「この娘をお願いね」ええっ！？

すごい警戒されてるんですが、軽く睨まれてるし・・・やっていけないのかなあ。

「お、お嬢様でよろしいでしょうか？」

「セシリアと付けるのをお忘れなく、あなたが執事ですの？」

「はい、全力で仕えさせて頂きます。音羽とお呼びください」

く、年下にとは・・・いや、仕事だから仕方ないか。ああ、こんなきつい感じの子を相手にか・・・。

旦那様は媚売ってるような感じだし、そうならば自然にこうなってしまうか。女尊男卑の社会の極端な例か。

「では、紅茶を」

「！はい」

移動するセシリアお嬢様（なんか抵抗が・・・）を確認しながら専属メイドのチエルシーさんをお願いし、自身はテーブルの準備を・・・！ああつ、もう座ってる！つと、運んで・・・。初日でこんなにできるかああああ！！

「はあ、はあ、はあ。・・・ふう」

「もう少しゆっくりでも良いですわよ？」

「はい、善処致します」

う、恥ずかしい・・・むう、だって早く出したかったし。どうせならすぐにできたてを出したいじゃないか、息をぜえはあやってたら意味無いが。

「あなた、名前は？」

「は、如月音羽でございます」

「そう、ではこれからよろしくお願い致しますわ」

「は！なんなりと申しつけください」

うん？好感触・・・なのかな、そうだったらいいなあ。

2 初仕事（後書き）

多分、次の更新は遅くなります

3・初日終了

「は~~~~」

どうにか初日の仕事を終えて、入浴中。え、早いって？そんなの知るか、俺は疲れたの！

「はああ・・・なんとかやれたけど明日からが本番か」

今の時間は午後11時、もう既にほとんどの人は就寝している。早く俺も寝なくてはいけないな。

明日は6時から起こしに行つて・・・学校に送つて・・・その間にまた色々をやつて。

「・・・銃器の携帯は強制って言われたしなあ、そこまでなんかなあ」

どうやらオルコット家はその筋では有名ならしい、ミリアさんは大企業の社長だつて言うし。なんでそんな人が道端に倒れていた人間を見かけたのかはわからないが、まあ、感謝はしてる。でも、全身が赤く染まつてるほどの怪我だったのに俺が目覚めますまでの数時間でほぼ完治してしまつていたらしい。

「まあ、気にしてもしょうがないか・・・？」

なんかカラカラって音がしたぞ、誰か来たのか。こんな時間にとは誰だろうか。

「お疲れ様、どうだった？」

「ミリアさん、まあ、なんとかです」

なんとかとしか良いようが無い、なにせほとんど30点（自己評価）だったからなあ。まだまだ改善すべきところはある、仕える主に心配されるようでは意味が無い。というか笑いだ。

「って、まだ起きてるんですか？」

「さっき片付け終わったところでね、社長は大変なものよ」

まあ、有名な大企業レベルだとそうなのだろう。まあ、上に立つ人間ができる奴じゃなければ成り立たないとは言っし……。俺って記憶喪失なんだよな？

「そうだ、音羽君の記憶喪失って全生活史健忘みたいよ」

「自分に関することだけ思い出せないって言うタイプですか？」

全生活史健忘（Generalized Amnesia）

発症以前の出生以来すべての自分に関する記憶が思い出せない（逆方向性・全健忘）状態。自分の名前さえもわからず、「ここはどこ？ 私は誰？」という一般的に記憶喪失と呼ばれる状態である。「記憶喪失」と同視されている。障害されるのは主に自分に関する記憶であり、社会的なエピソードは覚えていることもある。

多くは心因性。まれに、頭部外傷をきっかけとして発症することがある。発症後、記憶は次第に戻ってくることが多い。治療としては、催眠療法で想起を促すことなどが行われる。

（Wikipediaより抜粋）

「やっぱりね、てか詳しいのね」

「うーん、もどかしいなあ」

「時機に戻るわよ、それまではここで頑張ってみなさい。あなたならできるわ」

はい、まあ、やってみるしかないよね。もし戻らなかったらここで正式に雇ってくれるって言うてくれたし。

「じゃあ、おやすみなさい」

「はい」

「どうか、セシリアをお願いね」

それが何を意味しているのか、その時の俺には想像もつかなかった。

3・初日終了（後書き）

もう少ししたら飛びます

4・とあるいつもの

「お帰りなさいませ、セシリアお嬢様」

一年も経てば仕事も身に着く。え、時間経過が早すぎる？誰が自分の醜態なんか晒したいんだよ。

笑われたんだぞ年下に！まあ、一つ下くらいどうってことは無いけどさ。

「さてと、チエルシーさん浴場は？」

「いつでも入れます！」

最近風呂に帰宅後すぐに入るようになったセシリア、うん、風呂は良いよ！疲れがとれるからね。

ちなみに、俺は名前や見た目からして東アジア系。おそらく風呂好きから日本人らしい。というかDNA検査で日本人に一番近かったらしいが。

「音羽」

「はい」

最近だったらこれだけで何を要求されているか一発でわかる、今は『風呂上りのアイステイー』だ。

個人的にはアイスボックスなのだがなあ、まあ意見はしないけど。

「やはりこれに限りますわ、ねえ？」

「個人的にはピノですがね」

「それは何ですか？」

「日本で販売されている氷菓です」

やっぱり意見する、うん、雪見大福も良いよね！アイスが好きなんですか？もちろん！

「そのうち食してみたいものです」

「そうですね」

「結局執事らしくありませんわね、音羽」

勝手に言ってくれ、自分でもわかるけどさ。まあ、仕える身なのに敬語使わないとかは納得だけど。もっとフリーダムでも良いと思うんだ、やるときはやるけども。

「あ、そういえばアイスクリーム店ができたらしいですね」

「早速休日に向かいますわよ！」

なにぶん、甘いもの・アイス好きってことで打ち解けたのも大きい。最初に比べて結構話すし。

最近では暇な時間にちよつとしたお菓子を作って出すこともある、しかも中々に好評だ。

ミリアさんもこの前はサンドイッチを持っていたし。作った甲斐があるというものだ。

「その前にヴァイオリンです、あともう少しですからそんなに落ち込まないでください」

「はあ、やらなくてはいけないと分かっているても憂鬱ですわ」

まあ気持ちはわかるけどさ、どっちかって言ったら俺だってやらせたくないよ。

オルコット家が舐められるのが嫌だって気持ちは同じだから仕方ないけどさ。

「そついえば来年の6月にはもうリニアトレイン開通ですね」

「お母様が招待されていますわ、本来ならばわたしも行きたかったのですが」

まあ、企業トップとか代表に対してのお披露目式だからなあ。いくら娘でも無理だろう、その日は確か運動会だったっけ。

4・とあるいつもの（後書き）

やべえ、フラグや（両親の）

5・いつもなオルコット家

もはや日常と化した燕尾服執事が掃除機片手に歩き回る光景・・・俺だよ。

なんかこう座ってらんないんだよね、お掃除ロボットと一緒に掃除機を走らせる。

「~~~~」

え、係の人に任せろって？俺の暇つぶしを取らないでくれ、後は全クリアしたP P版IS/V Sくらいしか無いんだ。何もすることが無いときに裏ルートとかまで行っただし。することが無い。

「ん？ありや、壊れてんのか」

突然その場で回転・・・わ、ここまで高速で回転できるものだったか？何故か独楽のように回り始めたお掃除ロボットを掴み自室に向かう。暇人の力をとくと見よ！

「ふゝむ？ああ、シャフトが曲がってるのな」

暇すぎた結果身に着いた器用さでドライバーやピンセット、ペンチを動かす。手先が器用になったは良いけどこれが暇人の末路と思うと空しい。普通は暇だからって専門書を読まないと思うが・・・それしか無かったという現実。身に着いて損はしないけどさ、なんか悲しいのは俺だけか？

「マスター、お嬢様が呼んでいます」

「え、そう？わかった」

絨毯が敷き詰められた廊下を先導して走るのはサポート用ロボット
のメタルギアmk?。いや、できるかな。って休暇のときに2日
でMGS4をクリアし、3日で急造したんだ。女尊男卑の世の中
でもああいうゲームがあるのは嬉しいところだ。

「ただいま来ました」

「音羽、ちよつと相手になつてくれませんか?」

そう言つて手渡されるのは一本のラケット、セシリアの手にはラケ
ットとシャトルが握られていた。

mk?はなんか得点板の近くに移動してるし、バドミントンしろと?

「まず着替えさせてくれ」

「すでに準備していますマスター」

ワイヤー状のアームには運動用のジャージが握られている、なんで
ここまで完成度高いんだろうか。

というかこの光景が普通になっているのだから凄い、セシリアに至
つてはお気に入りらしい。

「つと、その前にお客さんか?」

「そうみたいですわね、数は「7」です」そうですか」

名家である以上その遺産は莫大なものになる、無論それを狙う輩は
必ずいる。その令嬢となれば狙われるのは当たり前である、人質と
しての利用価値に奴隷としても。そんな奴らからの守護を命じられ
ているのが俺なんだがな。

「mk?、セシリアを連れて中へ」

「了解です」

「音羽、頼みましたわよ」

「終わったら続きをしましょう」

足元に敷き詰められたタイルの一つ、注視しなければわからないレベルで飛び出ているそれを踏む。オルコット家本邸に設置されている自衛用のガンストックの一つ。それが目の前に音を立てて展開される。

「守られる」のではなく「攻める」

これが長い間オルコット家が生き残ってきた理由らしい、ミアさんも一度組み手してもらったけど強かったし。そのときに銃器の扱いも基本から叩き込まれた・・・。

「とはいえ、まだ11の子供には撃たせられないよなあ」

俺は12だが・・・。

ストックに立て掛けられているM4カービン（硬化ゴム弾）を構える、なあと精々痛いだけだよ。当たり前所悪いと骨にヒビ入るけど。

「もらい！」

特注のドラムマガジンからゴム弾が絶え間なく供給され、木の陰や柱の上などあちこちの侵入者の額を撃ち抜く。流石に子供に人殺しはさせない、というか殺さずに撃退できるのならばそうする。

「ぴぎゃ！」

「ふみゃ！」

「んのわあ！？」

「ぎゃあ！？」

「ぬぶ！」

「ウゾダンドコードン！」

あゝあゝ、どさどさと地面に落っこちてくる侵入者（笑）。そりゃあ額に大きい衝撃が走れば普通にはしてられないよな、なんか聞こえたが無視するけど。

「さてと、そろそろ来たらどうだい？」

「素晴らしいな、流石オルコット家のと言ったところか」

拍手をしながらこちらへ歩いてくる男、身長は高すぎて俺じゃあ頭は触れられないか。というか2mは普通に超えてるよなあ・・・正直そんなでマッチョとか気持ち悪い。さっさと倒してしまおう、うん、そうしよう。

「マスター、こいつら纏めておきます」

「ああ、わかった。セシリア、もうちょい待ってな」

「はい、急いでくださいね？」

「りょーかい」

え、大男空気って？知るかそんなもん、勝手に入ってきて邪魔しやがった奴に平等に対応すると思ったら大間違いだ。

「無視すんなコラー！！！」

「はいはい、逆ギレ乙！っ」と

ベキゴスドゴ！

ラリアットをしゃがんでかわし、隙を見つけたらそのまま足を引っかけ転ばせる。もちろん足首の関節は外して、じゃなきゃ逃げる

からね。ついでに後頭部を肘で殴りつける、はいおしまい。

「いつ見ても上手くやりますわね」

「ははは、じゃあmk?頼む」

「はい」

気絶した大男をmk?が引きずっていく、ちなみにこれも日常の一部だったりする。いや、普通じゃないだろうけどさ。

「じゃあ、やりましょうか」

「ええ、負けませんわよ!」

今日もまた賑やかなオルコット家です、と。そういや明後日はリニアラインの記念式典だったけか、今日から1週間はミリアさんがいないから俺が管理してる。といっても全部の指揮権はセシリアにあるんだがな、なんでも有事のさいは全て任せるんだとか。やっぱ出来る人は考えが違うね、用心にこしたことは無いってことだよ。

「さあ、手加減しませんよ?」

「勝ったら今日はわたくしが夕食作りますわよ!」

え、それは防がねば!

5・いつものオルコット家（後書き）

あゝ、両親フラグ！

ちなみに名前呼びしてるのは仕事振りが認められたから・・・
と言う名の実フラグ立てだったり（展開の都合上によりまだ見せません）

6・とある朝の風景（前書き）

のどかだねえ・・・

6・とある朝の風景

「ふああゝゝゝ、朝か」

午前5時、俺の一日の始まりだ。いつもはもう少し寝てるんだがミリアさんが式典参加で不在のために俺が実質仕切らねばならない。

「mk?、皿並べておいて」

「はい、マスター」

あゝ、午前の仕事終わったらmk?の整備しよう。もしもの為にREXみたいにしよう、うん。

つてその前に窓開けなくちゃならないな、雇ってる人員が少ないし他の人は休ませたいから俺が率先してやる。

「それにしてももう二年ちよつとになるのか、早いなあ」

俺がボロボロの状態で病院に運ばれ、ミリアさんに雇われて執事兼護衛をしてもう二年。思い返せば言葉にできないほどに助けてもらった。

「一生かかっても返せないなこれは、つてやべもう七時だ!」

八時にはセシリアを学校に送らねばならない、しかも俺が起こすことになってるんだよ!遅刻なんてさせられない、いや、いつもこんな時間だけでもさあ。

「おっはようゝ、朝だぞ。起きろゝ!ふぐわ!」

「五月蠅いですわ、もう少し静かにできませんの!?」

うん、騒がしく起こしたから枕を投げつけられた。当たり前か、朝から元気が出るようにと思ったんだがなあ。

「ホント、執事らしくない執事一位も領けますわ」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてませんわ！まあ、護衛としては優秀ですが」

とふざけている暇も無いか、さつさとしなければ遅刻してしまうし。それにそんなことがあれば帰ってきたミリアさんにボコられる。それだけは勘弁したい、なにせ娘のことになるとあの細身の体からは想像できない力出すから。

「さあさ、今日は味噌汁に納豆とたくあんに卵焼きとほうれんそうのおひたしですよ」

「あゝ、今日は納豆ですか」

誰だ、貴族らしくない朝食だ！って言ったやつは、いくら資産があつてもいちいち高級なものばかり食べるわけないだろ。それに日本食ブームらしいから良いんだよ、味噌汁は気に入ってるらしいし。納豆が苦手らしいけど。

「好き嫌いはダメだぞ、綺麗でいたいならしっかり食べる。いいな？」

「わ、わかってますわ。まったくもう、卑怯ですわその言い方」

「なんか言ったか？」

「なんでもないですわ！」

なんだろうか、ここ数ヶ月俺と会話してるはずなのに語尾が小さくなることがある。今時はそういうのが淑女のたしなみなんだろうか、

俺はわからないから指摘しないけども。

「今日は音楽発表会が9時からなんですから、急いでください」

「8時には会場入りでしたわね、音羽、車の準備を」

「はいさ〜！」

え、なんで未成年が運転できるって？するわけないだろ、mk？に任せるんだよ。一応AI載せてるからそれくらい簡単だし。

「マスター、準備終わりました」

「行きますわよ！」

「おし、mk？出してくれ」

向かうは音楽発表会が行われるエルウィンホール！

6・とある朝の風景（後書き）

あと2・3話で急展開の予定

7・日常への亀裂

さて、到着したはいいが・・・Dの35つてどこだ？親の代わりとして入ったはいいが、広すぎてわからん。

というか小学生レベルの奴が親代わりに観客席にいるってのも不思議な話だが。なにに、案内板によると、おおすぐそこだ。

「ふう、これで落ち着いて見れる」

ふかふかの座席に座り、腕時計を確認する。そろそろだな、確か合奏でヴァイオリン演奏だったっけか？

いまだにこういう高級椅子には慣れない、気持ちよくて寝ちゃうんだよな。今日は寝る暇なんて無いけども。お、始まったみたいだ。

中学クラスのグループの次に小学生クラスの順番だ、流石中学生と言ったところだった。

「それでは最後に『チゴイネルワイゼン』です」

確かサラサーテ作曲1878年の作だったか、ギャグマンガから舞台まで幅広く使われる誰もが一度は聞いたことがあるはず。mk？
にアラームで鳴らされたときは驚いたけども。

た~~~~~~~~

特徴的な始まり、う~~~~んなんともサスペンス劇場な感じ。おお、手さばきが上手くなってる。俺の場合はPCかmk?で弾くから全然弾けない・・・別にいいさDTMで。

「お疲れ様、良かったよ」

「と、当然ですわ!」

帰りの車の中で向き合いながら談笑する、付き添いで練習して良かったな。終わったあとは拍手喝采の嵐だったし、できたらミリアさんにも聞いてほしかったな。まあ、録音はバッチリだしあとでメールで送ろう。うん、そうしよう。

「よし、じゃあ今日は久しぶりに腕振るっちゃうかな」

「お母様にも聞かせてあげたいですわ」

「ん、じゃあさっさとメール送るか、ちょい待ってな」

ケータイを胸ポケットから取り出す、このときほどこの行動を後悔したことは無かった。

緊急ニュース速報が画面の下を流れる、そこに表示される『リニアトレイン試乗車事故、生存者不明』の文字。

「どうしたのです、そんな蒼白にして」

「まあ、待て。まずは戻ろう。mk?、急いでくれ」

落ち着け、まだ詳細は分からないんだ。いや、おそらく信じたくないという拒否反応からなのか、それとも突然すぎて感覚が麻痺していたのか。

「お嬢様！音羽さん！」

「わかってる。セシリア、早く来い」

「なにが……」

客間に入った瞬間、その場にいる誰もが口を閉ざした。テレビ中継される悲惨な事故現場を、陸橋の一部が砕けリニアトレインが地上13mから転落。炎上している光景を。

「そ、そんな……お母様……」

「待て、セシリア、気をしっかり持て。まだ決まったわけじゃない」

いや、誰もがこの映像を見て生存者がいると言えるわけがない。画面いっぱい火の赤が広がり、今まさに燃えているのだから。車両は炎に包まれて黒煙だけが立ち上っている。

「チエルシーさん、セシリアを向こうへ」

「はい、確認をお願いします」

結果は悲惨だった、1週間後に届いたのは両親の遺体が見つかったとだけ。確認には俺だけで向かった、無論、セシリアに見せられる状態ではなかった。おそらく、一番大変なのは明日からだろう。

「ただいま戻りました」

重苦しい空気が客間を埋め尽くす、もう誤魔化せない。言うしかない。

8・離別・決意・出発

「そう……ですか」

オルコット家本邸はいつも以上に暗い雰囲気が充満していた、だが、泣くことは許されない。

目の前のテーブルにはミリアさんの自室にひっそりと仕舞われていた遺書がある。そしてその内容は思いもよらないものだった。

「もし、これが読まれているのなら私はこの世にいないでしょうね
おそらくこれを読んでいるのはセシリアとチエルシー、音羽君でしょうね。」

あれこれ書く前に言っておくわ、ここに書かれたことは絶対に行くこと。

例え不満があっても必ず。

まずはセシリア、あなたはもう十分自分で立つて生きていけるはず。
勿論、まだ子供のあなたには大変かも知れない。

それはわかってる、でも一つだけ。あなたの名、オルコット家を守り抜いてちょうだい。

おそらく遺産目当ての親戚が大勢来るでしょう、いや、もう来たかな？

ただ、あなたの帰る場所をあなたが守ってちょうだい。これが母である私からの最初で最後のお願ひ。

チエルシー、幼馴染であるあなたにはセシリアの傍にいて支えてあげて。

酷かもしれないけど、あなたに教えたことを使つて。
メイドであるあなたに頼むのは正直悪いと思つてる、だけど、どうかお願い。

音羽君、あなたは拒否してしまうかも知れない。

あなたの気持ちもわかるけど、残念ながら私が残したものではない。あなたのことを守りきれない。

私が生きていたなら護衛を頼めたのだけれど、右目のこともあるから。

あなたがこれを見た翌日、あなたを解雇して日本に移住させます。

あなたには生きていてほしい、そのための手段なの。

許してちょうだい、今のあなたを守るほどの力が無いの。

「そ、そんな」

「まあ、そりゃそうか。戸籍無し・記憶無し・右目は軍の兵器、隠すのが難しいか」

つまり、俺は無理をして守られていたということ。俺という一人の人間のために。

一年前にあつた誘拐事件、その時に発現した右目の擬似ハイパーセンサーらしきもの。

ドイツで生み出された技術らしい、そんなモノを持つてる人間を秘匿するなど普通の人にはできるわけがない。

「わかりましたお母様、音羽、チェルシー。わかりましたわね」
『はい』

もし、俺が残ればオルコット家が危険に晒される。結局は俺が出て

行くしかない。

俺ができる恩返しはそれしかない、まだ幼いセシリアを置いて出て行くのは気が引けるが。

「気に病む必要はありません、あなたには生きていてほしい。それだけです」

「ッ・それ言ったら卑怯だよ、わかったよ。ただし、ここを頼むぞ」

「わたしもいます、心配しないでください」

手続きや屑な親戚を脅してスッキリしたとある9月の朝、場所はロンドン・ヒースロー空港第三ターミナル。一応あれこれやっている内にあつと言う間に三ヶ月、まあ親戚共は掃除できたし大きい心配事は無い。頑張っ^{クス}てイギリスの代表候補生になってやるって言ってたし、あの目は本気だ。

「じゃあ、セシリアのことお願いします」

「お任せください、何があっても大丈夫です」

チエルシーさんがいるし、もう大丈夫か。あとは俺が生きていけるかだ。

「じゃあ、セシリア」

「ええ、でも、たまには連絡くださいね」

「わかってるって、元気だな」

「はい！音羽もお元気で！」

搭乗口へと歩く、振り返ると涙目のセシリアが手を振っていた。俺も振り替えず、おそらくもう二度と会えないだろう。二年という短い間だったが、一生俺はあそこで過ごした思い出を忘れないだろう。最後にセシリアへ向けて敬礼をする、さようならセシリア。そして、ありがとう。

俺を乗せたジェット機が名残惜しそうに飛行機雲を作りながら空へと飛んでいった。
救ってもらったこの命、絶対に無駄にしない。必ず生き延びる！そう決意した俺を乗せ飛行機は遙か遠くの日本へと向かっていった。

8・離別・決意・出発（後書き）

次回から新生活の始まりです

9・主人公設定

きんぐおとけ
如月音羽

年齢（原作開始時）・17歳（年上）

性別・男

容姿・灰色がかった肩までかかる黒髪（変装のつもり）そのため
女子と間違えられることがある。赤いフレームのスクエアレンズの
眼鏡をかけている。基本的に左サイドテール。

身長・176cm

体重・測定不可

全身に怪我をし路上に倒れていたところをオルコット家当主、ミリ
ア・オルコットに保護される。

身の安全のために匿われ娘であるセシリア・オルコットの執事兼護
衛として暮らす。

二年後、セシリアの両親がリニアラインの事故で還らぬ人に。

音羽自身とオルコット家の安全のために遺書によって解雇、日本へ
移住。

隣家の織斑家とは親しく、一夏やその友人の弾に音兄と慕われる。
プレイしたゲームに登場したメタルギアmk?を実際に作ってしま
うなど手先が器用だが、曰く「暇人の末路」らしい。

護衛をしていた経験から銃器の扱いに長けている。また、素手での
格闘戦も得意で1対多は特に強い。

執事兼護衛を始めて一年経ったところにセシリアとともに誘拐された

時に、右目の空間展開型擬似ハイパーセンサーが発現する。（イメージは無音ゼロのあれ）

オルコット家に保護される以前の記憶が無く、今でも戻っていない。明るい性格だが、今でもオルコット家の墓には毎年墓参りしている。経験から人を助けることに躊躇が無い。セシリア曰く「執事らしくないですが頼りになる」らしい。

藍越学園受験予定（執事教育の結果中1時点で中学内容はクリアさせられたため余裕）

偶然か織斑家の隣家を借りて住んでいる。

9・主人公設定（後書き）

原作開始三年前です

10・出会い・邂逅・物忘れ

「（、'。）」

日本に着いてから2週間、そこまでは良い。俺今いくつだ？・・・14だ。中1だな、うん。

なんで顔文字かって？餞別として極秘ルートで配送され昨日届いたアタツシケースにうん千万と入っていたからさ。現在間借りした一軒屋の居間にて荷物を片付けたところだ。

「そりゃあ、なにかと中1は金がかかるだろうけどもさあ。こんなには必要無いんじゃないかな」

いやまあ、未成年の生活だから金が必要になるけどさ。ちなみに転校生として近所の中学校に入ることになっている。まあ、今は先に今日の夕食を作らねば。現金は隠して・・・と。

「マスター、不審な動きはありません」

ちなみにmk？は足が着かないようにとオリジナルは持ってきた、もう一台は置いてきたが。

流石に一人では状況把握ができないのでスパコン並みの性能を持っていたmk？に監視や調査は任せてる。例えば町内の監視カメラにハックして見張りしたりなど。

「ふう、あ、やべ」

考え事をしながら野菜を炒めていたらなにか焦げた匂いが・・・うわわわわ。

「あゝ、勿体無い」

「考え事をしているからです」

う、痛いところを突きやがって。その通りだけでもさあ、誰がこういう性格にしたんだか。

ああ、俺か。まあいいや、明日から学校か。執事の教育で中学レベルを制覇させられた俺はどうしろと？

ピンポン

インターホンだ、この時間に誰だろうか。

「はい、どちら様でしょうか？」

玄関の扉を開けると一人の見知った小学生がいた。名は織斑一夏、有名な初代ブリュンヒルデの弟だ。

だが最近姉の千冬が帰ってくるのが少なく、一人でいることが多い。

「多く作っちゃったから、おすそわけ」

「ん、またお姉さん帰ってこれないのか。だったら上がりな」

そのため、お隣さんということでもたまにこうすることもある。昨日は鈴音^{リンイン}って言う女の子と一っしょだった。彼女の家が定食屋ってことでたまに世話になることもある。

「ふん、そうか。そりゃあ良かったな」
「うん！」

夕食を終えてソファーに座りながら談笑する、そっぴーや一夏たちは来年中学生になるのか。そのときもこの町で暮らせてたら良いなあ。

「あ、もう9時だ。じゃあおやすみなさい！」
「おう、おやすみ」

一夏が帰る、俺も明日への支度を終わらせて眠りについた。

翌日、朝7時。

「よし、制服もよし。さあて、頑張りますか」

鞆に道具を詰めて戸締りを確認し玄関の扉を開ける、陽光が筋になつて足元を照らす。

目指すは徒歩15分の並木野中学校。

「あら、あなた見ない顔ね」

「ん？この人か、今日からなんだ」

「転校生なの？」

曲がり角で会ったこの青い髪の少女、どうやら並木野中の生徒らしい。というか日本で青い髪とか、見たことないな。

「俺は、如月音羽。君は？」

「私は更識楯無、ところであなた男なの？」

う、それを言われるとなあ……。流石に本当のことは言えないが。

「まあな、髪型は……。訳あつてな」

「そう、よろしくね」

そのまま握手をする、はて、更識……。何か忘れてるような。まあいいか。

こうして、俺の中学生生活が始まった。

11・女尊男卑・立体機動

「初めまして、如月音羽です。こう見えても男です、よろしく願います」

並木野中学校1年3組、教壇の前で俺は自己紹介をしていた。担任は岸川頼子先生、なんか今時の女性臭がするのは気のせいだろうか。

「如月君は・・・更識さんの隣で良いかしら？」

「はい、構いません」

む、朝に会った女の子か。まあ良い子そうだし問題無いか、さあて早速授業を。

「ふふふ、改めてよろしくね楯無でいいわ」

「おう、よろしく。音羽でいいぞ」

うん、更識でなにか忘れてるような。別にそうでも無かったような、いいや、授業に集中しよう。

やあ、二時間目の数学が終わったところだよ。正直に言おう。

「（簡単すぎるう！）」

簡単な話、高校生に小学一年生の問題をやれって言われてるようなもの。執事教育恐るべし、そして退屈だ。

「音羽、いつしょにお昼食べない？」

「ああ、良いぞ」

どうやら並木野中は昼食を持参の弁当か食堂で済ませるらしい、普通は給食じゃなかったか？

しつかり準備はしてきたが楯無さんはどうなんだろう。

「友達もいつしょで良い？」

「ああ、できればたくさんの人と友達になりたいしな」

屋上に移動すると眼鏡をかけたポニテ女子が楯無さんの後ろを歩いてきた、何、眼鏡かぶってるだと・・・！？

「布仏虚です、以後よろしくお願いします虚とお呼びください」

「こちらこそ、虚・さん。如月音羽です。気軽に音羽って呼んでください」

やはりかしこまられると呼び捨てできん、流石に癖は簡単には抜けないか・・・。

「・・・ちよいと昔の癖だ気にしないでくれると助かる」

「わかりました」

おお、虚さんは話がわかる方のように・・・なんかお嬢様の付き人みたいに思えるのは気のせいかな？

「あ、もう午後の授業始まるんじゃない？」

「げ、あ、虚がない！」

気づけば虚がない、屋上に取り残されたのは俺と楯無だけ。ええい、背に腹は変えられぬ！

「I c a n F r y！」

楯無を左腕で抱え、屋上のフェンスを飛び越えてダイブ。

「え、ちょ、きゃあああああああ！！！」

地上20mからの降下、パラシュート無し、女の子抱えて。やれる、このワイヤーアンカーがあれば！

バシユンッ！！

「でえい！！！」

降下、もとい落下しながら校舎の反対側。窓が開いている場所にアンカーを突き刺し、滑空移動。

いつ作ったそんなもの？暇なときに決まってる、というか授業に遅れるわけにはいかん。

楯無曰く「あの国語教師、遅刻したら放課後に教育的指導と言つ名の組み手なのよ」「らしい。

「俺に構わず先に行け！」

「・・・わかった！」

いやまあ、楯無を先に入らせなきゃ俺が入れないからってだけなんだよね。

というか、そのノリの良さ。嫌いじゃない。

その後、どうやら俺だけ遅刻だったらしい。0・1秒の・・・ま
あ遅刻だけどそれに気づくってどういうことだよ。

11・女尊男卑・立体機動（後書き）

こんなの出してっという機械があったら感想やメッセージでどうぞ

ちなみに今回は「立体機動装置」

12・腕(ココ)が違っんだよ(前書き)

スポーツと実戦は違っって話

12・腕(ココ)が違っんだよ

「さあて、如月。初日から授業に遅刻とはわかってるだろうな？」

体育館(6時間目が終わり畳が出されたまま、柔道やってたみたい)で俺は教育的指導を始められようとしていた。

「今後気をつけます、申し訳ありませんでした」

ちなみにこの国語教師(名前は知らん)は生徒内でも嫌われている、教師内でもあまり良い評価ではないらしい。噂だが前の勤め先でやらかしたとか……。そして女は偉いから男は言うこと聞けって思考。

「さて、では始めようか」

「倒せたら帰って良いんですね？」

今まで勝てた人がいないらしいが、ギャラリーでも「勝てるわけが無いYO!」とか聞こえる。

なんでも性格には難有りだが格闘技の実力はそれなり、高校時代には全日本で2位だったとか。知らんけども、これは言える。

「それだけの技術をこういうところで使うなんてね」

「ええい、教師に楯突くとは!」

って直線的に突っ込んできたところを右サイドへ避けてそのまま足払い

「のああ！？ぐふう！？」

倒れこんだところを後ろから首筋に3連続で肘を叩き込む、もつとでかい大男と戦ったときより随分と楽だ。

『おおおー！』

いつの間にか大勢になっていたギャラリーから歓声が聞こえる一応手を振り替えてみよ、って岸川先生がすげえ手を振ってる。思ってたより良い人か？というか目で「もつとやれ」って言わないでくれませんか、一応教師でしょ。悪い気分じゃないけどもさあ。

「ま、まだまだあああああー！」

「俺に勝てたら言うこと聞いてやりますよ」

久しぶりに身体を動かすからなあ、ウォーミングアップも兼ねてやろうかな。

え、失礼だつて？教師として外れてる三流に真面目に相手するかよ、まあ遅刻したのは悪いと思うけども。

「っでつやあああああー！！」

ラリアットをしてくるが、その腕を始点にし肩車状態になる。

「ごめんねえ」

「な、うおぎやあー！？」

体重をかけ、振り子のように揺れて反動でバランスを崩させて倒す。あれだよ、バイオ5のジル戦でシェバがやる体術。名前知らんけど。あの乗っかってバタンのやつ。

「ふう、もう良いですか？」

正直疲れた、精神的に。というか中1に負ける元有段者って……いやまあ、俺が教わったのが全部実戦用のばかりだからかも知れないが。

「如月君かつこいい！」

「転校生すげえええ！」

「けしからん、もつとやれ！」

なんか混じってる気がするが、まあいいか。さて、勝ったんだし帰ろうかな。そろそろ一夏を迎えにいかねばならん。

「はい、さようなら」

後ろから飛び掛つてきた先生（笑）を両腕を掴み目の前の床（木製）に勢いを殺さずに叩きつける。もとい突き落とす。どうやらそれがトドメになったのか動かなくなった・・・あ、気絶してる。

「……じゃあ、みなさんさようなら。また明日ね」

さあて、一夏を迎えに行くか。確か買い物するって言ってたけど荷物持つの大変だろうし。

このときの俺はある人物に尾行されているとは思ってもよらなかった。

13・追跡者と食堂と俺の奢り

「音兄、手伝ってくれてありがとう」

「なあに、お前がいつも頑張ってるからだよ。じゃあ気をつけてな」

近所のスーパーに学校を終えた一夏と鈴音ちゃんを迎えに行き、一夏の買い物に付き添った俺は一夏と別れて空き地へと向かっていた。それにしても鈴音ちゃんは可愛いねえ、いやけしてそういう趣味じゃないよ。

元気にしている子を見れるってのは平和な証だからねえ、あ、今日の夕食は鈴音ちゃん家に行こう。

あそこのチャーハンは格別なんだよね。

「さあて、そろそろ出てきたらどうかな？」

学校を出てからずっと尾行されていた、気づかないフリをするのは中々に骨が折れたが。

俺の言葉に反応したのか人影が壁から出てきた。意外な人物・・・では無かった。

なにせ予想はしていたからな。

「ひとまず話は飯食いながらにしないか？楯無」

「あはは、それもそうね」

鈴音ちゃんの家、中華料理店「鳳凰」は俺のお気に入りだ。安くて量も多く、しかも家から近いときた。さらには通学路の途中だから忙しいときに下校中に寄れるという。

「おっちゃん、チャーハンと天津飯一つずつお願い」

「あいよ、ちよい待ってな」

「ご飯系はもう、某コーポレーション会長みたいに「素晴らしい！」って言えるくらい美味い。」

「で、なんで尾行したんだ？」

「いや、まあ。なんで強いのかなあって気になったから、あの子って弟？」

厨房から中華鍋が振るわれる音がする、中華は火力だよな。

「隣の家の弟さん、お姉さんが忙しいらしくてたまに世話してる」

「そう、ところでさあ「逸らすな」もう、連れないわね」

もしかしたら・・・もしかして・・・というかやつぱり更識で何か忘れてるような。

「いや、なんであんなに強いのかなあって」

「え」

「どうしたの？」

「それだけ？マジで？」

え、え、ヲイ。なんだよ、警戒するほどのことじゃなかったのかよあゝあ。そうだよなあ、普通の中学生のレベルじゃないものなあ。この世界のどこに大人と張り合える中学生が居るんだよ。

ああ、俺か。ってそれじゃ意味無いじゃん・・・てか、墓穴掘っちゃったよ。

「本気と書いてマジと読む、あ、この天津飯美味しい！」
「だろ、ここはお気に入りになんだよ」

興味本位ならば別に警戒しなくていいや、あ、チャーハン美味い。
おまけのわかめスープがまた良いんだよね。

「そつえば音羽君って、何かスポーツしてるの？」
「ん、ちょい前まではバイアスロンやってたな」

バイアスロン

バイアスロン（biathlon）とは、二種競技のこと。ラテン語で「2」を意味する接頭辞bi-にathlon（競技）を合成した造語。一般にはクロスカントリースキーと、ライフル射撃を組み合わせた冬の競技が有名だが、ランニング・自転車・ランニングを通して行う夏の「バイアスロン」（デュアスロン）も存在する。

（Wikipediaより抜粋）

「え、すごい！ってことは海外にいたの？」
「まあな、英語くらいならペラペラだぞ」

事実、二年イギリスで暮らせば英語はできるようになる。できなきや生活できないもの、まあISがあるからこそ日本語通じて良かったってのもあるけども。

「それにしてもやり過ぎたなあれは」

確実に学校内で話題になるだろ、なぜにあれだけ生徒が集まったのかは不明だが。

というか、教師数人で「もっとやれ」のアイコンタクトはダメだろ。

「あはは、頑張ってね」

楯無が笑いかけてくるが・・・俺の心はブルーだった、別に水色の髪だったからかけてるわけではない。

「ごちそうさま、じゃあまた明日ね」

「おう、おっちゃん勘定お願い！」

「あいよ」

さて、明日も頑張るかな（目立たないように、手遅れな気がするが）

13・追跡者と食堂と俺の奢り（後書き）

次々回はちょっと飛びます

14・同性の友人・・・求む（前書き）

オリキャラ登場！

14・同性の友人・・・求む

「おっはよう！」

「おはよう・・・」

目の前にいるショート朱髪、身長は俺より下の少女。ジャクリーヌ・ウエルキン、一学年生徒会書記だ。なぜか一昨日のあれを見て勝負を挑まれて返り討ちにしたら、懐かれたっぽい。

曰く「強い人には惹かれるものだよ」らしい、ふうん。

「でだ、ジャック。なんで俺は1学年生徒会副会長やってんだろかね？」

「初日で日本馬鹿（あの国語教師のこと）を倒しちゃったからじゃない？」

なんでも岸川先生の話によると、「生徒からの要望が多くて、ごめんね」らしい。

まあ、あんなの見ればそうなるのも仕方ないのか・・・うん。どうやっても目立たずに暮らすのは無理らしい。

「別に受験有利になるから良いんじゃない？」

「ああ、そりゃあそうか」

ちなみに俺は将来が約束された学び舎《藍越学園》を受験する予定だ、卒業後には地元密着の関連企業に就職できるという。中二っぽい言い方するなって？気にしたら負けだ。

「さあ、一時間目は体育よ。頑張ってね」

「楯無・・・おまえなあ」

ところでジャック（そう呼んでつて言われた）から聞いたところによると、楯無は一学年生徒会長らしい。道理で他の女子が憧れの視線の集中砲火をしているわけだ、その中に俺も追加されたいが（主に男子から、あんまし嬉しくない）

「で、来週の中学校説明会に出ると。まあ副会長なら当たり前か」
「うん、司会やってくれないかな？」

来年入学する小学校6年生に親に対する説明会、その時に必要な書類や体操着などの注文書なども渡される。つまりは来なきゃダメですよ！って奴だ。

「別に良いけども、お前は何するんだ？」

司会なんて夜会で十分経験があるから問題ない、あくセシリア分が足りん。

膝枕して撫でてたあのが懐かしい、まだ少ししか経ってないが。

「私は挨拶と受付「あたしは雑務」そんな感じ」
「で、決めることはあるのか？一年が」

普通は二学年か、三年がやるものじゃないのか？聞いたことないぞ、というかジャック・・・俺の上に乗っかるな。書記が記録取らないなんてどういうことだ。だから俺が今話しながらメモってるわけだ

が。

「以外に万能ね、音羽」

「できることしかできないよ、てか読心術使うな」

そっぴいや一夏も何気に鈴音ちゃんに考えてること読まれてたなあ、まあ顔に出てるからだけでも。

たまに俺も読まれたりする、なんでだかなあ？

「大丈夫よ、セシリア分が足りないとかは言いふらさないから」
「だゝ、もう言ってるじゃんかよ・・・」

あ、つまりは一夏や鈴音ちゃんが来るのか。せつかくだしいいところ見せなきゃいけないな、後輩になるんだし。

「おし、じゃあささと決めること「特になし」は？」

「仕事決めるだけだもの、はい、計画表」

手渡されたのは薄い10ページあるかといつくらいのプログラム表、
m j k

そのためにわざわざ集まったのかい、まあいいや。

「んじゃ、また明日」

「私もついてく」

「勿論私も」

「わかったからジャックは乗らないでくれ」

なぜかジャックが俺の上に乗るんだよ、まあ重いつて言ったら血の雨が降りそうだから言わないけど。

あゝ今日は夕飯どうしようかな。

「そうだ、今日は音羽ん家にお邪魔しよう」
「ちょ」

「あ、それは興味深いわね。そうしましょう！」

その後、両腕を掴まれて強制送還された。その後なにがあったか
つて？

お察しください

14・同性の友人・・・求む（後書き）

そのうちキャラまとめやらねば

あ、こんなキャラ出してほしいという方はどうぞ感想でもメッセージでもどうぞ

15.ここからは音羽の提供でお送りします（前書き）

まともにシリアス書けない

15・ここからは音羽の提供でお送りします

「あはは、凄かったね」

「一人暮らししてるなんてね」

この時期に転校してきた人物として情報収集を続けていたが、一向に出てこない。

一般人ならば個人情報などが出てきてもおかしくは無いのだが、そのデータも全て架空の物だった。

「じゃあ、また明日ね、たてちゃん」

「うん、じゃあね」

ジャックと別れ、再び音羽の自宅へ向かう。あの戦闘能力は一般人が手に入れられるものではない。

まして、あの反応速度。もし敵に回れば更識にとって脅威になる、情報が無いというのが余計にそれを暗に示していた。

「よお、どうした？忘れ物か」

「あ、うん」

買い物袋を持った音羽が近づいてくる、いつもの笑顔だが。今はそれすらも怪しく感じた。

不思議そうに自分を見つめてくる、けして敵意を感じないのだが。

「あちゃ、なら仕方ないか」

難なく音羽の自宅へ再度入る、普通ならば空き地など目立たない場所なのだが。

生憎、近所に空き地は無かった。楯無自身が焦っていたのもあるが。

「ふう、お茶で良いか？話はそれからだ」

すぐにわかった、見透かされていると。まだ未熟とはいえ暗部としての技術を身につけたのだが、それを音羽は難なく見破っていた。やはり、只者ではない。自分の本能がそれを告げていた。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」

「ふにゃあ！？」

楯無が「忘れ物」と言って戻ってきた、忘れ物なんてしていないのだが。遂にか、とは思ったが正直ほとんど心配はしていなかった。まあ、ビビッているのを見て内心こちらが心配させられたが。そついや、まだ16代目が実質仕切ってるんだったか。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」

「ふにゃあ！？」

目の前で緊張して今にも爆発しそうな17代目を落ち着かせようとしたら、なんか可愛らしい声出して驚いていた。もしかして、本番はこれが始めてなのか？

「まったく、せめてもう少し鍛えてから挑めよな」

「くう、いつから気づいたの？」

「ん、昨日くらいに更識のこと思い出した」

これは事実だ、というかもやしてたから本気で2時間くらい考

え続けて「ああ、あれか」ってスッキリしたかったのが強いんだがな。良くあるよね、もう少しで思い出せそうなのに思い出せないもどかしさ。

「先に言っておくけども、俺自身自分が何者かわからないんだよな」「え？どういうこと」

「簡単に話せば、道端に倒れていたところを保護されて育てられて今は手がかりがありそうな日本に住んでるってとこだ」

未だにミリアさんに助けられる前の記憶が無い、ミリアさんがあれこれ調べていたけども有力な情報も無かったって言ってたし。ただ、右目のこともあるしなにかしらあるのは確実。まあ、過去なんてあそこで暮らしたことだけあれば十分だがな。

「じゃあ・・・」

「だから保護してくれた人が架空の戸籍を作ってくれた、もちろん迷惑かからんように繋がりには消したからな。調べても意味無いのは当たり前だ、これでわかった？」

正直なところ、相手が「更識」だからここまで言っただよな。敵視されたら敵わないからな、これで16代目にでも「安全」ってのが伝われば良いんだがな。もしダメならこの町から出なければいかん。

「寂しくないの？」

「寂しくないと言ったら嘘になるが、まあ、今が楽しいからな」

事実、日本に来てからは普通の中学生として生活ができた。イギリスでの生活も楽しかったが、一般人としての生活も中々だ。たまに変装してセシリアの様子を見に行くがな。誰だ、シスコンとか言っただ奴。

「普通に接してくれるなら、嬉しいんだがな。悪いが俺が教えらるのほこれだけだ」

「ああ、そう。わかったわ、まあそれだけで十分よ。邪魔しちゃったわね」

「別に、心配事が無くなっただから問題無い」

さて、にんじん買いに行かなくなちな。

16・説明会だつてさ

あゝ、楯無に俺の素性説明おおまかなをしてから1週間。

「みなさん初めまして、並木野中学校説明会の司会を勤めさせていただきます。如月音羽です」

並木野中学校の学校説明会だ、もちろん司会は俺。結構な重大な役回りだが、これも経験だ。

お、一夏と鈴音ちゃんがかつち見てるな。あ、五反田食堂お気に入りの息子さんも来てる。

「さて、それではまず最初に紹介ビデオを見ていただきますよう」

さあて、と。スイッチはこれだっけ？えいや。

～上映中～

なんか「楽しい学園生活、やらないか？」とか聞こえたのは気のせいだ、きつと幻聴でも聞こえたんだよ。

良かった、ネタに気づいてる人いないや。

「さて、来年の春に来る皆さん。新たな学校生活はとても楽しみかと思えます」

てか、さつきから一夏がすげえキラキラした目で見てくるんだが。千冬さんが真剣な顔でガン見してきてる、正直怖いんだけども。

「是非、並木野中学校で楽しい三年間を過ごしてくださいね!」

これは正直な気持ちだ、そのためなら全力で働こうと思ってる。どうせなら全員で笑って過ごしたいじゃない?

「はい、こちらで運動着の採寸と注文書書いてください」
「靴はこっちですよ」

説明が終わり、ジャージや内履きの採寸などが始まった。ここから教師の仕事だ、やっと終わった・・・まあ達成感あるから良いか楽しんでくれたみたいだし。

「音兄、すげえ!」
「中々だったぞ」

荷物を纏めていたところに一夏と千冬さんが来た、一夏の頭を撫でる。

「そう言ってもらえると嬉しいですよ。一夏、待ってるからな?」
「おお、音兄といっしょの学校だから絶対行く!」
「こいつを頼む、また忙しいものでな」

やっぱり姉弟では大変だよな、ましてまだこの年。俺だってあそこで暮らしてなきゃ無理だしな、まあ、一夏相手ならいくらでもするけどな。

「任せてください。あ、もう手続き終わりました?」

「まあな、もうお前は終わりか？」

「ええ、機材は明日も使うんでこのままです」

「えへへ」

「うお、あんまし動くなって。まったく」

一夏が肩車を要求してきたので、まあ、仕方なくやりながら帰路に着く。笑顔はやっぱり良いものだなあ、千冬さんも微笑みながら見つめてるし。傍から見れば仲の良い家族かもな。

「あ、そうだ。サラミ多く買っちゃったんで。貰ってください」

「そうか、すまんないつも貰ってばかりで」

明日も良い天気だと良いなあ

16・説明会だってさ（後書き）

ストックー日目です

次回はちょい飛びます

17・温泉つていいな（前書き）

そのうちにタイトル変えます、執事してる期間短いので

17・温泉つていいな

「ふは」

「ん」

お寒い季節になりました。え、飛びすぎだ？苦情はこっちじゃないよ。

「温泉はいいね」

「そうだね」

現在、雪が降る12月。近場の温泉に来ている、いや、銭湯が温泉つてのは嬉しいよな。

暖まるなあ、そうは思わないかね？あ、そういやセシリアも温泉好きだったな。

『はっふう』

お約束でタオルを頭の上に乗せて湯船でくつろぐ、今頃は千冬さんも女風呂でゆつくりしてるだろう。

いや、温泉に入っけゆつくりできるって良いねえ。誰だ、爺くさいって言った奴。表に出ろ。

「音兄？」

「ん？どうした」

そっぴや楯無は冬休み中にロシアで特訓つて言つてたなあ、なんでも最近聞いたんだが「国家代表候補生」らしい。もちろんISの、なんで日本にいるのかって聞いたら、「早いうちに日本に慣れてお

くためよ」「らしい、てかその年で候補生とか凄いな。

「音兄の首のバーコードって何なの？」

「ん、ああ。ちょっと落書きされてな、中々取れないんだよ」

これは嘘だ、流石に普通の子供に俺の身体のことを教えるわけにもいかん。というか絶対に教えられないだろ常考。一回スキャンしたら「キャベツ日替わり特価 一玉58円」って出てきて凹んだが。まあ、右目が関わってるのはわかるけどなあ。

「あはは、油性ペンでやられちゃってね」

「音兄、油断するからだよ」

いや、これは見せないようにしなければなあ。そういやmk?にメール来てたんだよな。「候補生の養成学校に入りましたわ!byセシリア」って、元気そうで良かったなあ。

「そろそろ上がるぞ、俺がコーヒー牛乳を奢ってやるう」

「やったあ」

「おいおい、走らなくてもいいぞ」

はしゃいで更衣室に走る一夏を追いかける、滑るから危ないぞ。俺だって一回経験がある、あれは痛い。

「ああもう、こら、大人しくしろ」

「はい」

バスタオルで一夏の髪を拭く、この年の子供ってのは元気なものだからな。はしゃぎたいのはわかるが風邪ひいたらいかん。以外に体力持って行かれるからなあ、一人暮らしの場合は致命傷だし。った

く、動くなつてのに。

「おばちゃん、コーヒ―牛乳一つ」

「あいよ」

番頭のおばちゃんに100円を渡し、それを受け取る。他の銭湯は120円だけどこは安いんだよね、しかも温泉だから一石二鳥。身体も暖まつたし、一夏は着替えて俺の隣にいる。

「ほい、あつちに座つて飲めよ」

「うん、ありがとう！千冬姉、音兄がくれた」

休憩室のソファ―に座っている千冬さんへと寄つていく一夏、千冬さんも嬉しそうな一夏を撫でていた。

減多に帰つてこれないし、帰つてきても数日でまた仕事に行つてしまふ。千冬さんも中々の苦勞人だ、その分生活スキルが欠如しているのも仕方あるまい。

「いつも済まないな、音羽」

「いえいえ、俺が好きでやってるんですし。気にしないでください」

「ぶは、美味かつた」

「ふふ、そうか良かったな。では帰るか」

「そうですね、一夏。荷物纏めておきな、ビン置いてくるから」

「うん、わかつた！」

場所は変わり、雪が降る帰り道を三人で手を繋いで歩いていた。真ん中に一夏、右に俺、左に千冬さんだ。楽しそうに話す一夏の話聞きながら俺達は雪景色の中を帰宅した。

17・温泉つていいな（後書き）

あ、タイトルとか良い案あったら教えてくださいね！

18・見知らぬ女子には二度会つ(前書き)

短いです、はい

18・見知らぬ女子には二度会っ

あれから三日、千冬さんはまた仕事へと出かけていった。ドイツから帰ってきてても一夏を養うために大変みたいだ。

「うゝ寒い」

昨日は冷え込んだおかげで道路は凍りついていて転ぶし、それを近所の子に見られて笑われるし。

正直、冬爆発しろな感じ。いや、鍋が美味いから無くなったら困る。

「イギリスよりやっぱ日本は寒いわ、あゝ冷える」

イギリスは気候の関係で暖かいんだよね、その分日本は四季がはっきりしてるからめっさ寒い。

いくら上着着てても慣れなければきついなあ。

「わっ、避ける！危ない！」

「は？何？」

いきなり横から同い年くらいの子が道路を、滑ってきた。いや、正確には転んで滑ったが正しいか。

って、危ない！

「きゃあ！」

「ふぬわあ！？」

真横から来たため、どうにか受け止めようとするも結構な加速だっ

たためにそのまま倒れこむ。

うわ、背中が冷たい。なんとか受け止められたけど、これ、やばくね？

「む、むう」

「だ、大丈夫か？」

俺が押し倒されている格好なんだよね、って早く起きねば。誰かに見られたら色々終わる。

「す、済まない」

どうにか二人揃って立ち上がる、どうやら雪が付いているのは俺だけみたいだ。

怪我も無いみたいだし、まあ、結果オーライか。

「別に、怪我なくて良かったよ」

長い黒髪、すらつとした肢体。どこか格好良い女の子っていうのがその子の第一印象。

ちなみに俺は髪を切って短髪だ、って誰も知ったところで嬉しくないか。

「た、助かった。ありがとう」

「いやいや、俺は如月音羽。君は？」

見たことない制服だが、どこの学校の人だろうか？

「私は・・・雅^{みやび}、いきなりぶつかって済まない」

「良いつて、じゃあ俺はここで。雪道は気をつけてな」

慣れないと転んで骨折つてのもありえるからな、町内会長のおばさんもそれで今病院通いだし。

「ま、待ってくれ。礼をさせてくれないか、流石にあれだけしておいてそれではどうもあれだ」

「気持ちだけで十分だって、どうしてもってんなら誰か他の困ってる人を助けてあげて」

善意というか、俺の癖というか。困つてたりしたら誰でも助けに入ってしまう、それこそヤから始まる職業の人が相手だろうが。まあその時は銃だされたけど、軽い脅しに引かかってくれて助かったが。

さあて、買い物行かねば。

今午後9時、買い物を終えて公園の前を通りかかると、雪がかかった椅子に座っている雅を見つけた。
絵になるなあ、と思いつつ通り過ぎようとしたら。いきなり雅が目の前で倒れた。

「おい、大丈夫かよ？」

「あ、音、羽・・・」

それきり口を閉じ、意識を失った。額に手を当てると熱い、これは・・・まったくもう。

気を失った雅を抱きかかえて、俺は一目散に自宅へと走った。

「まったく、熱あるなら言えよな！」

「む、くう。・・・ここは？」

「俺の家だ、熱あるんならなんで歩き回ってるんだよ」

寝言だろうか、「亡国」だのなんだの喋ってたが。というか、親は何してんだ。具合悪い娘を出かけさせるなんてなあ。

「お前ん家ってどこだ？電話かけて連絡するから」

「私に、親はいない。迎えは1週間後に来るが」

つまりは、昔の俺みたいなもんか。ずっとは無理だけどしくらいなら大丈夫かな？

「だったら、それまでここで休んでろ。その様子だと今帰るとこ無いんだろ？」

「いや、だが」

「病人は素直に言うこと聞きなさい、安静にしてろ。いいな？」

「わかった、二度もすまん」

その後、おかゆを食べさせ。寝かせた。既に時計は10時を回っていた、まあ、着替えさせて薬飲ませてとかやってればこうなるか。さあ、俺も寝るか。ベッドに寝かせてるから俺はソファーだが。

「おやすみ」

あ、明日の朝食の準備忘れた・
・
・
・
Z
Z
Z

18・見知らぬ女子には二度会つ（後書き）

オリキャラではありませんよ、しっかり原作キャラです。

ストック・・・そろそろやばし

19・結構落ち着かない

「む・・・朝か」

「おう、おはよう」

え、もう8時なのに学校はつて？12月、しかも気づけば27日。冬休みだから別に大丈夫なんだよね、しかも生徒会の仕事は無いし。それ以前に年越しで忙しい、雅がいるがこの時期だし、どうせなら迎え来るんだつたら一緒に鍋でも囲もうかと思ってる。

「具合はどうだ？」

「まあ、なんとかな」

顔の赤みも引いて元気そうだ、医療用のナノマシンが効いたかな？
(錠剤薬型という素晴らしい仕様)

ちなみにこれも暇を持て余した結果だったりする、暇人って凄いね。ウイルスや細菌を直接特殊磁場で倒すというもの。海外企業にライセンス生産させたら金が凄い入って来てるんだよね、まあ余裕で一人くらい養えるくらいに。

「あゝ、こたつは良いねえ。はい、あゝん」

「確かに良いものだな、つておい」

「まだちゃんと治ってないんだから、ほら」

「む、むう・・・あ、あゝん・・・／＼」

ふむ、素直でよろしい。なんで顔が赤いんだ、熱はもう下がってるはずなんだがな。

まあ、卵かゆでも食べてれば大丈夫だろ。栄養付ければおのずと元気になる。

「美味いな」

「そうか、そりゃあ良かった」

料理作ってる人間にとって、美味しいって言われるのを見るのが一番幸せなんだよね。また作ってあげたいって思うし、嬉しいし。

「さてと、大掃除しないとな」

「ならば私も手伝う」

「そうか？無理しなくても良いぞ」

「無理などしない、せめてそれくらいはやらせてくれ」

どうやら、引かないみたいだな。仕方ない、はたきでもやってもらうか。見せられない物もあるからな。ずっしりと重いあれとか、リ
ンゴとか。炭素に4がつくのもあるんだよねえ。

「じゃあ、これではこり落としてくれ」

「わかった」

それで、さつきから「ふん！」とか「てやあ！」とか言っってはたきを振り回す雅。めっさ元気になってるなあ、良い事だ。

「~~~~~」

掃除機で落ちた埃を吸い取る、荷物とかもそう無いからすぐに終わるんだけどね。男の一人暮らしなんてそんなものでしょ、俺の場合は工具とかが結構あるけども。

「ふっ、こんなものか」

「そうだな、お疲れ様」

気づけば家の中の掃除終了、やっぱ二人だとすぐに終わるものか。一軒屋に一人で住んでるつてのも結構大変なものだろうが、ああ、今は雅もいるな。

「これほどまでに家事は大変なものなのか」

「いや、掃除だけだし。それ言ったら他のどうなるよ」

炊事・洗濯・買い物・税金・家賃・学費・・・まだまだあるぞ、この程度で大変とか言ったら生活できないんだけど。主に俺が、まああそこでの生活スキルを身につけてたから問題無いけどさ。

「む、そうか。他にすることはあるか？」

「いや、あ、風呂入る？まだ入ってないだろ」

汗かいてたし、いくら着替たとはいえ身体は洗ってないからなあ。え、服はって？お察しください。

「私と一緒にか？」

「な、なんでそうなる。使い方わからないとか？まさか」

いや、今の時代使い方分からない人はいないと思うが。アフリカの極地でも普通に使えてるご時勢なのに。

「ふっ、そのまさかだ！」

「そこ誇れるとこじゃないからな！？なんでそんなに自信満々なんだよ！？」

しかも言い感じのどや顔っていう・・・分からないのなら仕方ないかってんなわけあるか！

「はあ、使い方教えるから一人でできませんかね？雅さんや」

「残念ながら機械音痴でな、別に襲いもせんだろ」

「いや、信用してくれるのは嬉しいけど。それとこれとは違うからな？」

カポーン、ガラガラ

「ほら、動くな」

「か、かけるなよ？いきなりザバーはダメだぞ？」

無視、あの頭につける皿っぱいのを買う必要なんてないんだ。我慢すれば良いし、それ以前にあの爽快感は捨てがたいからなあ。え、無理な奴は無理だって？家は家、よそはよそだよ。

ザバー

「ふみやああ！！！」

「おし、綺麗になった」

俺自身、偽装のために髪を長くしている分。人の髪を洗うのは結構得意だ、なにせサイドテールにしてるからな。雅も負けないくらい長いが。というか、結局俺が入浴してる最中に入ってきたから結果的にいっしょだよ。

「ううう、やめると言ったのに・・・」

「こうしなきゃ泡残るだろうが、少しでも残ってたら大変なんだぞ？」

セシリアもそれで苦勞してたからなあ、たまに一緒に入れて「主人命令」でやらされたが。

「はふう、良い物だな」

「そうだろ、風呂はやっぱ良いよなあ」

一夏も風呂好きなんだよなあ、そのうち温泉巡りでもできたら良いなあ。あいつが高校生くらいになってからだが。

その後、風呂上りにアイス食べたりしてゆっくり過ごした。だってすること無いんだもの、他にどうしろと？ 買い物も済ませたし、年賀状は裏ルートでオルコット家に送ったし。二人でおこたにたれてるしかないじゃないか。

「zzzz・・・」

「ははは、寝ちまったか。俺も寝よ・・・zzzz」

ちなみに今、午後2時である。

19・結構落ち着かない（後書き）

まさかの風呂シーン・・・こんな頭で大丈夫か？

A・大丈夫じゃない、問題だ。

と言う話は置いておいて、はい、まだストックです。体調は良くな
ってきているので日曜にはゴーストも更新できるかと。

あ、タイトル案は募集してるので。良いアイデアあったらお願いし
ます

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ（前書き）

えゝ、リア充爆発しろ回です

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ

「あ、朝？あれ、もしかしておこたでそのまま寝ちゃった？」

しかも雅がなぜか抱きついてきてるし、どうしてこうなった。

おこたの別方向で座ってたはずだが、いつのまにか雅が俺の方に・・・熟睡してたから良かったが。なあ？

「性欲を持て余す」

まあ、それが言いたいだけだ。というか、動けん。暑いし。うあゝ。

「すう、くう」

「・・・・・・」

しかも俺の自慢のサイドテールを枕にしてるし、動けないんだが。てか今何時？・・・・・・おわあ、一晩あけたのにもう11時だつてさ、何時間寝てたんだよ。

「おゝい、雅。起きろゝ」

「むにゅ・・・む」

眠そうに目をこすりながら雅が目覚ます、できればもっと早く起きてほしかった。

というか息がかかる距離だから、無駄にドキドキしてしまう。俺に某流さんみたいな耐性は無いよ！？

「おはよう」

「ああ、おはよう。そんな時間では無いみたいだな」

ささつと朝食（昼食と兼用になった）を済ませて、居間のカウンタ―に鏡餅を乗せる。

これくらいしか年越しの準備ですることが無い、あ、雅の服が必要か？いつまでも変装用の服を着せてもらえないし。

「私は要らん」

女の子なのに興味ないとはこれいかに、ジャックや楯無だつて校外の仕事のときは結構可愛いの着てたぞ。まあ、俺は機能性重視だからわからんが。それでも執事をやってた身だ、仕立てくらいはできるぞ。

「ま、それずつつてわけにもいかないだろ。さあ行こう、今すぐ行こう、もう行こう。というか、行くぞ！」

「待て、いいから、私は・・・うにゃああああああ！！」

雅の手を取り、なんでも揃うと有名な駅前ショッピングモール「レゾナンス」へ向かう。

日用品からアウトドア、ブランドにスイーツ、家具や雑貨まで多種多様な店があるんだ。

昔から言うじゃないか「可愛い娘にはおしゃれをさせろ」って、違う？細かいことは気にするな。

「わかったから、速度を落とせ！地面に足を付かせてくれ！！」
「急がなきゃ、年末だから物が無くなるんだよ！」

それ以前に、モノレールの発車時間がギリギリなのもあるけどね。
どこかの借金執事が自転車ですに追いつくなら、俺は生身で追いつけるんだよ！気合があれば！

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ（後書き）

す、ストックです。そろそろマジでやばい

21・考察したっていいじゃない、人間だもの（前書き）

明日くらいにタイトル変えます

21・考察したっていいじゃない、人間なもの

あれから2日、え、レゾナンスでどうなったって？似合うの買ってあげただけなのか？

飛んでる？知るか、個人情報に関わるので（ry

「イエーイ、ハッピーニューイヤー！！」
「い、イエーイ！」

なんか雅もノリが良くなってきた、まだまだ硬いけどもね。というか、引っ越してから初の年越しじゃね？

まさか見知らぬ少女と向かえることになるとは誰が予想できただろうか、俺は無理だ。

「ふむ、これが雑煮というものか」
「そうだ、といっても俺流だけだな」

そういや、同じ雑煮でも地域で違うらしいな。餅の形からだしまで、ちなみに俺は塩味にしてる。

餅と塩が合うと思うんだが、なぜか一夏は好かないらしい。ジャツクは美味い美味い言って10杯くらい平らげていたけども、それを見て楯無と苦笑いしていたのは忘れられないな。

「塩か、なるほど。さっぱりして丁度良いな」
「だろ？他の家では白味噌だったりするみたいだけどな」

調味料は基本的なものから地方のものまで揃ってたりする、もし転居することになったらなんて考えていないくらいに。もしそうなら

たらどうしようとしてるんだろうね。

そついや、俺が訳ありの身体のはずなんだがここに来てからも三ヶ月過ぎたんだよな。

「うゝん、まあ良いか」

「？」

まあ、今はこの平和な時間を享受できれば良いか。

「おかわりを要求する」

「普通に言えば良いんじゃないか？別にいいけど」

たまに軍みたいな言い方を雅がしてくる、一体どこに所属してんだこいつは？仲間とやらを一度見てみたいものだ。まあ、野暮な真似はしないけども。

「そついやどこで仲間と待ち合わせなんだ？」

「あの公園だ、財布を落としたのは不覚だったがな」

だからなのか、ってすっかりしてるイメージだったけど以外にうつかりなんだな。

「何か失礼なことを考えていないか？」

「いんや、何にも・・・ひとまずその拳を下ろしてくれないか」

俺、何もしゃべって無いんだがなあ。たまに一夏も考えてること読まれてるけども、俺も顔に出てるのか？このポーカーフェイス（自称）は意味無いのか・・・、今はやってないがな！

「自称では意味無いと思うが」

「俺って顔に出やすい？」

「ああ、見事にな」

まあ、仕事モードに切り替えないとそりやそうか。だって普通にしたら思考垂れ流しだもの、まあ困らないけどな。

「それはそれでどうかと思うがな」

なんか雅が言っているが、だって常時仕事モードだと疲れるんだもの。たまには休みたいじゃん、今は仕事モードになるときは少ないけどさ。

「そーいや、雅は俺的に理想の女性かもな」

「はひ！？ど、どういうことだ！？」

「いや、最近の勘違い女みたいじゃなくて対等に接してくれるからさ」

なんでそこで顔を赤くするのかわからん、最近は多いからなあ。ISを動かせる女性が偉いわけではなくて、ISが動かせる性別だから優遇されているだけだし。

まあ、世界中にたった467機しかない兵器のおかげで女尊男卑社会になるのもおかしいが。

60億超えた人類の半分、その中のたった467人しか乗れないんだ。しかも研究用に使われてるコアが多いから実働数はもっと少ない。それなのに女性だからって偉ぶる人が多い、百歩譲っても優遇されているならばそれなりの行動も求められるはずだ。

「なんだ、そういうことか。ドキドキして損した」

「ん？なんか言ったか」

21・考察したっていいじゃない、人間だもの（後書き）

さあ、飛びます！飛びます！

22・早い別れ（前書き）

ふうへへへい、完全復活！

22・早い別れ

「ん、あの人が仲間さん？」

「ああ、なにかと世話になっている人だ。不器用だがな」

1月3日、雅が言っていた「仲間が迎えに来る日」。彼女を助けたあの公園のベンチに新社会人くらいのロングヘアのスーツを着た女性が缶コーヒを傾けながら座っていた、女性なのに堂々と足を広げているのはどうかと思うが。しかもスカートなんだし。

「礼子、来たぞ」

「あら、早いね。ん、その子は誰？」

この人が雅の仲間か、というか何故俺が着いて来ているかと雅に「方向音痴でな、案内してくれないか？」と言われたんだ。まあ、ここの近辺は地図見ても入り組んでわかりにくいからな。最初にぶつかったときも片手に地図持ってたし、俺だって最初にここに越してきたときは迷ったんだよねえ。

「ああ、命の恩人だ。倒れてしまったところを助けてもらい、今日まで世話になった」

「ふふふ、お優しいのね。礼を言うわ」

そう言って名紙を差し出してくる、え〜と・・・IS装備開発企業『みつるぎ』の渉外担当の巻紙^{まきがみ}礼子^{れいこ}さん。企業の人か、道理でスーツがビシッと決まっているわけだ。さっきの大股開いてた人と同一人物とは思えないほどに。

「あ、いえ。当たり前のことでしたまでです、これ名紙です」

名紙を出されたら交換するのが一流のビジネスマンの常識だ、自然にできるようにならなきゃ後々の商売にも影響が出るからな。ちなみに俺が出したのは海外の企業にライセンス生産させている医療用ナノマシンのオーナーの証明書を兼ねている。ちなみにオーナーとしての俺に手を出すと、委託先の企業の私兵が地の果てまで追いかけてくる。

「まあ、あなたが！人は見かけによらないわね」

「案外そんなものですよ、さてと。それじゃあ俺はこのへんで」

あんまし長い時間も居られないでしょ、企業の人だったし。どうやらいっしょに鍋を囲むこともできないだろう、企業は24時間365日止まらないからね。個人経営ならば別だろうけどな、まあ学生程度が社会人を誘うのもおかしい話だから自重しよう。

「お、音羽。その、これ」

「ん？」

なにか恥かしげに雅が青い菱形の宝石が付いたペンダントを渡してきた、これって雅がずつと身に着けてたものじゃないか。なんでそれだけ大切にしているものを俺に？

「私の、感謝の気持ちだ。受け取ってくれないか」

「……わかった、元気でな」

「勿論だ、それではな」

「おう、さよならは言わないぞ。またいつか会おう」

まさか俺が見送る側になるとはな、いつの間にか公園の入り口に横付けされていた高級車（あんまし詳しいの知らないんだよね）に雅

が先導されて乗っていく。礼子さんが何回も頭を下げている、中学1年に頭を下げる社会人って……俺も返しはするけどな。

「ありがとうございます、それでは」

雅が車内から名残惜しそうに見つめてきていた、なに泣きそうになつてんだか。いつもみたいに気が強そうにしてるよな、そんな顔されると調子狂うよ。仕方ないので笑顔で手を振る、どうせなら笑顔で分かれたいじゃないか。

「（音羽、ありがとう。絶対にお前のことは忘れない！）」

「（俺だって忘れないさ）」

読唇術で最後の会話を終えた瞬間、雅を乗せた車が発車する。短い間だったけど、俺は楽しかったぞ雅。

走り去る車を見送り、俺は踵を返して家路へと向かった。

22・早い別れ（後書き）

さあさ、飛びますよ

23・中生活ってそんなもの(前書き)

飛びました、以上、報告終了

23・中学生活ってそんなもの

そついえば気づけばもう中2である、中学は早いと聞くが本当だったな。転校してきたと思ったらすでに一年経過している……。いくらなんでも早くね？とは思うが、そんなものだろう。まあ、一夏や鈴音ちゃんが入学式で可愛かったとだけ言っておこう。

「でだ、なんで俺が生徒会長になってんだ？お前だろ常考」

「まあ、投票結果がそうだったんだし。良いじゃない」

そう、並木野中学校の生徒会役員はどこぞの私立学園のように一般生徒の投票で決められる。もちろん自分から立候補することもできる、俺はしなかったけども。だって、面倒なもの。それに教師からの要請で生徒会在籍も一年の間という期限付きだったからな、それが過ぎたのだから特に用事は無いし。

「それなのにお前が他薦するしさあ、俺、お前に立場説明してるよな？」

「そうね、でもただの一生徒を他薦しちゃいけないなんて規則に無いわよ」

こいつは何かと穴見つけて俺に何かやらせようとしてくる、ちなみに楯無は副会長だ。ついでにジャックは書記……。なぜ一年のときと同じメンバーなのかまったくもって不思議である。というか、一夏がフラグメーカー過ぎて困る。今は関係無いか。

「（・・・・・）」

「m9（^ ^）」

A Aで表示したら余計イラついたが、いつものことでもあるため諦める。某炎の天使が言っているが人生諦めも大事だと思っただ俺はすでにこいつが何か笑っているときは特に。今までそれで何回も巻き込まれた・・・なんか数年後に今と同じようにため息ついている未来が見えた気がする。そんな未来幻想、俺が打ち砕く！無理っぽい気もするけども。

「まあ、良いんじゃない？身の安全は確保されてるし」
「そりゃあ、な」

生徒の長になったことでもし何かしらの組織が俺を襲撃しようものなら、委託企業から極秘に派遣されている屈強な兵士さんが見事なまでに撃退してくれる。まあ、警備員が丁度配置換えのときに入ってきたわけなんだがな。もしかしたらISでも使われないかぎり無理かもしれないな。

「さあて、書類も書き終わったし。帰るか」
「ホントに作業早いわね」

楯無が呆れた顔で言うてくるが仕方ないだろ、イギリスに居たときは書類20枚分とかを5分で片付けるとかしなきゃいけないかったかな。今となつては役に立つ技能だけど、習得するための地獄は思い出したくない。

「そうだ、今日は五反田食堂月1サービスの日だ！じゃあな！ふぎや」
「どうせなら私も連れていきなさいよ、私だってお腹空いたんだから」

楯無は何かと俺に着いて来る．．．．別に悪い気はしないが、と
いうか窓からダイブしようとした人間の首を片手で掴むって、く、
苦しい。

「わ、わかったから。ぐ、ぐるじい」

いくらなんでも首を掴まれてぶら下げられている状況ではどうしようもない、く、苦しい．．．．酸素が足りない！酸素．．．

「そ、そう？やったあ．．．．あ」

「のうあああああああ！！」

ちなみに生徒会室は、三階である。嬉しそうに両手を楯無が合わせたと同時に音羽が落下していったのは言うまでもない。

「．．．．お前なあ．．．」

生徒会室から突き落とされた後、奇跡的に怪我することもなく復活した俺は仕方なく楯無の手を引き歩いていた。確実に18mは落ちたと思うんだ俺は。

「ごめんね」

「お前絶対反省してないだろ！」

まあ、今から飯だつてのに本気で怒ることも無いけどさ。それに楯^こ無^いのイタズラ好きは今に始まったことではないし、その度に俺が被

害こうむってるがな。本気で人が嫌がることはしないから嫌いでは無いがな。

「親父イ、業火野菜炒め定食二つ頼む」

「あいよう、ありや。彼女かい？」

「学校の友人ですよ」

何故そうなる、てか楯無はどうして顔を赤くして・・・なんだろうか？まあ良いや早く丁度いい席に座ろうか、ちなみに月1のサービスデイには全てのメニューが30%増量という素晴らしい日だ。まあ、それ以外の日でも良く来るけどな。何気に雅はかぼちゃ煮定食が大好きだったんだよね。

「あ、音羽さん」

「ホントだ！音兄」

声がしたほうを向くと座敷席で一夏と弾が丁度夕食を食べていた、仲良いなお前ら。弾ってのは一夏の中学でできた友人で、俺が気に入っているこの五反田食堂の長男である。家族揃って綺麗な赤髪である、弾は将来有望だな良い旦那さんになれるはずだ。

「おう、お前らは飯か」

「音兄も飯？楯無さんもいつしよなんだ」

「まあな」

そのころ楯無は

「楯無さんもしかして？」

「そつなのよ弾くん、でも、ねえ？」

「あゝ、頑張ってくださいね。応援してますよ」

なんか二人が揃ってため息をついていたが一体どうしたんだろうか、一夏も俺と同じく首をかしげる。

まあ、さつさと配膳されたこれを食べるとしましょうか。冷めるといけないしな。

何故か弾が俺と楯無をなにか優しげな目で見てくる………？

「いただきます」

「いただきます」

なんで楯無は俺の隣に座ったんだか、向かいの席で良いだろうに。お、やっぱ美味しいなこれは。

24・王室認定騎士（前書き）

初・・・・・・・・・・なにがかはご自身で確認ください

ちよいグロ注意

24・王室認定騎士

P L L L P L L L

とある平日の放課後、居残りで会計事務をしていた俺・・・別に何かしら狙ってるわけではないが・・・こういうのって男の仕事だろ？あゝエクセルめんどい、便利だけどもめんどい。

P L L L P L L L

そりゃあ、与えられた命令しか実行できないから自分で操作しなきゃダメだもんなあ。まあ、mk？はアメリカの軍事衛星乗っ取れるくらいの性能あるけども・・・ああ、疲れた。

P L L L P L L L

「ああもつ、さつきからなんだよ！もしもし？」

通話ボタンを押し込み耳に当てる、このものつそい大変な時間に楯^あ無^いは何の用なんだよ。

いやまあ、残ってた仕事を引き受けたのは俺なんだけどもね。はて、何用か？

『更識楯無は預かつt』

ツー ツー ツー

さて、作業再開するか。えゝと遠征の費用は野球部とサッカーな、バス代が一人・・・。

PLLL PLLL

「だからなんだよ、仕事の邪魔すんな。くだらん冗談言つ暇あったら通常業務に戻れ」

『冗談ではn』

ブツ ツー ツー

あいつは何してんだ、更識の使用人に演技させるなんてな。暇なら簪ちゃんと遊んであげろつての、あ、簪ちゃんってあいつの妹な。同じ水色の髪で、女子には珍しくヒーローアニメが大好きな子だ。IS/VISで引き分けたのは記憶に新しいところだ。

PLLL PLLL

「ああもう！いい加減に『パンツッ！きゃああ！』・・・何？」

電話越しに聞こえる銃声、演技でもなんでもない楯無の本心からの恐怖が込められた悲鳴。反響して響く音、錆びついているのだろうか、換気扇の動作音が聞こえる。

『早く来ないと嬢ちゃんの頭の風通しが良くなっちゃうよ？』

「どこだ、金はいくらでも出す。教えろ」

どうやら、ガチであいつは誘拐されたらしい。不意打ちでもされただろうか、それにいくら更識の者であってもあいつはまだまだ発展途上だ。銃まで持ち出されたら下手な真似はできないだろうしなあ。

『8億だ、東野第三倉庫に來い、サツには知らせるなよ?』

「わかった、約束するから手を出さないでくれ」

まあ、交渉相手が俺だつて時点で結末は見えてるんだがな。すぐさま窓から飛び降り、一路、自宅へと走つた。渡すわけないが、一応持つていく必要はあるからな。

「来たぞ」

場所は東野第三倉庫、昔はかつての大企業の製品流通の拠点のひとつだったらしいが今ではその面影も無くさびれたただの建造物に成り下がっている。目の前の貨物出入り口の大きな鋼鉄製の扉がところどころ腐食して穴が開いているのが証拠だ。

「おや、マジでこいつ来たぜ。よし、金寄越しな」

「先にそいつを返してもらおうか、10億持つて来たんだ。それくらい良いだろ」

テンプレないかにもな格好の男が5人リーダーの女が1人か、その内の2人の間に手足を鎖で拘束された楯無が涙目で居た。

一人がアタッシュケースを開き、確認していた。下手に動けば俺も危ないか、流石にMP7を4挺向けられてたらきつい。

「リーダー、マジで10億入ってるっす」

「そうか、ならもう「用事は無いつてか？」な、ぐあつ！」

右腕に巻いていた時計から、軍用対物ライフル「バレットM82」を召還し視界に入る全ての銃器を撃ち砕く。その間、2秒。

「交渉相手が他の奴だったら良かったのにな、その作戦」
「てめえ、こいつがどうなっても良いのか!？」

銃器が使用不能になり恐怖のあまり手下らしき奴らは走って逃げていった、誰が逃がすかよ。

まあ、俺のこれがばれるのはダメだから手下は逃がしてやるか。流石に弾の無駄撃ちはしたくないからな。

「音羽あ……」

見たことのないほどに怯えている楯無の頭部にデリンジャーが当て付けられていた、リーダーと呼ばれていた男の顔は勝ち誇ったような顔をしているが……どうするというのがねえ。

得意げに俺にデリンジャーを握っていた右腕を向けてくる女。

「残念だったな小僧、少しばかりヒヤツとさせられたぜ」

「ああ、右腕はもつとヒヤツとしてるんじゃないか？」

なにせ肘から先は既に無くなっているのだから。

「……な、ぎゃああああ!!」

「王室から騎士の称号貰ったのは伊達じゃないんでな」

倉庫の奥、塗装が剥げて見る影もないコンテナにデリンジャーを握ったままの腕が深紅の液体が床のコンクリートを染め上げていた。

なんとか楯無に血はかかってないらしいな、そう狙ったからだけだな。

「動くなよ」

楯無が頷いたのを確認し、枷となっていた合金製の鎖を撃ちぬく。いくつかは短い鎖が残っているがこれで動けるはずだ、もっとも派手に金属片が弾けていったがな。

「音羽……！怖かったよ、うう……」

「まったく、怪我は無いか？俺が来たからには大丈夫だ」

泣きながら楯無が走ってくる、まったく、心配かけやがって。てか、俺より身長上だろうに……。

更識の１７代目がこれでもいいのか？さて、仕上げ行くか。弾装を入れ替え、銃口を女に向ける。

「お前の負けだ、大人しくお縄になりやがれ」

「ふざけるな、男に負けるだど！？しかもガキに……んなことあったまるかああ……！」

瞬間、視界が閃光に包まれた。思わず危険を感じ楯無を抱き寄せる銃口は向けたままだ。

光が拡散し、目の前には一機のISがあつた。この世界最強と言われている、元宇宙用マルチフォームスーツ……その日本製第二世代の最高傑作「打鉄」が居た。防御力、汎用性の高さによりラファールと並ぶ量産機だ。

「へっ、どうよこいつは！ああ？」

面倒なもの持ってやがったなこいつ、そりゃあ生身でISには普通なら勝てないからな。

製作者も言ってるやがる「ISに勝てるのはISだけ」ってな。とはいえ、最強なだけであって完全では無いんだよね。それに見てみればところどころ部品が緩んでいる、勝機は……ある。

「音羽ぁ……」

「なんて顔してんだよ、まあ、少し待ってる。すぐにカタつける」

そう言ってる俺は、いつもかけている赤縁の眼鏡を外して投げ捨てた。

24・王室認定騎士（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の現時点の資産は億単位

25・死神の瞳（前書き）

音羽キターーーー！！な話です

25・死神の瞳

「^{リーバースアイ}死神の瞳起動」

イギリスでセシリアと共に誘拐されたときに発現した、空間展開型
擬似ハイパーセンサー。

起動すると顔の前面右半分が黒い影に包まれ瞳が紅く発光する、理論上はドイツで試験的に使われている越界^{ヴォーダン・オージェ}の瞳と同じで動体視力の強化による相対的な反応速度上昇による戦闘能力強化である……。らしい、実際は良く分かんがな。ひとまず「解雇」の理由である……。

「てめえの腕も貰うぞ！」

「残念ながら、渡す気は更々無いんでね！」

女が人一人はあろうかと言うほどの近接ブレード^{コール}を呼び出し、空気を切り裂きながら迫ってくる。その刃には女の歪んだ笑みが夕日に反射して映りこんでいた。

「……………」

ガキイン

振り下ろされた凶刃は横から蹴り上げられ、音羽の身体を数ミリずれて地面へと突き刺さる。その一撃生身の人間に逸らされたことに驚愕の表情を浮かべてしまった。それが今の音羽には貴重なチャンスであるというのに。

「なっ！？つあぐうあ！」

首筋に冷たい感触を感じた途端、痛みを感じた。血は出ていないがシールドエネルギーが大量に減少していた、思わず腕を振るう。しかし、既に離脱していた音羽に拳が当たることも無く空しく空を着る音を響かせえるだけ。ハイパーセンサーで視認したのは大型のチェンソーを両手で構えた自らの腕を奪った憎い少年。もはや、プライドなど消え去り音羽への復讐しかなかった。それに致命的な損傷を負っていることにも、既に打鉄のPICは半数が損壊しているのだから。

「はっ、知ってるか？やろうと思えばこういのでシールドエネルギーなんざ削れるんだぞ？」

「だったら、これはどうなんだよああ！？」

空中にIS用サブマシンガン「メルティ」が光の粒子を形成しながら現れる、瞬間、銃声。

音羽の居た地点一帯が着弾により煙幕に包まれた、女は狂ったように歓喜の声をあげる。

「お、音羽あ！！！」

楯無の悲痛な叫びが響いて反響する、女の銃口が楯無に向いた。

「残念だったなあ、彼氏を追いかけていきな！」

「彼氏になった覚えは、無いんだがね。まあ、それも悪く無いかな？」

ズガンッ

瞬間、女の身体が地面に叩きつけられる。その後ろには工事用の小型パイルバンカーを両手でどうにか抱えた音羽が立っていた、音を立てて杭を打ちおろしたそれには大量の銃創があった。パワーアシスト用のケーブルが切断され、只の金属の重しに成り果てる。

ズガンツズガンツ

「あゝあ、これも使い物にならなくなったか・・・」

絶対防御のエネルギーシールドを突き続け杭先が曲がったパイルバンカーを投げ捨て、女の上から飛び降りる。既にISは強制解除され、気絶した女がISスーツを纏った姿で倒れていた。それを見た音羽はどこからか注射器を取り出し、女の失った腕の切断面へ針を刺す。中身の液体が注入される。

「それは？」

「再生促進医療用ナノマシン、こいつの腕も半年で元通りだ」

流石に人の腕を奪うのは嫌だからな、とはいえ苦しい思いはしてもらうがな。さて、と。早めに失敬しないと警察が五月蠅くなるな。ささつと証拠隠滅してこいつをどうにかしなければいけないな。

いつもはやる気の無い顔で渋々仕事をしているような音羽が、自分の命も省みず助けに来てくれた。
それこそ犯罪者に怖気づくこと無く、華麗に撃退して。

「ほら、帰るぞ楯無」

手を差し出してくる彼は今、この世界の誰よりも格好良く。そして、一人の少女に淡い恋心を抱かせた。

「うん！」

「ははっ、そう来なくっちゃ！」

この日、17代目更識楯無は人生で初めて恋をした。

「・・・・・・・・つく、ああ？生きてるのか」

目を覚ました女が最初に感じたのは左手に握らされた紙切れだった。それを倒れこんだまま開くとそこにある一文と住所が記されていた。

『アレンティア薬品 生活には困らないだろうからココ行け。話しは通したから手下といっしょにな、右腕は半年すりゃ治るからそのつもりで。サツには通報してないから安心しとけ See you
：）』

「あん？ご丁寧に包帯まで巻いてやがる・・・・・・・・けっ、お節介な男だぜ。不思議と嫌な気分じゃねえけどよ」

25・死神の瞳（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の腕時計は擬量子化格納領域装置、ある程度の物は仕舞える。
ライトな四次元ポケット、カップラーメンから対物ライフルやお湯
が入ったやかんまで入っているらしい

26・特別な存在（前書き）

最後の台詞の意味が分かる人は居るかな？

26・特別な存在

「あの、なぜ俺がここに呼び出されているのでしょうか」

誰もが真面目に授業を受けている平日火曜日、ある夏の日。見知らぬリムジンに「更識の者よりお話が」と言われ任意と言う名の強制とある大豪邸へと連れて来られた。目の前には16代目楯無が鎮座していらっしゃる、放たれる気迫でさつきから手汗が止まらない。できるだけ平静を装っているが・・・多分、いや、確実に見破られている確信があった。

「ふふ、別に緊張しなくても良いわ」

「は、はあ。わかりました」

やっぱり見破られていた、分かりきったことだが実際に言われると結構悔しいな。こういう分野に関しては向こうがアドバンテージ大きいけども、なにせ対暗部用暗部なのだから。17代目あいつは全然だったかな、まあまだまだこれからだろう。

「いえね、娘を助けてくれた騎士にお礼が言いたくて」

イギリス王室で10年に一度極秘裏に選ばれる優秀な人物に与えられる国民栄誉賞のガチ版みたいなもの、特に戦闘能力や頭脳・電子機器技術などイギリス版マルチ分野ノーベル賞みたいなものでもある。団長や衛兵など分野それぞれに様々な称号があるのだが、その中でも単機での戦闘能力が認められた人間に与えられる。たかだか小学生程度が、と内密に騒がれたらしいが俺がそれに選ばれた。与えられた人間は軍で言う中佐階級レベル権限があるそう・・・何かつたときに限るが。

「そこまで知っていますか・・・」

「裏では有名よ？今は所在不明で死亡説まで出てるらしいけどね」

死亡説って・・・そりゃあ痕跡消して日本に来たけどさ、向こうの戸籍も別人になってるし。まあ、当たり前っちゃんあたり前か。セシリアには年賀状とか裏ルートで送ってるから大丈夫だし、死亡扱いのほうが助かる。

「それでね、お願いがあるの」

「な、何でしょうか。無理なものは無理ですが」

息を一度吸い、16代目がはつきりと喋った。その驚愕の内容とは・・・！！

「あの子を住ませて守ってくれないかしら、勿論バックアップはするから」

「あの、俺が訳有りの身体とか狙われてる可能性があるとかそこらへんの事情分かって言ってます？」

うなじにあるバーコードに、発見時の大怪我に右目のこれ。中二過ぎる感じがするが、ミリアさんが正体不明の組織から俺を守ってくれていたことからわかる。確実に俺は厄介な存在だと、それに裏の更識がそんな簡単に言っただけなのか？

「安心しなさい、更識が全力で協力してあげる。というか、死亡したって流れてるから裏でももう安心できるわよ？まあ、日本にいれば大丈夫だし」

「はあ・・・ひとまず考えさせてください」

いくらそうだとしてもすぐに返事できるわけが無い、というかこんなのが暗部に対抗できるのか？とか思いながら帰路についた、時計を確認すれば既におやつの時間を過ぎていた……。うわあ。

「それでは音羽様、お待ちしておりますとのことです」
「は、はい」

燕尾服を着た若い男の人が頭を下げ、リムジンを運転し去っていく。思わず癖で自分も腰を曲げて礼をして見送った。

「どうしようかねえ」

考察しながら空中に召還したヤカンからカップに紅茶を注ぐ光景はシニールだったに違いない、一杯飲みながら考える。うゝむ……。・。

「どうしたの？」

「いや、楯無を住ませるのは困らないんだが。俺にメリットも有るし、でもあいつが嫌がるだろうし。年頃の女の子がいくら知り合いとは言え男と一つ屋根の下に居るってのもなあ」

「別に困らないよ？」

「そうか、本人が良いならなら良いかなあ……。っておわあ!？」

突然肩に回される華奢な腕、首筋にかかる吐息。聞きなれた声、これは……。

「お前か、驚かすなよ」

「ふふん、それが見たかったのだあ」

こいつは……まったく、心臓に悪いっての。まあ、嫌な気持ちにはならんけどさ。

「で、どうする？」

「もちろん、お世話になります！」

ビシッと敬礼する楯無、もとい新たな同居人。まあ、頑張りますか。毎日が騒がしくなりそうだけでも。

「あ、そうだ。音羽」

「あん？」

そおつと楯無が耳元で囁く。

「更識美月、それが私の名前。覚えてね？」

この日、俺は彼女の真名を知った。

26・特別な存在（後書き）

どうでも良い作品情報

どこでもできたての紅茶が飲める音羽、お茶菓子も常備していると
か

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった（前書き）

なんと、PV70000越えにユニーク6000人越えてました。なにかお祝いしたほうが良いですかね？

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった

「いや、新婚夫婦みたいね」

「お前の将来の夫に同情するよ、大変そうだ」

上機嫌で本家から送られて来た絶好のスニークアイテム、もといダンボールの荷を解く美月（二人のときはそう呼べと言われた）。出てくるのは某蛇さんでは無く、服や下着にティーカップから女の子らしい熊の人形まで。

「荷物多く無いか？」

「音羽が少ないだけよ、あれだけの荷物なのになんで一軒屋借りてるんだか」

えーと、俺のは家電一式に服や銃器・・・あと工具だけ。確かに一軒屋借りなくても良いような量だな、実際は二階の一部屋が銃器で埋まってるんだが。それでも空き部屋が一つある、もう一部屋は俺の寝室だが。

「うん、二階の部屋が一つ空いてるからそこで良いか？」

「良いよ、あ、タオルはそっちにお願い」

「了解です」

脚部のタイヤを回転させ、ワイヤーアームでそれを持ったmk？がウィンウィン言いながら美月が指した方向へとタオルを持っていく。音羽は食器棚にティーカップなど割れ物を仕舞っていた。

それから一時間、荷解きし片付けが終わった。居間のソファに座り音羽は寄りかかったまま燃え尽きていた、心なしか色が無い気がする。まあそこはギャグ補正ということだ。

「夕飯何が良い？」

「なんでも」

それが一番困るんだが・・・と良いながらマカロニを茹で始める音羽、すっかり青いジャージの上にオレンジのエプロンをしていた。菜箸を片手にホワイトソースを作り始める、美月はそれを見て色々諦めた。

「どれだけ手馴れてるの・・・」

「ん、ああ。厨房でも少しやってたからな、さあて今日はグラタンでもやろうかな」

慣れた手つきで器に盛っていき、最後にチーズを乗せオーブンに入れる。少しすると香ばしい匂いが部屋の中に広り始める、音羽はそれを横目に食卓の準備をしていた。

「私も負けてられないわね・・・」

「できたぞ」

できたてのグラタンが湯気を昇らせる、チーズが溶けて丁度良く広

がつていた。食欲をそそる香りが鼻をくすぐる。う、本家で食べたのより良い匂い。音羽って何でもできるのね、というかこの悔しさが半端ないわ。

「さあ、召し上がれ！」

「い、いただきます……はぐう！」

いきなり人の作ったグラタン食べて「はぐう！」とか何だ、そんなにまずかったかな？美味しく作ったんだが……。一時期は化学兵器やダークマターできたこともあるんだよなあ。それが今はしつかりした奴を出せるようになった、セシリア……。なんかまだ化学兵器作ってそうだなあ。

『クシュン……。誰か噂でもしてるのでしょうか？』

『またこの化学兵器を作ったことではないですか？いまだにこれでは音羽さまも泣きますよ』

化学兵器

なんか、相変わらず手料理化学兵器を作ってるような気がする……。チエルシーさんも大変そうだなあ、いつそのことメニュー送るかなあ。オルコット家の人間がアレなものしか作れないったら大変だ……。考えたらずげえ心配になってきた。

「どうしたの、いきなりそわそわしだして」

「いや、ちよいと元主人のことが心配になってな」

「なに、そんなにたよりないの？」

「いや、ただダークマターを作って無いかと思ってな」

「・・・・・・そんなにひどいの？」

「ああ、見た目は最高なんだけど。その分味がぶっ飛んでて」

いつだか食わされたオムライスは見た目はもう高級レストランのそれでも半熟だったんだ、でもチキンライスがタバスコや唐辛子で色付けされてて（ry

一通り説明すると、美月が顔を引きつらせながら苦笑していた。まあ、そうなるよな。

「なんか、音羽がそうだったのがわかった気がするわ」

「そうか、そうだったら嬉しいよ・・・」

はあ、とため息をつきながらも談笑しながら楽しい夕食の時間は過ぎていった。翌日の朝、一夏に冷やかされたのはまた別の話だ。

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽のオーバースペックはほぼ必要に駆られた結果

お知らせ 24話と25話少し修正しました。

28 生徒の長は大変なんだよな（前書き）

へーい、お祝いで何しようか迷ってる作者です

28・生徒の長は大変なんだよな

「おはよう！はい、おはよう！」

「おはようございまーす！」

とある朝、校門前で俺と美月にジャックの生徒会三人で朝の挨拶運動中。なんで風紀委員がやらないんだ？

ちなみに遅刻者には生徒会長から嬉しい特別指導！近接格闘編！らしい、なにその壮大な物語っぽい感じ。

というか俺に許可とらずにそういうの決めるなよ、なんで副会長のほうが権限あるの？ああつ、なんでギリギリだからってそんな顔で走るんだ！

「だって、ねえ？」

「え、いまだに初日のあれが響いてるわけ？」

「そっだよ」

転校初日、学校内の嫌われ者教師を組み伏せたのだ。教育的指導で組み手をさせられて、勝てたら終了というルールで・・・勝ったんだよね。しかも不意打ちされたのも癖で反撃したし・・・まあ、逆の立場だったら俺もそうなる。

「まじか」

そのせいで、交番から警官呼んでの講話では俺が生徒代表で本職の人と手合わせさせられて防犯教室じゃなくて生徒会長VS警官の試合に成り果てたし。付き添いの警官二人は上司であるう警官を応援して、生徒や教師は俺を応援すると言うシュールな状態になったし。まさかの教育委員会の人まで巻き込んだ2時間に及ぶ白熱した試合

だった……この学校大丈夫なのか？

「まあ、良いじゃない。発言権が上がったし」

「そりゃあ、それは助かるけどさ」

もしかしたら国内では生徒の要望が一番通りやすい学校なんじゃないか、教師側も生徒が問題起こさないから話し合いもそれなりに開けるし。というか、学校内では男女平等な感じになってるし……・まあ、就任演説でそういうことを言ったのもあるのかもしれないが。

「そついや、音羽の夢ってそれだっけ？」

「まあな、早い話が二人みたいな理解ある女性が増えて欲しいってこと」

「あはは、それには賛成だね」

放課後……生徒会室で要望書を吟味していた。もちろん全員で。

「『消えろ、イレギュラー！b y匿名希望』……却下、てかネタに走るな」

「『アイス！アイス！b y青いマフラー』こっちに要望されてもねえ……却下」

「『ネタが浮かびませんb y G』自分でどうにかしてよ」

緩い分、こういうところでふざけてくれる愛すべき生徒たち。別に怒らないけど、要望じゃなくて相談になってるし。てか、関係ないのも混じってないか？

「『エアーマンが倒せないb y匿名希望』俺だって無理だったわ、頑張れ」

「『3分間だけ待ってやるb y某大佐』どう考えても3分過ぎてます、ありがとうございます」

「『起動してもらえせんb yネギ』待つしかないよ」

『はあ……』

まともな要望が無いぞこれ、てかふざけ過ぎだろ。ネタばかりとかいい加減にしろ、もう少しまともな要望は無かったのか。この学校の生徒にまともな奴はいないのか、どうなんだ。

「『友人が他校の生徒にいじめを受けてるみたいなんです、私では無理でした。どうか助けてあげてください！b y西本愛美』いじめだと？くだらんことをする奴がいるもんだなあ」

まあ、勿論動くけどな。こういう時のために要望書を受け付けてるんだからな、明日にでも本人に聞いてみるか。

「つまり、相手は高校生だと？ふむ」

いじめられているという少女、陣内良子さんに事情を聞いていた。なんでもハーフラしく、金髪碧眼だと言うだけで会うたびに空き缶は投げつけられ、あまつさえ先日は小石を投げつけられて頭を少し切ったとか。ひどい人種差別だこと、しかも相手は日本人の女子高校生。そいつらが言うには珍しいからって可愛がられるのが気に入らないらしい。

「で、そいつらは有名な不良グループの頭だと……厄介だなあ」

「しかも、明日の午後6時に川原に呼び出しされていて5万持って来ればやめるって……」

そういうタイプの輩って後からまた要求するんだよね、てか、親はどうしてんだ？娘がそういうことしてるんだったら気づくだろう、ただでさえそういうこととしてれば目立つのに。

「しかも、そのリーダーの人の親はヤではじまる職業らしいよ？」

「……なんて厄介な、そう簡単に手が出せないじゃんかよ」

後が怖いってやつだよなあ、一般人だったら殺されるぞ。しっかりした証拠なきや警察に突き出せないし……どうするかなあ。あ。

「おし、じゃあ良子さん。その日、約束どおり待ち合わせ場所に行ってください」

「え、ちよつと。音羽！？」

「まあ、安心してください。どうかして見せますよ！」

28・生徒の長は大変なんだよな（後書き）

もし原作までぶっこんでも気にしないでね

どうでも良い作品情報

音羽は普段容姿は男の娘（黒髪サイドテールに赤縁眼鏡）

29・結果・・・（前書き）

後半gdりました・・・orz

29・結果……

午後6時、とある川原。

「おし、約束の5万だ」

「な、ないです……」

陣内良子は音羽に言われたとおりに来たは良いが、中学三年に5万の金額など用意できるわけもなかった。

もちろん、相手の女。この付近では有名な不良グループのリーダー、版内芽衣子が納得するはずもない。

「ああ？無いって、はいそうですかってなるわけねえだろうがよ！」

「まあまあ、そこはどうか勘弁してくれませんか？」

良子のポニーテールに手が触れる瞬間、その腕が何者かに押さえられる。

「そこまで、つてとこか。ギリギリ間に合ったな」

「てめえ、何者だ。邪魔すんじゃねえぞ！」

腰まで届く黒のサイドテール、見透かすように赤縁の眼鏡の奥に鋭い瞳があった。まだ若い、並木野中の生徒であることしか制服からはわからない。

「いえ、うちの生徒が虐めを受けているということ。ご確認に来た次第です」

「へっ、ご苦労なこつて。してるって言ったらどうなるんだよ？」

瞬間、その少女の顔から笑みが消える。

「しかるべき処置、この場合は恐喝と言うことで法に訴えますかね」
「させると思うか？」

「まあ、これでも言えるでしょうか。ね？権三さん」

少女の背後から出てきたがっしりした体格の男性、いかにも親父イ
みたいなこの人は版内権三。版内組の組長であり、芽衣子の父親で
ある。ちなみに表では版内建築の会長である。過ごしやすく、安価
だと評判だ。

「親父！？なんでここに」

「この坊主が教えてくれたんだよ、お前がちよいと人様に迷惑かけ
てるってな」

「髪の色がなんだ、目の色がなんだ。お前だって昔は友達にも居た
じゃねえか」

「いたさ、でも、裏切られた。所詮外人なんてそんなもんだ」

権三さんに話に言ったときに聞いた。なんでも、親友とまで呼べる
ほどだった友人。そいつに言葉巧みに誘導され強姦まがいのこと
をされそうになった。それがいまだに心に傷として残り、異常なま
でに外人に拒否反応。特に金髪碧眼、聞くに堪えなかったが……
そういうのがあるからって許されることじゃない。

「そ、そうだったんですか……」

「ああ、そうさ。第一、あたしに近寄ってくる奴も気に入らねえ」

「なあ、芽衣子さん。あんたは、そうやってるときにどう思った？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「芽衣子、俺が来た途端に目を逸らしたよな？それが答えか？」

沈黙、ただそれだけがその場を埋め尽くす。

「ああ、自分でもわかるさ。ただの八つ当たりだってことくらい、でも、無理だった」

「へっ、わかってやってたなんてなあ。まあ、仕方ねえ。良子さん、これで許してやってくれんか？」

芽衣子の頭を押さえつけ、親子ともども頭を下げる。世間一般には土下座と言われるものだ。

「あ、いえ。芽衣子さんが自分でわかってるならそれでいいです」
「・・・・・・・・い、今まで済まなかった！これで許してもらおうとは思わん、何でも命令してくれ」

芽衣子がさきほどまでのきつい目ではなく、一人の少女としてまっすぐ良子さんを見据える。

「じゃあ、私とお友達になってください」

「あれだけのことしたあたしが？」

「ええ、もう一回、信じてみませんか？」

良子さん言い女すぎる、と思ったのは俺だけではなかったはず。

「ひとまず、一件落着か」

29・結果・・・（後書き）

え、あともう一回更新できるかと9時ころに

30・夏ならば(前書き)

相変わらず季節感の無いGです、もう現実には秋ですが気にせずどうぞ

30・夏ならば

「音羽さん、こっちはコンロの準備終わりました!」

「おう、じゃあ遊びに行つていいぞ簪ちゃん」

今は夏、季節感無いって言われてもここは夏なんだ。現在、美月・一夏・簪・鈴・千冬さんと俺のメンバーで海に面したキャンプ場にいる。なんでも一夏と鈴が髪のことと弄られていた簪のことを助けたそう、男らしいねえ。鈴音ちゃんは女の子だけ。

「すまないな音羽」

「いえ、いつもお忙しいみたいです。こういつときくらいは相手してあげてください」

久しぶりに休暇で帰ってきた千冬さんを一夏と一緒にしてあげるつても目的なんだよね、もちろん夏だからつてもあるが。

「音兄、終わった」

「あたしも」

二人に頼んだのは水汲みだ、貯蓄しておかないと使うときに二度手間だからな。ちなみに俺はテントを千冬さんと美月で組み立ててる。もちろん部品状態を量子展開したがなにか？

「おし、じゃ三人で遊んできていいぞ。怪我はするなよ?」

はーい、という元気な声を受けながらロープをくり付けたピックを地面へと打ち込む。これをしっかりやっておかないと風で飛んでしまう。流石に寢床が無いつてのは困るでしょ。というか、千冬さ

んの方角からガスッ！とか聞こえる……どれだけ力入れてるんだ……。

「終わりました？」

「ああ、深めにしたから大丈夫だろう」

「オッケーだよ」

テントの建設……間違っではないな……も終わり、あとはまあ……遊ぶ？というか急遽これを企画したのも理由がある、俺と一夏しか知らないが鈴音ちゃんの家が空気が変わったからだ。だから気分転換も含む、どうせならジャックも思ったがあいつが「夏はドイツで妹分をね」とか言っていたから無理。

「さて、俺はどうするかなあ」

なんか千冬さんが残像残して走っていったんだが、しかも丁寧にキャストオフして……もちろん水着は着てたぞ？若干、鈴音ちゃんと簪ちゃんがびっくりしてたが。ひとまずブラコン乙。いくら滅多に居れないからってそこまでか。シャツとズボンを丁寧に畳んであるから余計に。

「俺も泳ぐかな」

「じゃあ私もそうしようかな」

えーと、服を格納して同時に水泳用の海パンを展開する。自分でやっついてなんだが、便利だなこれ。

美月はなぜか俺の後ろで着替えてますが、見ないよ……紳士（変態ではない）の行動じゃないだろう。

まあ、紳士のしの字もおれには無いけどな。

「お、似合ってるじゃんか」

「ふふ、この日のために新調したのよ」

中二とは思えないほど発育の良い身体を髪と同じ水色のビキニ・・・で良いのか？を纏っている、まあいいんじゃないか。特に俺はどういうことは無いが、ちなみに雅から受け取ったペンダントは外している。

失くしたらいけないからな。

「さてと、俺はモーターボートでも借りて「私も乗るわよ！」どうなっても知らん」

「いいいやっはあああああああああああ！！」

「いやあああああああああ！！」

時速80kmで海面を滑走する状況に、美月が泣き叫んでいるが気にしない。俺は、ただ、走る！！

日が既に海中に没し、夜空には月が昇っていた。コンロからは香ばしい香りと肉と魚が焼ける音が聞こえる。昼間一杯に遊んだ俺達、千冬さんが三人を相手に笑顔で水かけあいなどしていたし・・・まあ、良かった。隣で串に刺さった肉を齧りながらでくと美月が寄りかかっているが。

「久しぶりにはしゃいだな」

「千冬姉、途中からめちゃくちゃ水かけてきたもんな」

「まさか飲み込まれるとは思わなかったわよ」

「でも、楽しかった」

うんうん、企画した甲斐があるってもんだな。美月は高速で滑走したからのびてるが・・・すまん。

「さてと、そろそろだな。空をご覧あれ！」

パチンと指を鳴らす、その途端、夜空に大輪の花が咲いた。

「すげ〜」

「わああ」

「綺麗・・・」

ふふふ、ここから見える小島にはタイマーを仕掛けた自動花火発射装置が置いてある。当分は大なり小なり綺麗な花火が打ち上げられる。量子化って便利だね。

「ほお・・・」

「うふふ、用意が良いのね」

「どうせなら、楽しみたいでしょ」

その間も様々な花火がこれでもかと光り輝く、どこぞの花火大会にも対抗できるぞこれ。ちなみに費用はライセンス料と売り上げからだから問題無し。綺麗だな〜。

こうして、今年の夏も過ぎていく。あいつらにも良い思い出になったでしょ、もちろん俺らもだけど。

30・夏ならば(後書き)

どうしても良い作品情報

そろそろ飛ぶ

31・キャラクターまとめ（前書き）

それ以上でもそれ以下でもない

31・キャラクターまとめ

メインキャラ紹介

更識楯無（女）

音羽が並木野中学校で最初に出会った生徒、一学年生徒会長を務めていたこともありとても有能。

対暗部用暗部「更識家」17代目当主、になったばかり。16代目が先陣切っているので実力は・・・お察しください。並木野中学校一学年生徒会長。少しの殺気で泣いてしまうなどまだまだ普通の女の子、自身を助けに来てくれた音羽に惚れたらしい。本家の意向で音羽と同居中。本名は美月（音羽にのみ教えた）

ジャクリーヌ・ウェルキン（女）

音羽に決闘を申し込み見事惨敗した残念な人、しかしその身体能力は素晴らしい！

音羽の強さに惚れた女（自称）普段はほわ〜っとしているが、本気になるの色々すごい。
たまにドイツ語を話すことがある、my財布には黒うさぎの紋章がある。

並木野中学校生徒会書記。愛称はジャック。

岸川頼子（女）

音羽たちが在籍する一年三組の担任、熱くなると松修三なみにな

つてしまう。

女尊男卑の社会には珍しい男女平等をモットーに生きる新任教師。ただし、初対面にはきつく当たってしまう癖がある。（本人は改善したいが現時点ではまだまだ）

雅（女）

冬の公園で倒れたところを音羽に助けられた少女。音羽と同年らしいがその素性は一切不明、引き取りに来た人物は彼女曰く、IS装備開発企業の人物だった。家事スキルが壊滅的で、口調もところどころ男っぽい部分がある。日本人らしいが雑煮を知らなかったりする、しかしレゾナンスで音羽が買った服を笑顔で着るなど女の子らしい一面もある。音羽が身に着けているペンダントは雅がお礼として渡した物である。

31・キャラクターまとめ（後書き）

さて、次回は・・・お楽しみに

どうでも良い作品情報

次回やっとなる

32・不幸な二人（前書き）

さあ、原作開始・・・

32・不幸な二人

三月、真面目に受験勉強をして藍越学園に入学し一年が経過。

美月はロシア代表としてIS学園に入学、中二の終わりにロシアに渡ってからは滅多に会えない。俺の護衛もそこで終わった。少し寂しいが仕方ない。

まあ、学園祭には招待されたからその時に会えたが見違えていた。それから鈴音ちゃんが中三になるまえに中国へ、寂しくはなったがなにか一夏と約束をしていたらしい。

ちなみに今日は入試の日である、なぜか去年行われた不正によって電車で四駅行った場所で試験なんていう変なことになっている。俺のときは校舎でだったのになあ、ちなみに一夏が受験する。

「音兄、俺頑張ってくるよ」

「おう、行って来い。まあ、俺も仕事あるんだけども」

並木野中で連続で生徒会長やった因果か、藍越でもやることに・・・一学年の다가確実に来年やらされる。しかも俺の前に入った先輩が全員指名という状況、普通あんたらだろうと言いたい面接官にまで「ああ、君が！」とか過剰な反応されたし。

「受付だっけ？」

「ああ、そうなんだが・・・場所がわからん」

おいおい、高１と中三が迷子ってシャレにならん。しかも１学年生徒会長がだぞ・・・嫌な汗が流れ始める、というか流れてる。なんでこんな複雑な構造なんだ！常識に囚われない俺 SUGEE な感性で設計されたとしか考えられない、しかも会場は前日発表（しかも職員だけ）だから把握できてないし。やばい、控え室での待機時間ギリギリだ。うわ~~~~！？

「音兄、多分ここだ」

一夏が指差したのは受験会場の立て札、おお助かった！

「はい、時間押してるから早く着替えてね」

こっちも見ずに女性職員が言葉をかける、せめてこっち見ようぜ。まあ、これで大丈夫か・・・って着替える？なんだ、今年から不正防止で持ち物検査じゃなくて服から変えるのか。厳しくするとは言っていたが・・・ここまでとは思わなかったな。

「おし、一夏ささつと着替えちまえ」

「あ、ああ、つて着替えるのか？」

「そうらしいな、厳しくするって言ってたしじゃあ俺は行くぞ」

そう言つて移動しようとした矢先、後ろから悲壮感たっぷりの一夏の助けが聞こえた。

「お、音兄！」

「あん、なん……は！？なんでIS、てかなぜに乗ってる？」

そこには、かつて俺がボコした打鉄を装着した一夏がいた。え、どゆこと。え」と

IS

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなった。ただし、女性しか起動・装着できず。そのために今の過度な女尊男卑社会ができた。

……重要なのは女性しか使えないと言う事だ、で、目の前で一夏が動かしてる。状況が飲み込めていないらしく、さっきから腕を動かしてる。どう考えても災難の匂いしかない。

「い、ー「え、男子が動かしてる！？」「あちゃー」

気づかれないうちに降ろそうかと思っただが、無理だった。頑張れ一夏、俺は知らん。

「無責任！？」

「俺じゃどうにもできん、大丈夫だ楯無もいるし」

「楯無さんがいるからって問題じゃないって！」

「ひとまず降りろ、そのままじゃいかんだろ」

「あ、ああ」

どうにかコックピットが開放され、一夏が降りてくる。以外に高いので俺が抱きかかえることになるんだが……でかくなっただなあ一夏も。まあ、今はそこは重要じゃないが。

「ふう、これからが大h・・・うお!？」

一夏を降ろし、騒がしいので打鉄によりかかりパニックに陥った教師陣を横目に紅茶を二人で一口飲む。もちろん紙コップだ。

「・・・なんか視界が高いなあ、まあ良いや・・・・・・・・・・つてあれえ!？」

「お、音兄まで・・・」

なにかが頭の中に流れ込んできたと思ったら、俺まで打鉄を身にまとっていた。一夏は驚きのあまり空になった紙コップを落とす。

「え、二人目!？ちょ、ちょっと。ほ、報告!！」

なんとも大変なことになってしまいました。

「なんか、俺も頑張らなきゃいけないことになったっばいな。これ」「うん・・・・・・・・」

その後、二人揃って急遽検査をされ、帰宅できたのは日が落ちてからのことだった。

32・不幸な二人（後書き）

どうでも良い作品情報

同時刻、受験会場でなぜかテンションが高い金髪少女が目撃された

33・入学・・・高校一年からやり直し（前書き）

いつもよりサクサク書けた

33・入学・・・高校一年からやり直し

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

IS学園、1年1組教室。一夏は前席センター、俺は窓側の一番後ろ。周囲からの女子の視線が痛い、もし物理干涉ができたら二人揃って蜂の巣になっているんだろう。というか、まさか高校1年からやり直しとは・・・というか、藍越学園の受験会場だったって言うね。通路一本間違えてなければ今頃2年の教室にいたのに、今更過去のこと掘り返しても仕方ないが。

『（これは・・・想像以上にきつい）』

なんとか表面上は平静を保っているが、さっきから嫌な汗が止まらない。教室に男が俺らだけってのがもうきつい、なんか一夏の背中に哀愁を感じる。

「はい、それではSHR始めますよ」
ショートホームルーム

教壇に歩いて来た緑色のショート髪の女性は山田麻耶先生、どうみても背伸び感が満載です。このクラスの副担任である、そしてある一部が異様に大きい。肩こるんだろうなあ、というか服が大きいらしくだばっとしている。愛玩動物に思えてしまうのは仕方ないことだと思うんだ！

「それでは皆さん、一年間よろしく願いますね！」
「よろしく願います」

え、返事したの俺だけ？挨拶と返事は大事だぞ、それもお世話にな

る人ならば余計だ。というか、俺だけとか寂しい。返事したのが一人だけという状況にうるたえる山田先生、不憫すぎるぞおい。

「じゃあ、自己紹介をお願いします。出席番号順で」

なんとか持ち直した山田先生が無難なものを提案する、まあ、入学式終わって最初のSHRってそんなものだよな。今のうちに何言うか考えておかねば、何も言う事が無いってのは恥ずかしいからな。第一印象は大事だぞ。

「

」

順調に進み、一夏の番なんだが。なんか様子がおかしい、む窓側・女子？知り合いか。そっぽ向かれた、ひとまず返事しようぜ。さつきから山田先生が何回も呼んでるぞ、もう軽く涙目だし。

「織斑君、織斑一夏君？」

「っは、はい！」

いきなり大声で呼ばれて驚いたのか、声が裏返った一夏。クラス中で笑いが巻き起こる、逆の立場だったら俺も恥かしいなこれは。まあ、自業自得だ諦める。

「お、大声出しちゃってごめんね。怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね。でも、自己紹介『あ』から始まって『お』なんだよね。自己紹介してくれるかなあ、ダメかなあ？」

どこだかの伝統工芸品のごとく頭をぺこぺこ下げる山田先生、何回もしているためにサイズが合っていないらしい眼鏡がずり落ちてきている。どう見ても年上には見えん、『子供が背伸びして大人っぽ

くしている』っていう感じ。一夏も軽く焦ってる。

「いや、その。しっかりやりますから、安心してください」

「ほ、ほんとですね！約束ですよ？」

顔をがばつと上げて心底嬉しそうに一夏の手をとる山田先生……
すげえ注目浴びてるな二人。俺に向いていたであろう視線が一つ残
して全部移動したぞ。あ、一夏が決心したような顔で立ち上がった
こちらを向いた、一瞬固まったが自分に向けられる視線に驚いたん
だろう。なにせ約30人ほどの視線が向いているんだから。

「え……え〜っと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

無難にまずは名前から、うんはつきり聞こえる。で？

「……………」

動きが止まった、で、次は何言うんだ？……俺に助けを求め
られてもなあ、さあ何を言う？まさかそれだけで終わるとかはあり
えないだろう、そこはわかってるはずだ。多分、メイビー、おそら
く。なぜか自信が無くなってきた。

「……………以上です（キリッ）」

え？

ガターン ドテツ ズルツ

十人十色のリアクションを取りながら一夏と俺以外の女子がずっこ
ける、俺はどうにか机に踏みとどまった。座ってるけど、てかmj

k。言うのそれだけかよ、あ。

スパアアン！！

「ザドルノフツ！」

なんか一夏が変な声上げて頭抱えて蹲ってる、出席簿を振り下ろした人物とは！……千冬さんでした、ここの担任か。あのあとの試験ですげえ嬉しそうに笑顔で近接ブレード持って突進してきた人と同一人物とは思えないくらいビシッと決まってる。もはやあのだらしん

ズガンツ！

「FOX DIE！」

出席簿が俺の額目掛けて飛んできた、命中した途端にブーメランみたいに戻っていく……それ本当に出席簿ですか？

「くだらんこと考えるのもそこまでにしておけ」

「はい」

千冬さんがクラス全体を一瞥し、言葉を紡ぐ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ、私の言う事は良く聞き理解しろ。出来ない者には出来るようになるまで指導してやる、私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛えぬくことだ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け。いいな」

無論、世界最強の言葉に大勢が歓喜した。一部に淑女が含まれていた気がするが……。

もちろん、その熱狂的な言葉の乱射に対して根っからうつつがっているのが千冬さんらしい。

「で、お前はまともに自己紹介も出来んのか」

「いや、千冬姉。俺h」

スパァン！

クラスに姉弟であることがばれ、今までで一夏の脳細胞が1万個死んだのは言うまでもない。

33・入学・・・高校一年からやり直し（後書き）

どうでも良い作品情報

クラスメートに変更アリ

34・再開・・・したは良いけど(前書き)

音羽のおかげでセシリア良い子

34・再開・・・・・・・・したは良いけど

「さて、時間も無いのでな。如月、自己紹介しろ」

「はい、織斑先生」

一夏はまだ痛みに耐え切れず蹲っている、のた打ち回らないだけマシか。てか、千冬さんが言った途端に俺に視線が集まる。うお、これはそりゃ動きが止まるわな。ビシビシ視線が突き刺さる、圧倒されるってこういうことなんだな。

「えー、藍越学園から転校して来ました。如月音羽です、趣味はサイクリングです。年上ですが気にせず話しかけてください、ひとまず一年間よろしくお願いします」

これで良いはず・・・・・・・・なんか一人だけ視線を叩きつけてくる奴がいるが誰だ？今はまあいいか。

「これでSHRを終わる、授業の準備をしておけよ？」

や、やっと終わった・・・・・・・・もう既に疲れたんだが。廊下を見てもれば終わってから数分も経っていないのに人だから、そうか、これが動物園の動物たちの状況か！ひとまず動物たちよスマン、君たちの気持ちも知らずにいてごめんなさい。

「ちょっと良いかしら？」

なんか最近ずっとご無沙汰な声が聞こえる・・・・・・・・こ、これはもしや！

「セシリア？」

「5年ぶりですわね、まさかこうなるとは思っていませんでしたけど」

まあ、そうだな。まさか同じ学校の同じ教室で再開とは……嬉しいような悲しいような。

「ここにつてことは、候補生に？」

「ええ、オルコット家も安心ですわ。約束通りに」

「おお、良かった、良かったああ」

「きゃあ……もう／＼」

思わず立派に成長したセシリアを見て安心した、というか嬉しくてつい抱き締める。

「うんうん、元気そうで安心したよ」

「私もですわ、久しぶりですわね。音羽に抱かれるのって」

まあ、最後に抱き締めたのってイギリス出る前日以来だからなあ。これでミリアさんも安心だ、俺は勿論安心だ。俺は！今！猛烈に！感動している！

「つと、ギャラリーが騒がしいな」

「あつ……そうですわね」

さっき一夏が見た少女がこっち見て羨ましそうに見ながら一夏を引っ張っていった、一夏はなんか勘違いしてるみたいだが。というか廊下の人だかりがキヤーキヤー五月蠅いな、家族と抱き合うくらい別にどうってこと無いだろ。

「ありや、もう時間か。じゃあまた後でな」

「ええ、また後で」

予鈴が鳴り、一夏が出席簿アタックを食らったのは言うまでもない。流石ブラコン、弟には容赦が無い。

ちなみに俺はすでに教科書とノートを用意し終わっている、予習はしたから大丈夫なはず。いやまあ、なにせ急だったからなあ。まあ、セシリアが同じクラスってだけでも安心できる。というか、どうせならもつと早く分かってれば良かったのになあ。なにとはともあれ頑張るしかないか。

「で、あいつは何で怪しい動きをしてんだ？」

さつきから山田先生が授業をしているんだが、一夏は関係ない教科書の関連性の無いページを開いている。そこは実習でのISの飛行軌道の応用だぞ……あんなで大丈夫なのか？

「ここまででわからないところがありますか？」

「……」

一夏だけがびくつと肩を震わせる、わからないんですねどうもありがとうございました。そこへ教室の後ろに立っていた千冬さんがかつかと歩いていく、その手には出席簿が握られていた。一夏……なむ。

「……織斑、入学前に参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違っ捨てました」

ズゴム

「・・・!!」

「必読と書いてあったろうが馬鹿者、あとで再発行してやるから1週間で覚える。いいな」

「いや、あの厚さを1週間でとか無理が・・・」

「やれと言っている」

「・・・はい、わかりました」

あれを1週間か、どうみてもあなたの街の電話帳、もしくは百科事典くらいの厚さなのに。しかも一ページが透けるようになっていくペラ紙・・・普通に無理だよなあ。それをやらせようとするのが千冬さんらしいけど。

「ISはその機動力・攻撃力・防御力、その全てが既存の兵器を凌駕する存在だ。その『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚える、そして守れ。規則とはそういうものだ」

正論、一夏も納得したような顔で千冬さんの顔を見る。まあ反論できないわな、まだ一夏がなんか考えてるみたいだが。おそらくしょうもないことだろう、望んでここににいるわけじゃないとか・・・。

「貴様『望んでいるわけでは無い』とか考えているな」

一夏がまたビクリと震える、凶星かよ。結局どこへ行ってもその場所ですべていかになくちゃいけない、それが嫌なら「人であることを辞めることだ」ってわけだ。相変わらず辛辣だねえ、まあ現実と直面して生きるしかないからな。俺の場合は諦めが混じってるきがしなくもないが・・・。

「え、えつと織斑君。わからないところは放課後に先生が教えてあ

げますから、頑張つて！ね、ね？」

山田先生が一夏の手をとって詰め寄っている、あいつ・・・まあ視線が行くのは年頃だから仕方ないか。あ、逸らしたつまん。

「じゃあ、放課後によろしく願いします」

「はい、頑張りましたよ！」

心なしか山田先生の顔が赤い、確実に変な妄想してるなあね。本当にIS操縦者つて男に免疫無いのか、あ、転んだ。本当に大丈夫なんだろうか、すごい心配だ。

「お、音兄・・・」

「やつれてんなあ、俺もそんな感じだが・・・」

『はあ・・・』

周囲の女子が観察するような視線が集中するなか、暗くため息を吐く男子二人・・・なんてシニールな光景だろうか。ああ、弾なら「羨ましいですよ！変わってください！」とか言っただろうなあ。できたら変わりたい・・・。まあ、心労が耐えないだろうけども。

「ところで音兄、さっき抱き締めてた子って誰？」

「ん、ああ。おゝい、セシリア」

はゝい、と返事をしてなぜか嬉しそうに（当社比30%増し、基準は知らん）駆け寄ってくる。

「どうかしまして？」

「いや、こいつが聞いてきたんでな」

「この方がもう一人の？」

「ああ、織斑一夏だ。よろしくオルコットさん」

「ええ、期待していますわ。一夏さん、セシリアと呼んでくださって構いませんわ」

うんうん、初対面でも良い感じだな。もし俺が居なかったらここで二人が喧嘩してるような気がする、うん。

「そっぴや、二人って付き合ってるのか？」

「え、そ、そんな／＼」

「んなわけねえだろ、家族のスキンシップだったの」

少なくとも俺はそう思ってる、あれ、セシリアがなんか残念って感じで肩を下げてる……？一夏もなんか苦笑いしてるし、一体なんだってん爪先に鋭い痛みがあああああ！！

「頑張ってくれ、セシリア」

「ええ、心遣い感謝しますわ」

だから、なんで俺を見て残念そうな顔をするんだ。セシリアならともかく、一夏にまでそういう目で見られるのは納得がいかん。ま、またため息……俺って何かしたか？

『はあ』

な、なんなんだ一体！そ、そっぴ話題を変えようとかそっぴなければ俺のガンダニウム合金ハートに輝が入ってしまう。

「そーいや、一夏を連れてった女の子って誰？」

「ん、ああ。俺の……ってやべ時間だ。あ、後で話す」
「おう」

時計を見れば本鈴ギリギリ、時間を過ぎてしまった数人が出席簿の
餌食になってしまったのは言うまでもない。

34・再開・・・したは良いけど（後書き）

どうでも良い作品情報

まだ寮の部屋の相手が決まっていない（ライ

35・気疲れって結構きつい

キンコーン カンコーン

音が外れていたのに数人がずっとこける、なんで外れてんだよ。普通どこも同じはずなんだが・・・ひとまず授業が始まるから置いておこう。多分こういうものなんだ、そうに違いない。そうやってなんとか自分に言い聞かせながらノートを開いた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきとは違い、今の時間の担当は千冬さんらしい。なんで山田先生まで机に座って板書のスタンバイをしているのか不思議だが、とつかどう見ても制服着てたら生徒で通じるでしょ。ひとまず年上には見えんな！と、千冬さんの授業ということはサボれない・・・いやまあ、誰の授業でもサボる気は無いけども。

「ああ、忘れる前に。再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければいけないな」

クラス代表・・・確かあいつの話では、「生徒会の開く会議や委員会に出る、つまりはクラス長よ」「うんわかった、面倒くさいことなのはわかった。俺はやらないぞ、絶対に、何があっても。天地がひっくり返ろうが世界中を敵に回そうがやらん。あ、セシリアは別な。

「ちなみに、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。現時点では対した差は無いが、競争は向上心を生む。

一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで……自薦他薦は問わん」

決められたら大層面倒なんですね、わかります。よし、ここはそれとなく一夏に押し付けよう。うん、そうしよう。というかクラスが騒がしいし、視線が俺と一夏に向き始めてる……。やばいぞこれ。嫌な予感がすげえる、主に男子二人に降りかかるのを。

「はい。織斑一夏君を推薦します！」

「私も織斑君を推薦します！」

いいぞ、もつとやれ。と言ってもそうは上手くいかないのが世の中だよなあ、何人か並木野の生徒見つけたし。まあ、やるって決まったらやるけど不可抗力でない限りやらん。せめてここでくらいゆっくりにしたい、某ゆっくり程度くらいには。あいつが居る時点で無理な感じがしてきたが。

「私は如月音羽君を推薦します！」

「あたしも如月君を推薦します！」

某宇宙がキター！な人がいるのか！？いや、俺だった。というかISなら宇宙余裕で行けるじゃんか、まあくだらん話は放っておいて

「私^{わたし}、セシリア・オルコット立候補させていただきます！」

ああ、そうだ。ほとんどの場合は候補生がクラス代表になるんだっただか、まあ当たり前前の措置だよな。国背負って来てるんだもの、実力見せて活躍しなければいけない。それにセシリアの場合は家も背負ってるんだ、余計に頑張らなければいけないだろう。

「ふむ、候補者は織斑に如月。オルコットか、さてどう決めるか」
「ちよ、ちよっと待ってください！俺はやらないです！」

「自薦他薦は問わないと言った、他薦された者に拒否権は無い。選ばれた以上は覚悟しろ」

ですよね、と言う空気がクラスを満たす。まあ、当たり前だな。

「なんで音兄は平然としてるんだよ……」

「こんなの今に始まったことじゃないしな」

中学転校二日目に始まり、中学三年に続き。高校一年……ここまで続けばもう慣れるってものだ、慣れたくなかったがなあ。まあ不可抗力にはどうしようもないし、俺も良い経験になったから結果オーライだ。

てか、俺を推薦したの全員並木野出身だし……良いんだけどさ。

「ああ、どうせなら織斑に専用機が来ることだし模擬戦で決めるか」

え、マジで。普通国家代表候補生でも数人しか与えられない物を……ああ、男子ってことでデータ取りか？それなら納得、じゃあ俺はどうなるんだ。無いなら無いでいいけど。てか、一夏が専用機？なにそれ美味しいの状態で……。お前なあ、呆れる通り越して尊敬するぞ。

「ああ、如月の場合は遅れるそうだな」
「わかりました」

多分……
夫だ、狂気に染まった千冬さんとの実技試験に比べれば。いけない、

思い出したら震えてきた。ひとまずあのことは黒歴史に指定しておこう、じゃないと精神的に色々大変だ。

「では、一週間後にクラス代表決定戦を行う。三人とも異論は無いな細かい連絡は後でする」

「真剣勝負で決めるなら良いか、問題ありません」

「はい、大丈夫です」

「わかりました」

ちなみに、一夏、俺、セシリアの順番だ。まあ頑張ってみるか。

放課後、俺はともかく一夏が机にぐでぐと情けないくらいに伸びていた。気持ちわかるがなあ、もう少ししゃきつとできないものか。昼休みにあの女の子、篠ノ之箒ちゃんと話をした。一夏、お前は小学生のときからフラグメーカーだったんだな。なんかここでも増えそうな気がするんだが。夜道は気をつけろよ。

「ふう」

俺は絶賛ティータイム、召還した紙コップに紅茶を注いで休憩してる。さつきから誰かが教室に向かって歩いてきてるし、それに移動する気力も無い。初日をどうにか耐えられたんだ、これくらい許されても良いと思う、ちなみに一夏は番茶だ。昼休みは大変だった、セシリアにはエスコートしろって腕からませられて落ち着かないし後ろに女子が大勢並んで追いかけてきたし。一夏も同じ感じだった、

お互い苦労するな。

「あ、お二人ともまだ居ましたね丁度良かったです」

ファイルを小脇に抱えた山田先生と千冬さんが教室に入ってきた、予想はある程度できるがな。

てか、マジで小柄なんだな。平均らしいが、やっぱり年上には見えない。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋の書かれたキーを渡してくる山田先生。ここISS学園は全寮制なんだよな、しかも寮で生活することが義務付けられている。将来有望な生徒を保護するっていう目的もあるけどな。

「え、1週間は自宅からつて聞いたんですけど」

「やっぱし、俺らの保護ですか？」

はい、すみませんね急で。と山田先生が謝ってくる、いや先生が悪いんじゃないんだけどね。まあ、二人しかいない男性操縦者つてことで外部から狙われやすいだろう。実際、家にマスコミから研究所の人間まで押しかけてきたし。それから開放されるのが早まったんだしどっちかって言つと嬉しいな、俺は。

「で、キーが番号違つてことは別室つてことですね」

「はい、部屋割りを急に変更したので分かれてしまいました。一ヶ月もすれば一緒になりますので我慢してくださいね」

それくらいなら問題ない、なにせあいつと一年以上同居してたんだ。今更女子が同室つてことで狼狽しないさ、天文学的確率で。

「それってほとんどダメじゃね！？ってそれは良いや、荷物持ってきてないんで今日は帰って良いですか？」

「あ、いえ。荷物は」

山田先生が言いかけた途端、ずっと黙っていた千冬さんが口を開いた。BGMはMGSの戦闘時のをどうぞ、ちなみにずっと警戒体制だ。

「私が手配してやった、ありがたく思え」

「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器で十分だろう」

日々の潤いは大事だと思うんだ、俺は右腕のこれに格納してあるけど。ひとまず一夏にいくつかは貸しておこう、何も無いのはきついぞ。特に年頃の男子は。

「じゃあ、時間を見て行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがあります。大浴場もありますが、今のところはお二人とも使えません」

なん……だと、風呂使えないとは……仕方ない外出許可を貰って銭湯に！

「そのような理由で外出許可は出ないぞ如月」

「はあ、わかりました」

「え、なんで使えないんですk頭頂部に突き刺さるような痛みがあ

あ！！」

ひとまず頭の回らない馬鹿の頭に拳を振り下ろしておく、普通にわかるだろ。男子は俺らだけなんだから。

「お前は女子と入るつもりか、バカ」

「ああ、そっか。そういうことか」

山田先生がなんかおかしくなりはじめたが、気にしたら負けだと思う。なんか、色々腐女子的ワードが聞こえたが知らん。俺にも一夏にもそういう趣味は無い、廊下の女子が攻めだの受けだの言ってるが俺は何も聞いてないぞ！一夏は苦笑いしていたがな。

「じゃあ、私たちは会議があるので行きますね。道草食っちゃいけませんよ？」

校舎出たら50mくらいしかないのにどうやって道草食えというのか、まあ、言われなくても休みたいからまっすぐ行くけども。一夏は1025、俺は1026だ。俺だけ嫌な予感がするのは気のせいではないはず、昔から嫌な予感だけは当たるんだよな。嬉しくないことに。

「まあ、今日はもう帰ろう。疲れたよ俺は」

「そうだな、なんか嫌な予感がするけども」

ははは、と一夏が笑う。それで済めばいいけどなあ。

35・気疲れって結構きつい（後書き）

どうでも良い作品情報

あいっつて、あいっつのことじゃ

36・疲れは溜めないようにしていきましょう(前書き)

あれ、
さうった？

36・疲れは溜めないようにしましょう

ガチャリ バタン！

トイレに寄って遅れた俺を出迎えた寮では、一夏の部屋の前に人だかり。なぜか穴が開いている扉に寄りかかってとてつもなく焦っている一夏がいた。ああ、周りが下着の上に薄手のシャツくらいだから。うお、扉から木刀が突き出てる・・・誰が直すんだこれ。

「箒さん、箒さん。入れてください、じゃないと色々と危ないです」

「ガンバ」

「音兄・・・」

さて、俺は俺で部屋に入るか。なんか半年振りの気配を感じるが、よし、普通に開けよう。いちいち動いてたら余計疲れる、どうにでもなれ。

ガチャ バン！

「お帰りなさい、ご飯にします？お風呂にします？それとも、わた・し？」

バタン！

きつと疲れてるんだ、そうに違いない。あいつが学園にいるからっていう理由ですごいリアルな幻覚に見えるんだ、絶対そうだ。そうだと云ってくれ！裸エプロンの格好であいつが飛び出てくるなんて、俺はなんなんだ。溜まってるのか？そうなのか！？しかもあいつで？

ガチャ

「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「選択肢が一つしか無いだろうが！」

スパアン！！

俺のmyハリセンが火を噴くぜ、って感じに一閃。言い終わったのを確認したと同時に召還、振り下ろす。紙製と侮ること無かれ、たとえISの絶対防御があつても衝撃は貫通するという無駄な技術の塊だ。

その証拠にうつ伏せで倒れた特徴的な水色の髪をした少女が倒れている、痛そう？こいつに手加減は必要ない。さうて、荷物置こう。もちろんこいつを掴んでベッドに放り投げる。

「いつまで倒れてるつもりだ、風邪引くぞ」

「少しくらい心配しても良いと思うけどなあ？」

「学園最強を心配してどうすんだ、てか早く着替える。美月」

既にドアは閉めてあるため、部屋の中には二人しかいない。俺はベッドに腰掛けているが、こいつはいつまでうつ伏せのつもりだ。いい加減起きろってんだ。そう考えながら着替えや荷物を展開していく、まあダンボールに入れて運ぶのが面倒だったってのがあるが。出てくる出てくる、シャツから鍋から包丁まで……ちなみに小型ジェットパックもスピアのベルトバックルに格納されてる。わからない奴はググれ。

「うゝむ、今日は食堂行くか」

「そうだね」

「まず着替えろ、話はそれからだ」

半年振りになるのか？前に会ったのが学園祭のときだし。ちなみに一夏と並んで二ユースになったときにメールでm9（^ ^）って送ってきやがった。そうだよ、馬鹿やつたさ二人して。思い出したら腹たつてきた。

「まあ、久しぶり」

「ふふっ、そうね。ようこそISS学園へ！」

ビシッと決めたのはいいが、スク水着用エプロンだから締まらないなあ。まだ着替えてないし・・・目のやりどころに困るんだがなあ、ただでさえスタイル良いんだし。俺は某流さんみたいに耐性ないし、ひとまず視線を外そう。見てるとそれきっかけに弄られる、主に俺の理性を削るようなことをしてくるから困るんだ。

コンコン

なんだ、一夏か？ちようど良いや。

「音羽、居ますか？」

お、セシリアだ・・・なぜ後ろから痛いくらいの視線が突き刺さってるんだが何故だろう。おし、制服に着替えてるな。だからなぜ睨む、俺何もしてないだろうがよ。ハリセンで叩いたけど。

「居るぞ、丁度いいやまだ飯食ってないだろ。食堂行かないか？」

「ええ、その方は？」

すると、美月が目をキラんと輝かせて目の前にジャンプ。俺の上に乗っかってきた、ぐ、体重かけんな。そしてやわらかいそれを何気

ないように当てんなバカ、心臓に悪いわ！そしてセシリアが目だけ笑ってない、こ、怖いぞおい。火花が散って見えるのはきつと俺が疲れているからだと思いたい。

「更識楯無、音羽の中学時代の同居人よ」

「ええっ！？音羽、あなた・・・」

「こいつとギブ&テイクだったただけだ、それに一年ちょっとだけだし」

「そういうことですか、まあいいです。食事と行きましょう？」

「ああ、楯無。ちよつと降りろ、動けん」

仕方ないわねえ、と言いながらセシリアとは反対側に腕を絡ませる美月。あ。

『歩きにくい』

「って言いませんわよね？」

「言わないよね？ね？」

「・・・はい」

二人に挟まれて食堂へと歩く、腕にあれがあたって落ち着かない。というか、なぜ周りの皆さんは羨ましそうな目で見てくるんでしょうか。セシリアはもちろん昔も同じようにやってたけど、美月はなんか同居始まってからやり始めたし。ひとまず精神的にきつい、色々削られるぞこれ。しかも二人とも大きいから余計に・・・..
h e i p m e ! いかん、おかしくなつて英語出た。

「あ、一夏君久しぶり〜！」

「楯無さん、お久しぶりです」

「お、簪もいつしょか」

「一夏がいたから・・・」

一夏はカツカレー、簪はかき揚げうどん、箒は焼き魚定食（鮭）。どれも美味しそうだな、ひとまず箒と簪の間で火花が散っていらっしやる。これに弾とあいつが入れば中学メンバーなんだよな、生憎あとの二人がいないけども。どうやら一夏と簪が楽しそうに話してるのを見ると、一年くらいの時間の壁は薄かったみたいだな。箒が空気になってるけども。『誰が空気だと？』ごめんなさい。

「うーん、お」

「あら、やはりここにもありましたのね」

「どうしようかな」

セシリアは迷い無く煮魚定食（味噌汁大）を、俺はカツ丼、美月は味噌ラーメン。他にもウエルシュ・レアビットやナンなど世界中の料理がメニューにある。生徒が世界中から来ているつてのがあるからかな。これなら毎日飽きないな、全制覇も良いかもしれない。

「さてと、いただきます！」

「いただきます」

「いただきます、うーん美味しそうね」

「はあ、結局シャワーかよ」

どうせなら小型の浴槽も持つてくるんだった……入りきらないから無理か。まあいいや、さっさとシャワー浴びて寝よう。今日は疲れたよ、主に精神的に。

「はいはい、私が髪を洗ってあげましょー！」
「……頼む」

いつもなら自分でやるんだが、もう結構瞼が重い。自分でやる元氣も無い、なんか背中にも心地良い感触があるがそれに突っ込む氣力も無い……眠い。

「ほら、起きなさいって。ここで寝たらダメよ」

「う、うん」

「まったくもう」

あゝ、気持ちいい。人に髪洗ってもらうのって気持ちいいよね、ふわ。

「ほら、終わったから寝ましょー」

「ああ、助かった。おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

なんか額に触れた感じがしたが……zzzz

36・疲れは溜めないようにしよう（後書き）

どうでも良い作品情報

擬似四次元ポケットはスペアが3個、日用品・銃器・小型ジェット
バック

37・災難・・・壽だ（前書き）

どうか彼に労わりを

37・災難・・・鬱だ

日差しがカーテンの隙間から部屋の中に入り込む、ついでに美月も俺のベッドに入り込んでいる。小鳥のさえずりが聞こえる、俺は鴉のほうが好きだがな。そして焼き鳥は皮が好きだ、さえずりが無くなったが気にしたら負けだと思う。ちよつと待て。

「うにゅ、すう・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気持ちよさそうに寝ているから起こすにも起こせない、俺が逆の立場だったら起こされたくないしな。いや、寝ていることに關してだぞ。俺は誰かに抱きつくなんてしないからな、多分。うあゝ、朝から理性がガリガリ音を立てて削られる。まさかこれが毎日続くとか無いよね？ねえ？

「ああ、いいや。もう一回寝よう」

「ふひゅ・・・・・・・・」

その後、1年1組の教室で出席簿が振り下ろされる音が響き渡ったのは言うまでもない。

「なぜ弱くなっている!」

「受験勉強してたから・・・かな？」

IS学園部活棟C、剣道場。目の前には床に倒れこんで竹刀を眼前に向けられている一夏と、それを見下ろす侍ガール箒がいた。俺は

これから射撃練習しにアリーナに行こうとしていたのだが気になったので観戦していたところだ。一夏って剣道やってたのか知らなかったな、道理で筋肉のつきが普通と違うわけだ。と言っても練習してるとこんなて見たことないけどな、千冬さんも忙しいから家事で一夏はそういう暇も無かったし。仕方ないって言ったら仕方ないか。

「なおす」

「え？」

「鍛えなおす、IS以前の問題だ！」

まあ、なんということでしょう。一夏の表情が呆けていた状態から一瞬でわけが分らないという表情に……。なんか面白いことになりそうだし。さあて、俺は俺で始めるかなあ。恋する乙女を邪魔するのも無粋だからな。

「つく、オート制御だと照準ブレるなあ」

IS学園第三アリーナ、ISでの模擬戦・実習・装備試験などが行われるだけあって半端なく大きい。反対側の観客席が豆粒に見える。しかもこの大きさのアリーナがあと4つ、高機動実習で使われる第六アリーナはもっと広い。まだ行ったこと無いけども。

それより、オート制御だから生身で使うときよりやりにくい。ああもう、面倒なもんだなこれ。

「っだあああああー！」

「ああ、痛い」

アリーナで2時間ほど動かしたは良いが打鉄がなかなか上手く動かずイライラ、別の練習しようとして飛ばうとしたら姿勢崩して頭から転倒。保持していた近接ブレードが手から離れて立ち上がった瞬間に後頭部に直撃、自分の武器に切られるというギャグマンガみたいな事故発生。悶絶しているところを見られて同じアリーナでISを動かしていた女子にクスクスと笑われ、なにくそと起き上がったらPICが誤作動起こして今度は後方5連続回転をして地面へと叩きつけられる。諦めずに起き上がったら、流れ弾のグレネードが目の前に転がってきて爆発。体勢が整っていないために後ろに転び、アンロックユニット非固定部位が地面に突き刺さって立ち往生。どうにか力づくで引き抜き素振りを始めたら刀身だけが抜けてアリーナの壁と防護バリアーにぶつかる、ドリフのあれみたいにあちらこちらで跳ね返りながらなぜか最終的に俺の股間に直撃。女子には永遠に理解できない痛みに苦しみながら仕方なくアサルトライフル「ヴェント」を展開して撃とうと引き金を引くとジャムリ、取り出そうとレバーを引くと暴発。怪我は無かったものの顔が煤で汚れる。タオルでふき取り、仕切りなおそうとピットから再度飛行。カタパルトが急停止し、ロツクは普通に外れるものだからピットから墜落。終わろうと装着解除したらステータス画面に「整備中」の文字。そのままため息をつきながら崩れ落ちた。

「俺って誰かに恨まれてんだろうか」

「あ、あら。まあ、無理はしないでくださいね」

セシリアの心遣いが嬉しい、ああ、そういや。

「セシリアって可愛いなあ」

「な、なななあ！？いきなり何をノノ」

「いやあ、昔もそうだったが可愛くなったなあと思って」

「なぜ平気でそういう言葉が言えるのか、不思議でなりませんわ。嬉しいですけども」

なんか今のが声小さくて聞こえなかったな、なんて言ったんだろ？ちなみに美月は生徒会の仕事でいない、虚に注意されて無理やりやらされてるらしい。生徒会長が仕事サボってどうするんだ。俺だつてしっかりやってたんだから美月なら簡単だろう、やる気だせば。

「あれ、音兄はセシリアといっしょなのか。楯無さんは？」

「虚に注意されて仕事中、ってボロボロだな一夏」

「あはは、箒に散々倒されてさ。明日もだよ」

「一夏さん、剣道やってらしたのですか？」

「ああ、小学生のころに道場に通っててさ。その時からの友達なんだ箒は」

『（箒（さん）頑張って』

こう思ったのは俺だけでは無いはず、というか俺とセシリアが向かい合って頷く。幸い一夏はなにか理解していないようだったが。この鈍感m爪先に針で傷口を刺すような痛みがあああああ！！俺が何をしたんだセシリア、俺は悪いことした覚えは無いぞ！一夏は哀

れんだような目で見るなよ、なにその残念な物を見る感じ。そりゃあ、鼻に絆創膏だけどさ。

「そういえば音兄はなんでボロボロなんだ？」

「ああ、いやな

長い の で 上 参 称

「なんという……」

「まあ、これくらいでめげないけどな。負けないぞ俺は」

「ふふっ、それでこそ音羽ですわ」

「そうだな、それでこそ音兄だ」

そのころ

「うえー、まだあるのこれ？」

「サボった分は取り返してもらいますよ、ただでさえ溜まっているんですから」

「うう……音羽あ、助けてえ……ん、メールだ」

『断固断る自業自得だ。おにぎり三個と味噌汁あるから食べておけ

よ？俺は先に寝る b y音羽』

「うふふ、優しいなあ音羽は」

「にやけるのは良いから早く終わらせてください」

「ぶうゝ、けちんぼ」

「……音羽に愛想つかされても良いのならどうぞ」

その後、文句を言いながら書類にサインを書き続ける楯無が目撃されたそう。

クラス代表決定戦まで、あと5日。

37・災難・・・・壽だ（後書き）

どうでも良い作品情報

原作と違い、更識姉妹は仲良し。簪はサード幼馴染、空気さんマジ
篤

38・試合前（前書き）

良い切りどころだったので、短いとする

38・試合前

男の特訓風景なてん誰得だよ

IS学園、第三アリーナ。東ピット二番格納庫前、俺は缶コーヒ―片手に壁に寄りかかっていた。流れるようなサイドテールはところどころザラザラ、一部は焼け焦げたような痕……。せつかく苦労して手入れしてたのにIS訓練で台無しに……。ちくしょう。なんとかまともに動けるようにはなつたがいまだに何か起こりそうで怖い、またPIC誤作動起こさないよなあ？……。ちなみにセシリアが候補生ということで俺ら二人と試合、その後俺と一夏という組み合わせ。

「それなのにお前の専用機は来てないのか」
「うん」

そこなんだよな、早めに来る予定だった一夏の専用機が当日になってもまだ来ていない。あと5分で試合始まるぞ？もし過ぎたら俺が先になるってことですよええ、技量はともかく訓練機で勝てるだろうか。性能差は埋められないしなあ、一応速度特化にチューンしてもらったけども。つてもうあと2分だぞ、間に合わないんじゃないかこれ。あ、山田先生が走ってきた。なんともよたよたして頼りない感じた、今にも転びそうとはこれのことを言うのかも知れないな。実際目の前で一回躓いたし、ある意味期待を裏切らない人だな。

「大丈夫ですか山田先生、慌てなくて良いですから落ち着いてください」

「は、はい。そ、それでですね来ましたよ織斑君の専用機！」

おお、やつとか。結構待ちくたびれた……あと30秒でおい。フォーマット フィッティング 初期化と最適化は間に合わないな。だからって時間は限られてるし、もしかして試合中に済ませるのか？聞いたことないぞ、戦闘中にだなんて。いくら自動でやってくれるとはいえんな無茶な、それをやらせるのが千冬さんですけども。

「流石にきつくはないですか？」

「ふん、できなければ負けるだけだ」

そう言った千冬さんの視線の先にあった格納庫のエアロックが音を立ててスライドする、暗がりの中から一機のISがせり出して来る。工業的なデザインではあるがどこか力強さを感じさせる。

「白」がそこに居た

この瞬間を待ち続けたように、今、この時のためのようにそれは鎮

座していた。主を待ち続け、迎えるためにそのコックピットを開け放っている。正直に言おう、カッコいいと。

「織斑、早く乗れ。そうだ、座するような感じで良い。あとは自動で最適化する」

「一夏、正々堂々やってこい」

「ああ、分かっている……なんか気持ち悪いな、前見てるのに全方位見えるなんて」

あゝ、ハイパーセンサーか。前方を見ているのだけでもそれによって360度全方位を視ることができ、そのために死角からの攻撃を感知できるって奴だ。本来は航行中に飛来する隕石を避けるためなんけども、他には望遠機能とかな。早く宇宙に行けないものか、某おにぎりに見えるライダーさんは単独で毎週行ってるのに……。なぜ兵器でしか使わないんだ。今はスポーツだけでもさ。ちなみにこのISの名前は『白式』だってさ、読みが某宇宙世紀の金色のあれじゃねえかってツツコミはしてはいけない。

「じゃあ、行ってくるよ」

「ああ、勝って来い一夏」

第が応援したところで、カタパルトに乗って一夏が発進していく。反対側にはセシリアが居ることだろう、どうなるこの試合、結果が楽しみだ。

38・試合前（後書き）

どうしても良い作品情報

戦闘描写は苦手ということに今更気づく

39・蒼の雫・白の翼（前書き）

ー夏VSセシリア

39・蒼の雫・白の翼

「うおつとと、こりゃ特訓しなきゃな」

発進した反動で前に仰け反りそうになった一夏が、セシリアに向かい立った。相対するセシリアはイギリスの第三世代IS「ブルー・ティアーズ」を起動している。腰部には4枚のフィンアーマー、右手には六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握られていた。その出で立ちはまるで中世の騎士のようであった。

「ふふふ、これからが楽しみですわね」

「そりやどうも、つとそろそろだな」

広大なアリーナに試合開始のアラームが鳴り響いた。

「手加減しませんわよ!」

「真剣勝負、当たり前だ!」

スターライトmk?の青いレーザーが銃口から迸り、回避行動に移っていた白式の非固定

アンロックユニット

部位の左側の一部を吹き飛ばす。着弾の影響で加速していた白式ごと一夏が後方に押し出された。

「うおつ!?!」

絶対防御は適用されなかったが代わりに左のウィングスラスターが一部破損した、シールドエネルギーが0にならない限り負けでは無

いが機体の破損は後の戦闘行動に障害をもたらす。最悪飛行できなければ中距離射撃型のブルー・ティアーズには勝てない。

流石、代表候補生。俺が移動した先を狙ってライフルを上手く撃ってくる、武器は無いのか？えっと一覧……一覧……一覧！？一個しかないのに一覧とはこれいかに。仕方ない、何も無いよりマシだ。

「ええい、ままよ！」

「……一夏さん、本気ですの？」

「というか、これしかなかった」

「そ、そうでしたか……」

セシリアがなんとも驚いた表情でこちらを見ているのがわかる、俺だつて驚いたさ。なにせ『近接ブレード』一本しか無かつたんだから、「普通は剣と銃くらいは入ってるんだぜ」とは音兄の言葉だ。まさか剣しか無いとは、そりゃ俺には銃なんか使えないけどさ。経験的な意味で、だからって射撃メインにこれで戦えつてのはなあ。文句言つても現実是不変ならないけどもさあ。

「では、ここからが本番ですわ！」

瞬間、4機のフィンアーマーが独立してそれぞれがまるで生きているかのように襲い掛かってくる。細い先端が青い光を称え独特の音を放ちながら青いレーザーを撃つ。四方八方から三次元で攻められるためにガリガリとシールドエネルギーが減っていく。どうにか一つを避けても残りが当たるといふ状況、どう考えてもこのままじゃシリ貧だ。

「右足、頂きましたわ！」

「やらせるかよ、でやあ！！」

一瞬動きが止まった後方のブルーティーズ・・・機体名と同じとは紛らわしい、試験一号機だからそうなってるらしいけども。面倒なので以下ビットを一機蹴り飛ばし、セシリアへと肉薄する。金属が捻じ曲がるような感触を右足に感じながら、自身に向けられていたライフルを近づいた瞬間に左手で殴り銃口を逸らす。

「なあっ！？やりますわね！」

「俺にも譲れないものがあるからな！」

すぐに上下からのビットによる牽制で引き離されるが、一撃入れられた。素人同然の俺が、候補生に一矢報いたのだ。嬉しくならないわけがない。

「あの、馬鹿。一撃くらいで調子乗ってやがる」

「まったくだ、変わらん」

「え、どういことですか？」

まあ、なあ？

「あいつは調子に乗ると左手を閉じたり開いたりする、大抵その時は単純なミスをする」

「今までそれで失敗したの何回だったかなあ・・・」

正直数え切れんな、その度に俺が出向いてたし。一夏は気づいてな

いけどさ、後始末は大変だったよ？そんなんだから「最強の生徒会長」って影で言われてたんだから。そうこう言っているうちに、一夏がビットを近接ブレードで叩き落しての暴行を加えて使用不能に陥らせている。対するセシリアは・・・無茶苦茶な一夏の動きに驚いていた。ビットが真ん中で捻じ曲がって可愛そうだ。

「おし、貰ったああー!!」

「生憎様、ブルー・ティアーズは六機あってよ!」

重い音を響かせてフィンアーマーの左右から突起が分裂、高速で俺に近づいてくる。回避は・・・間に合わない。さっきまでのレーザー射撃ではない「弾道型^{ミサイル}」だ。

赤を越えて、白い爆発に飲み込まれた。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「なんといいご都合主義・・・」

着弾の煙を見つめながら、俺と千冬さんの言葉が重なった瞬間。その中から、それは現れた。

フォーマット フィッティングプリント
《初期化・最適化完了・確認ボタンを押してください》

「な、さっきまで初期設定で戦っていましたの!？」

「ああ、やっとなの物になったみたいだ」

視界に映る確認ボタンを押すと、金属音を響かせて白式がその姿を変える。工業製品のような直線的な形から生物的な曲線を描き、角ばった非固定部位は受けた傷が無かったのように消えて一対の翼に。アンロックユニット
完全な『白』へと変化した。

《近接特化ブレード「雪片式型」》

先ほどまで握っていた無骨なデザインのブレードは、刀身が割れてそこから光の刃を放出。スライドした元刀身はそれを握る右手を守るハンドガードへと変形していた。見覚えがある、かつて姉を世界最強へと導いた刀に型名す刀。

ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

だからこそ、守られるだけの関係は終わらせよう。これからは、いや、今この瞬間から。

「俺も、俺の家族を守る」

「……覚悟、ですわね」

「ああ、まずは千冬姉の名前を守るさ!」

一気に上空へと加速、背部ウィングスラスタから尾を引きながら上昇する。その間もレーザーが幾筋も付近を貫いているが、さっき

とは格段に動きやすくなった白式が俺の思い通りに動く。そして、
全てが視える。

「うおりゃあ!!」

「鋭い一閃、見事ですわ!」

残っていた一機のビットを急加速しながらの一振りで切断、高硬度
金属を切断する衝撃が雪片を握る右手に伝わる。刹那、通り過ぎた
瞬間に後方で小爆発。砕け散ったビットの破片が慣性を残したまま
四散していく、気にも留めず最後に残ったスターライトmk?を構
えるセシリアに高速で接近する。

「わたくしにも、譲れないものがありましたよ!」

セシリアがスターライトmk?の後方レバーを引く、するとシヨル
ダーストックが上下にスライドし持ち手に変化した。銃口からは蒼
穹を映すかのような真っ青のレーザーの刃が伸びる、それを腰溜め
に構えなおしたその姿はかつてヨーロッパに名を馳せた名騎士のよ
うであった。

「はああああ!!」

「やああああ!!」

突き出される蒼の槍と白銀の剣がぶつかり合う、加速を啜えた一撃
だったからか雪片の輝きがレーザーの刃を切り裂く。上段に振りか
ぶった一閃が真っ直ぐにセシリアへと振り下ろされる。

『試合終了 勝者 セシリア・オルコット』

「え？」

「はい？」

向き合いながら同じように訳が分からないような顔をしている俺とセシリア、いつのまにか雪片の光刃は消えていた。……

・何が起こったんだ？

「良くもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこのざまか大馬鹿者」

ランクを下げないで上げるのが千冬さんらしい、大馬鹿者だつてさ。おめでとう一夏。一応スポーツドリンクを時速60kmで投げあげ、優しいだろ俺。

「ほぶわあ！」

どうにかキャッチして転んだ一夏^{馬鹿}が居るけども、ちょっとばかり気になることが……。あるんだよねえ。どうみてもあれは一夏の勝ちだったはずなんだがいきなりシールドエネルギーが0になって一夏の負け。まあ、初心者が候補生にあそこまで迫れたのはすごいけどもな。

「雪片の特殊能力だ、『バリア無効化攻撃』という（ry」

早い話、自分のシールドエネルギーを使って相手のシールドエネルギーを切り裂いて攻撃。その際に絶対防御の発動によって相手のシールドエネルギーを喰らい尽くす。それをするまでのダメージと残

り少ないシールドエネルギーでの使用だったためにいきなり0になった。つまりは

「武装の特性を理解してない一夏の自業自得だと」

「その通りだ、さて如月。お前は30分後だ、準備しろ」

「サー、イエッサー！」

「ふざけているのか？」

「サー、イエツス ああ!？」

突然俺の眉間を狙って音速で振り下ろされる出席簿、どうにか紙一重で回避する。あ、髪が少し切れた・・・直撃してたらどうなるんだよこれ。一夏はまだ普通に見てるけども、隣で筭が色々困ってる。まあ、そうだろうよ。それよりも俺の出番だな。

「さてと、じゃあ俺のターンだな」

「訓練機で大丈夫なのか音兄」

「銃器くらいは良いが、またなんかありそうで怖い」

股間にブレードぶつかるとか、股間にry・・・とにかく怖い。何の心配を俺がしているのかわからんがな、さてと誰もいないはずのピットで学園最強さんが見てるし。良いとこ見せようか、一夏もやってたからなあ。

「それで織斑先生、ラファールは？」

「全機整備中だ、打鉄で我慢してくれ」

「・・・・・・（orz）」

39・蒼の雫・白の翼（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズ色々変更

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（前書き）

セシリアVS音羽！

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のパトラー

「あゝ、心配だ。これ整備完全ですよねぇ？」

「当たり前だ、F装備で良かったな？」

「はい」

あれから30分後、俺は打鉄（速度重視のF装備）を装着していた。さきほど一夏が山田先生から「IS起動のルールブック」を受け取ってげんなりしていた。なんせ厚さは某電話帳、一ページはペラ紙・・・一週間でそれを完全制覇。ざまあww

「はあ、なんでここにいらっしゃるうなあ俺」

「それを今更言ってもどうしようもないって音兄」

『はあ』

気分がああああ・・・・・・あ、しまった、この勝負負けられない！いくら解雇されたとはいえ、元執事。主より弱い執事がこの世に居てたまるか、何があっても主人を守りきる、それが執事。^{パトラー}それは生身だろぅが戦闘機だろぅが、ISだろぅが関係無い。というか、ミリアさんが出てくる！負けようものなら絶対亡霊になっても出てきて地獄の30日間を味合わせられる、あわわわわ。

「負けられない戦いが、ここにある」

「な、なんか音兄が達観してる!？」

「何かに怯えているように見えるが・・・む？」

ピットの影に音羽をじっと見つめる金髪の女性が見えたとは後の筈の話である、その目は「負けたら、わかってるわよね」と語っているようだったそうだ。

「（ビクッ！！）……………!?」

いかん、なんかミリアさんに見られてるような感じがした。絶対、近くに居るってこれ。……………どうやら緊張で頭がおかしいようだ。落ち着け俺、きつとミリアさんが幽霊になって見てるだけだ。十分怖いぞそれ、ちなみに俺は幽霊とかの怪談話は嫌いだお化け屋敷も。まあ、それは誰にも知られていないけどな！

「さて、時間か。お嬢様の成長した姿でも見に行きますかね」

バトライ
マスタイ
「執事と主人か、面白い」

カタパルトに打鉄の脚を固定する、後方に反射板がせり上がり脚部ごと後ろに下げられる。蒸気カタパルト特有の発射準備だ、今だに現役なのは優秀だからに違いない。F-35（確かC）に乗ったときも世話になったからなあ。なんで乗ったかって？コネですよチミイ。

「じゃあ、行きますか！」

「音兄ガンバ！」

一気に前方に押し出される、対G制御は効いているが。この感覚は、良い！

「うつつしゃああああああああ……………」

音兄が、急停止したカタパルトから落つこちていった。真つ逆さまに、それも頭から……………結局なのか。どれだけ運が無いんだ音

兄、向こうのピットに居るセシリアの顔が引きつっているのがわかる。山田先生は状況が掴めていないのか口をポカーンと開けている。千冬姉は傍目からは分からないかもしれないが軽く苦笑していた。箒は心配なのかピットから下を見ている、あ、起き上がった。

「痛ててて、ちくしょう。なんでこういう時に限って締まらないかなあ・・・」

「大丈夫ですよ？」

「ひとまず、な」

同じ高度に上昇し、向き合う。元・執事バトラーと主人マスターの戦いが、始まった。

「うおっと、のわあ！」

「隙ありですわよ！」

し、四方八方からピットによる牽制射撃。さつきから回避しても着弾ばかりで埒が開かない、そして避けきったと思えば静止した途端にスターライトmk？による的確な狙撃。やはり、見た目は簡単だが実際は・・・というやつだ。しかし、三次元機動つてのはなんと慣れないな。ジェットパックと違って急旋回できるし、PICでホバリングできるし。世界最強の兵器つてのは納得だなホント。

「せええつだあああん！！！」

アンロックユニット
非固定部位の物理シールド裏に搭載されたスラスタを噴かして、勢いに任せてビットを一機両断。今度は刀身抜けなかった俺に勝てないものなどいない、多分！F型の最大の特徴、物理シールド裏に搭載された大出力ブースターのおかげで速度だけならば第三世代にも追いついていける・・・はずのスペックを持つ。しかも傍目には通常型と見分けが付かないという鬼畜仕様。
サブマシンガン「ネフェルテム」を二挺展開して、高速で接近する。

「す、すげえ音兄・・・」
「格段に動きが良くなりましたね、音羽君すごいです！」

管制室の空中ディスプレイにはセシリアに追いつがる音羽の姿が映し出されていた、現在は互いに円軌道を描きながらライフルによる攻勢。一歩も譲らずただひたすらに距離を保ちながら相手を牽制している。

「確か、F型^{タイプ}って速度特化の失敗作ですよ？ほとんど静止ができないために使い手は今ほとんど居ないって言われている・・・教師の中でも使いこなせる人はいませんよ？」

「まあ、そこをどうにかしてしまうのがあいつだ。中学時代に街中上空を飛んでいたからな、それも関係しているんだろう」

「ああ、あれかあ」
「え」

そこには姉弟揃って思い出したように語る二人とそれについていけない一教師と生徒がいた。

「やっとわかったぞ、ブルー・ティアーズの弱点が！こいつを動かすときにお前は他の動作ができない、そうだろうセシリア！」

歯噛みしたセシリアがお返しとばかりに青いレーザーの雨を降らせ、フルオートって・・・銃身焼けるぞ。対策してなければ、熱で溶け落ちるがな。ちなみに俺はエネルギーの効率や使用経験から実弾のほうが使用率が多い。というか、今装着してるF型はエネルギー兵装を載せるほどエネルギーに余裕が無い。それほど速度重視らしい、エネルギーパック式にすれば可能だけでも面倒だ。

「そおい！！」

加速したまま、身体にかかるGを無視してビットをスナイパーライフルで順に撃ちぬく。クロスクリットターン三次元躍動旋回での高速機動は照準に入らせないばかりか、反撃も織り交ぜて来ているために少しずつセシリアが押される。なにせ相手は、日常的に時速400kmで飛行をしていた人間なのだから。

「なっ、身体が持ちませんわよ！？」

「譲れない戦いがあるんだああああ！！（ミリアさんの意味で）」

至近距離まで肉薄し、高加速ブースターを解除。バージ近接ブレードを振り抜き、スターライトmk？を破壊する。ランスへの変形が間に合わなかったために容易く銃身が切断されて使用不能になる、収束部が壊れても射撃は可能だが収束して威力を上げているために威力はほぼ無いに等しくなってしまう。爆発する直前にセシリアが投げってくる蹴り上げて懐に入り込む。ここからは、俺の領域だ。

「失敗作と名高いF型の真髄^{タイプ}、見せてやる！」

一番の特徴は、その軽さ。そして、ほぼ専用と言われている悪趣味な近接装備。誰が考えたのか今では分らないが威力だけは半端無いというブースター^{バイナリー}が刀身とは逆位置に並列に取り付けられた物理刀、その名も鋼の心^{スチール・ハーツ}。持ち手部分にはリボルバー式の薬室があり、そこに装填された二種混合式の気化燃料を爆発させ刀身を加速。目標を一太刀のもとに切り伏せるというものだ。その威力は第二世代機の武装の中でも三本の指に入る。しかも機体自体の驚異的速度も加算される。

持ち手の引き金^{トリガー}が押し込まれ、鋼の心臓^{ブースター}に燃料^血が送り込まれてブースターが火を噴出して加速する。瞬間、爆発的な速度で振るわれた横一閃は蒼穹の機体のシールドエネルギーを削り取った。

『勝者 如月音羽』

「な、なんとか勝つてぶへはあ！」

蹴り上げたスターライトmk?だったものが俺の頭部に不時着、そのせいで一桁だったシールドエネルギーが0になる。あ、危ないな、今度から蹴り落とそう……。などと考えていると目の前に人の手が？

「流石ですわ、音羽」

「ギリギリだったがな、まあ、こつじやなきや元執事って言えないからなあ」

そのまま空中で握手する、全力で戦った二人を歓声が包み込んだ。

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（後書き）

どうでも良い作品情報

出てきたオリジナル武器は・・・お察しください

10/4 戦闘機の機体名、修正しました。

カタパルトは作者の趣味で蒸気で行きます、好きなんですから

41・結果がこれだよ(前書き)

短いです

41・結果がこれだよ

あゝ、うん。画面の向こうの皆、おはよう・・・時間がわからん。おはこんばんちわ・・・どこか遠くの世界で誰かが言ってる気がする。まあ、いいや。電波なんて受信しても気味が悪いだけだ。ちなみに俺VS一夏は俺が勝った、5分間ストーカーも真っ青になるくらい追いかけながらスティール・ハーツの連撃を食らわせた。バリア無効化攻撃なんぞ、当たらなければどうってことは無い、スポーツの剣技と実戦の剣技はレベルが違うってことだ。けして、「三日連続戦闘なんてめんどい」と言う馬鹿^{作者}の陰謀ではない。

翌日、火曜日。朝のSHR・・・でそれは起きた。

「では、一組クラス代表は織斑君に決定です。一つながりで良いです
ね」

『ね』

クラス全員（一夏を除く生徒）が声を揃えて顔をそれぞれ見合わせる、教室の前で一夏が散々なくらいに慌てていた。暗い顔をしているのは一夏のみ、ふうははは！・・・・・・はあ。

「先生、質問です」

「はい、織斑君！」

質問は手を上げて元気にしよう・・・基本だな、何を聞くかは無論わかりきっているけども。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってる

んでしょうか？」

「それはですね」

ガタツと立ち上がる、勿論セシリアも同時だ。腰に手を当てて指を指す、標的は一夏に決まってる。

『俺（私）が辞退したからだ（ですわ）！』

どや顔で一夏を見据える俺達、なんでどや顔って質問はしてはいけない。一夏が心底嫌そうな顔で見ているが無視、細かいことは気にしてたらいけない。「細かいことじゃねえよ！」知るか、俺にとつては細かいことだ。

「ええ、一夏さんが負けてしまったのは当たり前ですし」

「だが、伸びしろがあるってことで経験積ませるためにだ。お前言つてたろ？」

「まあ、そうだけでも」

「なら、頑張れ一夏」

「ああ、俺がやってやる！……で、本音は？」

「めんどいので馬鹿な一夏君に押し付けて^{任せ}楽をしよう^{頑張ってもらおう}と」

「本音と建前が逆だ！？」

まあ、千冬さんに説明したし。実際一夏には頑張ってほしい、覚悟があるならそれ相応に力も付けて欲しい。めんどいものも45%くらい入っているがな、ここが藍越だったらやってるが生徒会長がいつって時点で却下だ。うん。わざわざ面倒ごとに首は突っ込みたくないからな！

「それでは、織斑君がクラス代表で決定です。良いですね？」

『はーい!』

IS学園一年一組、今日も今日とて平和である。ついでに俺は副代表……解せぬ。

41・結果がこれだよ（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんマジ活躍（予定）

42・はじめての実習

「おくれる〜〜〜!!」

「なあっ!? 音兄、俺も乗せてくれ」

「残念ながら一人用だから、ごめ〜ん」

男子に宛がわれた更衣室から実習が行われるグラウンドまでは結構な距離がある、なにせ軽いマラソンくらいには・・・遅刻した場合は織斑先生からのありがたいお仕置きがある。・・・ので着替えが終わった俺は開け放たれた窓からダイブ、小型ジェットパックを召還して時速200kmでまだ着替え終わっていない一夏を尻目に高速移動中。無断のIS展開は許されていないがこれの許可は取っているため咎められない、まあ、委託企業の資金提供がされてるからそのツテで言うのが正直なところ。ちなみにこれの操縦はライセンスが必要、本当は緊急時のために取得したものなんだがな。どんなのかわからない? JET MAN ってググレ、画像検索で。それに普通のゴーグルとISスーツ着た状態だ、色はブルーな。ついでに言えば俺のISスーツは半袖ハーフパンツの密着型だ、汗でべたつかないって良いよね!

「とおおおおちゃあああく!! つせい!」

一端着地してから、軽くジャンプしてジェットパックを格納。ベルトにはできないので腕輪にして完了と同時に再び着地して列に並ぶ。クラスからはおお〜という声が上がったが・・・なぜかセシリアだけじと〜と睨んできていた。だから俺が何したよ、前に聞いたら俺が悪いらしい・・・理由は教えてくれなかったがな。それだと直しようがないと思うんだがなあ・・・あ、一夏がやつと来た。

「遅いぞ織斑」

「すいません・・・（音兄エ・・・）」

四月下旬、そろそろ遅く咲いた桜も散って緑が増え始める・・・やべ、桜餅食い損ねた。頃・・・少し授業にはとうてい関係ないことを考えながら今日も今日とて鬼教官と言う名の織斑先生のありがたいお言葉を聞いていた。ハイパーセンサーのおかげで良く聞こえる。

「早くしろ、熟練した操縦者ならば展開まで一秒とかからないぞ」

ISは一度、最適化フィッティングをしたらずっと装儒者の体にアクセサリーの形状で待機している。俺の場合は貸し出しのために仮最適化だがな、セシリアは左耳のイヤークラス。俺は眼鏡・・・一夏はガントレットだ、どこがアクセサリーだよ一夏の場合防具じゃないか。

「集中しろ」

次は出席簿で叩かれるな、あのブラコン教師ちふゆのことだから。流石ブラコン、容赦無いぜ！え、なんで俺が叩かれないって？ポーカーフェイスだからに決まってるジャマイカ。それでも軽く睨まれてるがな！

「・・・・・・・・」

一夏が右腕を突き出して左手でガントレットを掴んでいた、あえて言おう、中二くさいと。いやまあ、それでゆっくり展開されていくから面白いんだけど。0.7秒の展開時間、その後には白式を纏った一夏がそこに立っていた。人のやり方には

「よし、飛べ」

言われてからのセシリアの行動は早かった、俺は一気にブースターを噴かして急速上昇。F型の速度はやはり良いなあ、一夏がのろのろと飛んでくる。スペックはブルー・ティアーズより上なのに勿体無い。それに出力全開だと追いつけるF型もどうかと思うけどな。

「打鉄がその速度と言うのも、面白いですね」

「まったくだ、というかこのままこいつが専用機でも良いんだがな」

それにしても俺に専用機ってどんなのが来るんだろうなあ、クライング・ウルフみたいな四脚でも良いぞ。……って一夏、遅い！ 見てることちが心配なくらいにぐらぐら揺れながらやつと並んだ。別に前方に角錐があるイメージなんてものは正解じゃないし。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するのが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。なんで浮いてるんだこれ？」

「どこその毎回マミるあんど違って機械なんだから「そういうふうにできてる」で良いんじゃないか？」

どうせ流動波干渉だ反重力制御だ説明したって理解できないだろうし、あれ、ISの技術流用すればBB部隊の装備再現できそうじゃね？ それよりもREX乗ってみたいけども。まあ、今は関係ないか。

「織斑、オルコット、如月。急降下と完全停止をやって見せる、目標は地表から10センチだ」

おゝ、地上で話している千冬さんの顔のしわまで良く見える。まあ、機能制限外せば何万キロ離れた場所も見れるんだけどな、流石宇宙開発用マルチフォームスーツ！一度開発者と話をしてみたいものだ。でも、なんか人格破綻者という噂も。興味無い人間にはとことん冷たいらしいよ、どうやって生活してんだろうか。

「では、お先に！」

おゝ、流石候補生。見事にやってのけた……。うん。さて、次は俺か……。せめてここくらいは良いとこ見せられなければいけない。代表決定戦で年上の威厳を簡単に失ったために俺は負けてられないんだよね、まあ、無理はできないけどもさ。

「っせい!!」

地面へと姿勢変換、そのまま二枚の物理シールド裏の高出力ブースターによる爆発的な加速で移動。地表近くでPIC全開と逆噴射で急停止。っふうっ、スリル有るなあ。まあ、こうできるのも毎日セシリアが練習に付き合ってくれてるからだな、感謝しなければなあ。

「ふむ、9センチか。なかなかだn……。なんだ？」

後方で一夏がクレーターを作って犬神家をやっていた……。なんだこれ、強制解除してるしある意味すごいわこれ。一夏にはギャグのセンス……。無いな、日常的にそう面白くないの考えてどや顔してるだけだし。それを考えたら今回は面白いほうか、ついにリアクション芸人目指すのか？違っただろうけど。

「好きでやったんじゃないやねえええ!!」

無理やり頭を地面から引っこ抜いて一夏が立ち上がった、一瞬、一角の白い何かが見えたような気がするが気のせいかな。そうか。ってセシリアは普通に心配してるのに、篝さんがIS付けてるから大丈夫発言・・・あなた一夏のこと好きなんですよね？ひとまずなんか言い合ってるのを横目に一夏回収、わっなんか火花が見えるよ。

「馬鹿者、誰がグラウンドに穴を開けると言った」
「・・・すみません」

一夏の醜態にクラスの女子がm9状態、ISはどうやら一夏のハートは守ってくれなかったようだ。

「情けないぞ、一夏」

篝が一夏を目尻上げて睨んでいるが、篝の教え方はスーパー擬音タムだった。理解できる人はおそらくこの世界に二人といたないだろう、某ドモンなら理解できそうだが。「くいつて感じ」とか「ズガンって感じ」とか・・・うん、わからん。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいはできるようになっているだろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ、馬鹿者」

「はい！」

「よし、では始めろ」

その途端、一夏が再び右腕を掴み瞼を閉じて集中を始めた。右手のなかで徐々に光の粒子が姿を結び始め、0.7秒。白式唯一にして最強の刀、雪片が現れる。頑張ったんだよな一夏も、こうなるまで1週間かかった。まあ、普段の生活で手元に刀が出てくるイメージ

なんてしないからなあ。

「遅い、0.5秒で出せるようになれ」

やっぱ厳しいなあ、少しくらい褒めてやっても良いのに。一夏も軽くうなだれてる、頑張れ一夏。って次は俺か？

「次、如月」

「サー、イエツsぬわあ！」

「返事は『はい』だ（ふざけるなよ？次ふざけたらry）」

「はい！（いかん、目が怖い。本気だ）」

出席簿の衝撃で痛む頭をさすりながら軽く右手を振り、加速する刃をイメージして刀を抜き放つ動作をしてステイル・ハーツを展開する。勿論、薬室にカートリッジを装填して安全装置を解除した状態で。青い空にはこれの青も合うなあ。ちなみにステイル・ハーツは？から現在も開発中らしい。噂では？まであるらしい・・・機体は失敗なのに。

「ふむ、次。オルコット」

「はい」

左手を肩の高さまで上げて、真横にズビシッ！と突き出す、見事なツッコミアクション・・・良いセンスだ。そしてそれが終わったころにはスターライトmk？が握られていた、視線を向けるだけですぐに発射態勢へ。流石代表候補生、セシリアサイコー！！（セシリア分が毎日補給できるため幾分かおかしくなっています）

「ただし、そのポーズは止める。横に銃身を向けて誰を撃つ気だ、正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは「直せ、いいな」……はい」

ああ、千冬さんの前では伝統の構えもダメなのか……。今度時間あるときに相手しよう。俺が銃の展開を迫られたら必ずこうするが、どうやらセシリアには抵抗はできなかったらしい。あの睨みはきついからなあ。

「まあ、気にするな。今度にも一緒にやろう、懐かしいし」

「はい、是非！」

「なにイチャイチャしている。オルコット、近接武装を展開しろ」

「は、はい！」

イチャイチャって……。俺がセシリアと？そんなことあるわけ……。ここに突き刺さるような視線が来てるからやめよう、精神的にきついわこれ。俺って何か悪いことしてるのかなあ……。謎だ。

「音兄……。セシリアが可愛そうだ」

「一夏、お前が言える立場か」

セシリアはスターライトmk？（正確にはランサーカスタムって言うらしいよ）で慣れているのか、すぐに手元に近接武装である「インターセプター」を展開した。どちらかと言うとコンバットナイフサイズ、近づかれた場合の緊急装備みたいだ、あまり丈夫そうでもない。まあ、中距離型だからなあ。

「ふむ、では時間だ。今日の授業はここまでだ、織斑、グラウンド

を片付けておけよ?」

さて、一夏は自業自得だし。ささつと着替えて昼食、助けを求める声には答えるが自業自得はお断りだからなあ。今日は何食べようかな、それとチーズケーキも忘れてはならん。あ、セシリアも誘うか。

「セシリア、昼一緒に食わないか?」

「はい、是非とも」

42・はじめての実習（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんスペック上方修正

43・祝賀会だって（前書き）

ちよい今回は出来が悪いです

43・祝賀会だつて

「ふうん、ここがそうなんだ」

日も沈み、夜。IS学園の正面ゲート前に小柄な体には不釣り合いなボストンバックを脇に抱えた少女がいた。

「つまみ食いすんなこの泥棒猫〜!!」

「少しじゃないのよ〜!」

その前を高速で水色の髪の少女と後ろをサイドテールのコック服を着た女子が走っていったが、声をかけようとしたところには既に遠くへと走り去っていた。通り過ぎた際に起きた風に特徴的なほど鮮やかなサイドアップテールがなびく、それを留める金の留め金が月光に反射して輝いていた。

「受付ってd……行っちゃったわね、どれだけ速いのよ」

仕方なく上着のポケットからくしゃくしゃになってしまった一切れの紙を取り出す、その扱い方から少女の性格が窺える。大雑把・活発・ツンデレである、最近の悩みは体のある部分のことであったりする。

「……まったく、本校舎一階総合事務受付ってどこよ」

文句を言っても返事をするわけがない、多少イライラしながら紙を上着のポケットに仕舞う。また中でぐしゃりと聞こえるが気にも留めない、遠くから「邪魔すんなコラ!」とか「いや〜!」とか聞こえるが気にしない。今は目的の場所へと移動するのが先決なの

だから。ちなみに思考より行動なやり方である、悪く言えば「良く考えない」である。

「だから・・・つまり・・・という感じでだな」
「いや、それ分らないって」

聞き覚えのある懐かしい声、歩きながらふと聞こえたそれに少女の胸は高鳴る。予期しなかった再開に思わずガッツポーズをとってしまふ、しかし聞こえたのは意中の相手だけでは無かった。

「くいつて感じってなんだよ」

「・・・くいつて感じた、理解しろ一夏」

「あのなあ・・・」

影から覗いて見えたのは見覚えのある男子と今まさにすたすたと立ち去る少女の姿だった、知らない女子と親しそうに話している・・・さきほどまでの高揚は嘘だったかのように消え、ひどく冷たい感情が胸の中を埋め尽くす。苛立ちが沸き起こるがどうにか押さえつけて歩く。

「時間に間に合わないって言ってるだろうが!!」

「とおっ!」

「あ、また逃げやがった・・・ったく」

総合事務受付の看板が見えたところに丁度、先ほどのコック服を着た人物が一人の女子を逃がしたため息をついていた。黒の左サイドテール、特徴的な優しげのある声に高めの身長。頼りがいのあるその背中、かつて実家の常連であり世話になった人物。

「まだ、30分はあるか・仕方ないメール送信つと」

「もしかして・・・音羽？」

「・・・・・・・・ん？」

なんか懐かしい声を聞いたような・・・どこからだ？見回してもどこにもいないな、俺も幻聴聞こえるようになったのかなあ・・・シヨックだ。さて、気を取り直して食堂行くか腕によりを振るつたら全員満足なはず。盛り付けがまだ終わってないんだよね、某美月さんのおかげで。

「ちょ、ちょっと。無視しないでよ！」

「また幻聴か、疲れてるのかなあ・・・・・・・・お？」

なんか下から聞こえたので視線を向けてみたら・・・・・・・・どこかで見たことあるようなツインテ少女がいた。あれ？

「もしかして鈴ちゃん？」

「そうよ！なんで気づかないのよ、嫌がらせなわけ！？」

「ああいや、悪い。もしかして転入か？おそろく一夏目当てか」

「まあね、本校舎一階総合事務受付つてあそこで良いのよね？」

「ああ、あそこだ。一夏は一組だから・・・つとやべ時間だ、じゃあな」

「うん！ありがと」

後ろで「クラス代表変わってもらおうと思って」とか聞こえたが、

俺には多分関係無いだろう。どうせクラス代表は一夏だし、っと就任祝いパーティーの準備しなければ！！腕時計を確認し、俺は全力で一学年食堂へと走って飛んだ。どうせなら祝い事は派手にやりたいたいじゃないか。

「というわけで、織斑君クラス代表。如月君副代表決定おめでとー
！！」

『おめでとー！！』

パン、パパンと景気良いクラツカーの音が鳴り響く。俺と一夏の頭の上に乱射されたクラツカーのテープが大量に着地して結構重い、ついでに火薬の匂いがすごい。まあ、祝ってもらうのは誰だって嬉しいよね一夏はいまだにどよんとしてるけど。ここは一学年食堂、時間は夕食後の自由時間を貸しきり。一組のメンバー勢ぞろいで飲み物片手に並べられた料理をつまんでいる。

「これ全部如月君が作ったの？」

「おう、特製ダレに付けて食べてな」

この、後ろの横断幕にも書いてあるが「織斑一夏・如月音羽就任パーティー」は一組女子と料理担当の俺で企画されてる。というか、小耳に挟んだから俺も協力することにした、こういう祝い事は楽しくて意味があるからな。って、一夏がまだ暗いなおい。

「これでクラス対抗戦も盛り上がるよね」

「ほんとにね」

「ラッキーだったよね、同じクラスで」

「ほんとほんと」

「俺も楽できるし、一夏は良い力試しになる。ホントに良かった」

今相槌打った娘って2組の人だったと思うんだが、いや、居ても良いんだけどね。てか、一組の人数余裕で超えてるなこの状況は、クラスの垣根越えても別に良いじゃないか。確実に40人越えてるよ
うな感じがするけども。

「人気者だな、一夏」

「・・・本当にそう思うか？」

「ふん」

「素直じゃないねえ、箒も」

「ええ、もう少し素直になれば良いですけど」

「まったくだ」

ちなみにセシリアが俺に腕を回して右側に座ってる、動きにくいんだが。当たって落ち着かないし、まあ、前にそれ言ったらなぜか怒られたからもう言わないけどもさ。あれだよあれ、傍目から見ると羨ましいけど実際は大変なんですよって状況。・・・そーいやセシリアも女の子から女になり始めてるんだよね、成長したのはちよつと嬉しいけど寂しくも感じる。これが親の気持ちなのかなあ・・・ハッ、不穏な気配！

「どうも」、新聞部です。今話題のお二人に取材を・・・あれ音

「つちどこ？」

オーと歓声が沸き起こる、俺はオーな気分じゃないんだが。音っち・
・音兄のことか？ホントだ、いない。

「まあいいや、新聞部副部長の黛薫子よ、よろしくね」
『イエーイ！！』

名紙を受け取る、書くとき大変そうだなあと思った。画数多すぎる
ってこれ・・あ、音兄が観葉植物の陰に隠れてる『教えるな！』
わざわざプライベートチャネルで話すなよな。そこまで嫌なのか、
というか音兄をそこまでさせるって何者さ。

「ではズバリ織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ！」
「え・・・えーと」

いきなりボイスレコーダーをずいっと出されても、言う事なんて決
まってるんだがなあ。うーん、どういえば良いんだ？期待のこも
った視線がたくさん突き刺さって大変なんだが、むーん。

「まあ、なんとか頑張ります」
「えー、もつと良いコメントちょうだいよ。『俺に触れるとやけ
どするぜ！』みたいにさ」

そんなこと言われてもなあ・・・あ。

「俺だって、やれる！」
「おおー、かつこいいじゃない。じゃあまあ、あとは良い感じに捏
造しておくね」

そんなので良いのか新聞部、ここに現代の報道の腐敗を見たような気がする。いや、大げさか・・・というかこういうことなのか隠れてる理由は。コクコク頷いてるし、いつもの頼りになるあの面影はどこへやら。セシリアはなんとも言えない顔でため息ついてるし。

「あ、音っちに言っておくけど。取材拒否したら”あの”写真ばら撒くから」

「させるかああ!!っていうか、脅すな薫子」

「あらら、まあいいや。はいはい、譲った理由は?」

突然飛び出てきた音兄、一体どんな写真なんだろうか・・・聞かないほうが良いだろうなああの慌てぶりからすると。なぜかセシリアが顔赤くしてるし、うん、俺は何も聞いてなかったことにしよう。それが一番だ。

「利害一致で押し付k・・・任せた」

「うんうん、よしオツケー。じゃあお礼にたっちゃんにあの写真見せておくね」

「大丈夫だって、一枚だけだから セシリアちゃんも良いよね?」

「はい」

「俺に味方はいないのかよ・・・」

orz状態になっている音兄、なぜ今日は貴重な姿ばかり見れるんだろう。明日は雨でも降るのか?

「じゃあ、ほら音つちも並んで。写真撮るから」

「わあつたよ、俺真ん中で良いのか？」

「（合法的にアピールですわ!）」

「専用機持ちだから良いの!」

「（肩組んでつていうのも久しぶりだな）」

カメラを向けられる、薰子つてのが心配だ。いつだかも転んでセシリアを押し倒しちゃったように見える写真を撮られたし、あれつてこれのことだよちくしょう。まあ、セシリアとの写真なら良いか。俺がいたころの写真は残ってないし。

「じゃあ撮るよ、 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「あ、2か？」

「ぶぶ、74・375でした！」

パシャッと音がしたところにはフレームにクラスの皆が入ってしましたとさ、なにいまのみんなの移動速度。人のレベルじゃなかったぞ・
・まあ、十代乙女には物理法則や常識は通用しないってことが。

「なんで入っていらつしやるのかしら？」

「まあまあ、大勢のほうが良いだろ。なあみんな」

「そうだよ」

「抜け駆けなんてさせないもんね」

そんな楽しい宴は11時ころまで続いたとき、俺はすぐに帰ったけどな。十代女子のスタミナ侮ってたよ。

43・祝賀会だって(後書き)

どうでも良い作品情報

音羽の総資産(作者のガチ計算結果)

薬品企業の年収からライセンス料3%×5年

約200億円なり

(本人と一部企業関係者しか知らない)

44・記憶の断片（前書き）

少し動くかな、短いです

44・記憶の断片

夢を見る

どこか暖かく

どこか寂しい

最初に目に入るのは透明なチューブのようなもの、液体が満たされた中に幼い男の子が見える。隣には同じようにチューブがありその中に同じ言ように女の子が入っていた。腕を動かしても温度を感じない液体しか触れない。外を見れば白衣を着た研究員らしき人ばかり。

「・・・・だ・・・・エク・・・・ド・・・・」

「・・・・マシン・・・・調整・・・・」

「・・・・・・DNA・・・・L3・・・・・・設定・・・・」

とぎれとぎれに言葉が聞こえる、どこかの研究室のようなのだが。それ以上はわからない。

『生体部品生成開始』

『D8筋繊維にエラー自動修正開始』

チューブに繋がれた機器を操作する白衣の男性、女性。若い者から、白髪の年寄りまで。ときどき、身体に痛みを感じる。中身から弄られているかのような不快感、でも嫌にならない。むしろ心地良い。それを感じているということはこの男の子の視点で夢を見ているのだろう。

場面は変わり、同じ場所。でも、研究員たちの顔には焦りが見え隠れしていた。

「強制．．．．．コア．．．．．埋め込み．．．」
「不可．．．．．耐久．．．．．エネルギー．．．」
「失敗作．．．．．100体．．．もう．．．．．」
「．．．．．IS．．．．．無理だ．．．．．」

血眼になって機器を操作する研究員。近くのモニターには数式や複雑な設計図のようなものが大量に羅列され、延々と流れていた。

再び場面は変わる．．．．．視界に映るのは、廃墟。輝が入ったチューブ、血が付いた右手、銃声。

「成功体．．．．．させるか．．．．．」
「撃ち殺せ．．．．．逃がすな．．．．．披検体．．．．．」

なぜか左手には赤い液体の付着したナイフ、右手にはハンドガン。

足元には息絶えた人間だったもの、床はそれから流れ出す液体に染められて小さな水溜りになっていた。後ろには女の子、怯えたような表情で蹲っていた。

「大丈夫、
は俺が守るから」

「ホント？」
「うん」

ふと見上げたそこには自分が入っていたであろう大きなチューブ、下には小さな金属プレートが貼り付けられていた。ところどころ赤いなかがかびり付いているが、かすかに刻印された文字が見える。この夢の主役であるう少年の存在を示す名前。

『一戦闘特化遺伝子強化披検体N - 35』
エクステンデッド

「・・・・・・・・んあ？・・・・・・・・」

何か懐かしいものを見ていたような気がする、幼き日の思い出のような。それしか感じないが・・・・まあ、所詮夢か、それにしてもなんだったんだろうな。

「ほら、起きろ。朝食食いそびれても知らないぞ」
「うにゃ」

「うおわぁ！馬鹿、なんで下着だけで寝てるんだよ！」

中々起きないので布団をめくると、最初に見えたのは紫の・・・所謂勝負用とかって言われそうなブラとパンティー。正直言うと、とても艶やかです、こいつも体型は結構良い方というか良いので。俺だって普通の男子高校生であり思春期ですよ！朝からはダメだってこれは、前屈みになっちゃうから。

「ん、誘惑ですけど。なにか？」

「せんでいい、早く着替えろ。俺は向こう向いてるから」

「中学のときは普通に着替えてたじゃない、もしかして・・・」

あゝ、この後ろから聞こえる布擦れの音が落ち着かん。落ち着け俺、後ろにいるのはただの幼馴染・・・で会ってるのかわからんけど。幼馴染に反応してどうする、ただの節操なしじゃないかよ。早く男同士の部屋になりたいです、むしろセシリアと同部屋だったらもう少し落ち着いてくれたかもしれん。

「わひゃあ！？な、な、にやにを・・・／／」

薄手のシャツごしに感じる二つの暖かくて柔らかいなにか、こいつ・・・わざと当てる反応楽しんでやがる。よく知った相手とはいえこういうのができる女子っていないよね、普通は、こいつが特別なだけかもしれないが。

「そういえば、クラス対抗戦頑張ってたね」

「俺は副代表だから関係無いだろ」

「さて音羽分も補給できたし、私は行くわね」

「説明してけ！・・・行っちまったし」

音羽分つてなによ、そんなことを疑問に思った朝だった・・・。

44・記憶の断片（後書き）

というわけでどちらかと言うと楯無さんの出番でした

どうでも良い作品情報

今作品で打鉄は結構バリエーション多い

45・つるべたツンデレ中華娘登場（前書き）

ISガチャでお嬢様が一発で当たりテンションがヒヤッハーして
います

予約投稿の日時間違えてしまっていました、すみません

45・つるべたツンデレ中華娘登場

「おっはよ〜！」

朝の挨拶は元気にしよう、勿論笑顔で。最近は挨拶ができる人が減っているらしい、人との付き合いは挨拶から始まるんだ、しっかりすれば良い人間関係が築けるぞ。

「おはよ〜如月君。転校生の噂って知ってる〜？」

「おう、おはよう。ああ、中国からだったっけ」

遅く起床したために今日は朝食を一人で済ませた、もとい栄養ドリンク。時間が時間だったから遅刻するわけにもいかなかったんだよね、すまん俺の体。千冬さんの出席簿のほうがダメーじ大きいから優先させてもらった・・・転校生ねえ、無粋だから言わないけどね。

「しかも代表候補生なんだって〜」

「へえ、ほお。ふ〜ん」

代表候補生と言えば……………。

「あら、わたくしの機体データでしょうか」

「どっちかって言うと俺らのデータだろうな、タダではやらないけど」

いつもにも増して腰に手を当てるポーズが似合ってる、一夏が考えているようにイギリス人全員が綺麗にできるわけでは無い。これも威厳と嗜みの一つである、俺は一応できるが特に使う用事も無いからやってない。ひとまず、今日もセシリアは可愛いとだけ言っておこ

う。

「このクラスには無いのだろう、ならば騒ぐほどのことでもない」
「そうか？」

さっきまで遠くの自分の席にいた篤がいつの間にか一夏の席へと移動してきていた、もしや忍者か？違うか、そうか、空気なだけか「誰が篠ノ之空気だ馬鹿者」だそうだ、まあいいけど。なんか一歩乱起こりそんな予感がするなあ、原因は主に一夏とか一夏とか一夏とかry。

「どんなやつなんだろうな」

「気になるのか？」

「候補生ということですからお強いのでしょうかね」

つまり・・・優勝景品の「食堂スイーツ一年分フリーパス」が手に入りにくくなるということか、確実に候補生機体データとかでこういうイベントには出る。というかデータ取りのために来ていると言っても過言ではない、ちなみにセシリアもそんな感じである。ついでに言うところのクラス対抗戦とはクラス代表同士による、本格的なIS実習が始まる前の・・・えーっと・・・スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。やる気出すためにフリーパスとかが景品にされるらしい、粋なはからいをするものだ。え、そっちの説明が重要だって？俺にはスイーツのほうが重要なんだよ。

「対抗戦は負けられないぞ一夏」

「まあ、やれるだけやってみる」

「やれるだけでは困るぞ一夏！男たるもの頂点目指していかなば意味が無いだろう」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよ」

「今のところ専用機持ちは1組と4組だけだから余裕だよ」

いや、仮にもクラス代表だから油断できないと思うんだが。専用機持ちじゃない候補生だっているんだから、機体性能が勝利の絶対条件じゃないんだぞ。どこかの池田声の仮面彗星も言ってたじゃないか、え、分からないって？ g g r k s

「その情報、古いよ」

突然教室の黒板側の入り口から昨日ぶり ああ、一夏には1年ぶりか の声が聞こえる、その懐かしい声に一夏が振り返る。俺は最初からそっちを向いていたので問題ない。あ、筭の視線が真剣を抜いた侍のように鋭くなった。いや、元からが余計に鋭くなっただけかって鈴ちゃんそいう風にすると

「2組も専用機持ちが代表になったから、そう簡単に優勝させないから」

「鈴……？お前、鈴か！」

「そうよ。中国代表候補生、フアゼンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

おお、なんというカッコつけ。まあ、カッコよく決まってるけどボーイッシュってこういうのを言うのか。うん、勉強になった、いつ役立つかわからないけど。今日もサイドアップテールが陽光に反射して輝いている、健康的ってのは良い事だな。ちなみに鈴ちゃんも一夏のことが好きである、この女泣かせ！「音羽……それ、あなたが言えることですか？」どこがだよ、俺のどこが鈍感でビン・カン燃えない奴だって言うんだ。

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「な、なんてこと言うのよ！ 台無しじゃない！」

流石KYキング、せつかくのシーンを根底から破壊してくれた、おのれデイクイドオオ！！ まあ、某10周年はどうでもいいが、というか、何時になったら一夏はまともな男になるんだろうか。まさか、ここからまた増えないよな一夏ハーレム。一瞬、金髪貴公子と冷水って単語が思い浮かんだが関係ないよなあ！？ まあ、昔から嫌な予感はあるから……ま、一夏のことだからもはや驚かないけどな。

「一夏エ……まったく、お前は……」

いかん、新たな犠牲者が出てしまう。ここは伝統のやり方で伝えねば、一夏と一瞬視線を交わし鈴ちゃんの背後を指差して叫ぶ。

『志村うしろ、うしろ！！』

「え？ ぴぎやア！！」

無慈悲に振り下ろされる名刀『出席簿』、その迷い無き一閃は鈴ちゃんの額に吸い込まれるように命中した。振り返ったら視界から外れなくちやいけないだろ千冬さん！ 叩くのはまだ早いよ、ああ、でも千冬さんがなんか堪えてるようにしてる。ドリフSUGEEEEEE！！

「凰、もうSHRの時間だ。さつさと戻れ」

「は、はい！ 一夏、また来るからね！！ あ、音羽も」

そう言っただけチャームポイントのサイドテールを揺らし、身を翻して

去っていく。その身軽さはさながら猫のようだ、そっぴや猫って可愛いよね。まあ、セシリアのほうが何倍も可愛いかな！それは譲れん、あ、SHR始まる。ってか、俺はついでかよ、まあ別に良いけどさ。

「さつさと戻れ」

「はいいー！」

結局今も千冬さん苦手なのか、昔からだよね。懐かしい、っと席に戻らないと大変だな。一夏はどうせ自分に迫る危機に気づかないで「なんで格好つけようとしたんだ？」とか考えてるんだろ、目の前に武神が立っているけどもシラネ

「あいつ、IS操縦者になったのか・・・」

「一夏、あいつは誰だ！」

あ、あ、あゝ・・・どんどん他のクラスメイトも一夏の元へと質問しに行ってしまう、数人は俺の動きと表情と時計を見て自重しただけだな。

ズバンズバンズバンズバン！！

『・・・・・・・・！！』

「席に着け馬鹿者共」

スライドしながら残像を残して振り下ろされる出席簿が火を噴く、並んで頭を抑えて蹲る女子とその中心にいる一人の少年という不思議な構図が出来上がった。なんだこれ。

ちなみに鈴ちゃんのが気になって仕方ないのか、箒がその後の授業で6回叩かれたのは不可抗力でもあると思いたい。

45・つるべたツンデレ中華娘登場（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアと楯無にしてほしいコスを作者がこっそり教えて欲しがっていたりする

46・通常営業の喧騒（前書き）

ネタ会話多目です

46・通常営業の喧騒

「お前のせいだ！」

「なんでだよ……」

昼休み、昼食をとろうと食堂に向かったところ。一夏が箒に理不尽な説教をしていた、いくらなんでもそれは無いだろよ。自業自得だし、よりによって千冬さんの授業で考え事して話聞いてないでいたらそりゃあ叩かれるわな。しかも6回も、見てるこっちからすれば年頃の乙女らしいんだが、タイミングが悪かった。鬼の……いや、鬼神の居る前ではそういう行動はそれこそネイキッド（ナイフ縛り）でBB部隊同時相手にしてるようなものだ。この例えが分かる奴がいるかどうか知らないけど。

「まあまあ、話は飯食いながらでいいだろ。な？」

「ずっとここで立つてるわけにもいかないしな」

「ええ、座ってゆっくりお話するのが良いと思いますわ」

三人による自然な口撃に箒がわかったとでも言うように頷いて歩き始めた、あ、向こうで鈴ちゃんか仁王立ちして待ってる。心なしかイラついてるように見える、右足の爪先を何回も上下させているからなんだが。そういえば俺はカルシウムを過剰と言えるまで摂取してるのにイラつくことがあるんだが、誰だろうね「イライラするのはカルシウムが足りないからだ」とか言ったのは。まあ、そのために俺は味噌カレー牛乳ラーメンなるものを注文したけど。美味しいのかこれ？

「待ってたわよ、一夏！」

それぞれの昼食をおばちゃんから受け取り、席に着こうと視線を食堂に巡らした先に鈴ちゃんがどくと構えていた。さっきからずっとそのままだったのか、心なしかラーメンの麺がスープを吸って延びてるように見えるんだが。ラーメンに限らずできたてが美味しいんだぞ、てか、結局カツコつけするのか。似合ってるけどさ。

「まあ、とりあえず座ろうぜ。あそこ空いてるし、鈴も早く食わないとダメだぞ」

「わ、わかつてるわよ!」

ともあれ、一夏が先導して空いていたテーブル席に座る。円形のテーブルを囲むようにしていつものメンバーが座る、順番は一夏・篤・鈴。丁度鈴が一夏の隣に自然な感じで座っていた、俺とセシリアはそれに向かい合うようにして座っている。

「それにしても久しぶりだな、一年ぶりか?元気にしてたか?」

「元氣も元氣よ、誰かさんのおかげで(チラ)」

「……(プイツ)」

「どうしたんだ音兄?」

「なんでもない」

そうだ、なんでもないんだ。別に月1で一夏の写真をメールで送っていたんだ、とか言えない。しかも涙目+上目遣いのコンボで撃墜されたから断れなくてとかも言えない。まあ、好きな人に突然会えなくなることになるなんて悲しいからな。まあ、並木野で生徒会長やってたときの癖というか「いつでも、どんなときでも生徒会長は生徒の味方」っていうのが固定観念であるというかなんとか。まあ、それはいいや。

「俺が良く行つてた料理屋の娘さんなんだ（ボソリ）」

「やはり・・・一夏さんのことを？」

「うん、結果はこのとおりだけでも」

目の前では二人の少女が互いに火花を散らせて睨みあっていた、一夏、幼馴染にファーストとかセカンドって付けるなよ。ついでに言えは一夏曰く、簪ちゃんはサードらしい。だから幼馴染にファ（ry

「付き合ってるのか一夏！？」

「つ、付き合ってるなんてそんな・・・／＼」

「なんでそんな話になるんだよ、ただの幼馴染に決まってるだろ」

『・・・・・・・・・・』

「なんで睨んでんだ？」

「なんでもないわよ！！」

一夏エ・・・・・・・・どうしてそこでわからないんだ、そこで！諦めんなよ！できるできる絶対できる・・・・・・・・わけないか。まあ、そういうことはお構いなしに俺は味噌k（ryラーメンを、セシリアは煮魚定食を食べる。おお、結構美味しいなこれ。（作者も食べた経験あり、美味しかったよ）

「鈴音さんですね、わたくしイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します。よろしくお願いいたします」

「・・・・・・・・誰？」

「なっ！？同学年の候補生も把握しておりませんか？」

「うん、興味ないし」

「なっ！？な、ななあ！？」

セシリアのコメカミに四つ角が見える、突如言われた驚愕の事実によろめきそうになるもどうにか抑えたその顔は真っ赤になっていた。まるでマンガのゆでだこのようだ・・・喋ったら超速で撃ち抜かれるから言わないけど。ひとまず落ち着かせよう。

「言っておきますけど、あなたには負けませんわ!」

「あつそう、まああたしが勝つけどね。悪いけど強いもん」

ふふんと強気な鈴ちゃん。相変わらずだなあ、妙に確信的だし嫌味には感じないんだよね。素で言ってるからなんとも言えない、素で思っつてそのまま口に出すからなあ。嫌味じゃないからもちろん怒る人もいるよ?

「言ってくれますわね・・・」

「変わってないなあ、鈴ちゃんは」

俺がしみじみと昔を思い出して懐かしんでいると鈴ちゃんが一夏にクラス代表か否かを聞いていた、ああ、2組の代表になったって言うってたな。確かもう決まっていたと思うけど、おそらく候補生ってことでの措置か?専用機持ちって言うってたし、中国も第三世代機できたって聞いたけどどんなのだろう。某ナタクみたいにクローが付いてて伸びるんだろうか、それはそれで強そうだな。

「音羽、そんなのなわけ無いでしょ」

「じゃあ、隠し腕」

「気味が悪いでしょ」

「NT-D」

「ここから出て行け!!」

「エネーコントローラー!」

「右左上下A B！つてできるかあ！！」

『いい加減にしろお（なさい）！！』

痛い、人の頭を雪片とスターライトで叩くなんて。なんかズガベシッ！！つて聞こえたぞ、およそ人体から聞こえてはいけない音だと思っただが。え、ギャグ補正？ふざけるな。てかメタネタやめろ。それ以前にIS用の特殊合金で作られた装備をハリセン代わりにするな、俺の体内に物理的な突っ込み（誤字にあらず）になるから。

「まあ、いいや。じゃあごゆっくり」

「では、わたくしも」

昼食を終えた俺とセシリアは背後から聞こえるいつものどおりの喧騒を聞きながら、教室へと歩いていった。ふと掲示板が目に入ったので何か連絡事項などがないか確認する。ちよつとした連絡事項などはここで開示されるために、食事を終えた生徒がまばらではあるが集まっていた、大きな行事の連絡や情報確認もできるんだよね。

「え？」

「あら」

そこには、クラス対抗戦の出場がクラス代表と副代表の二名に変更されたという事項が表示されていた。

美月が言ってたことって……こういうことだったのかよ、mjk

46・通常営業の喧騒（後書き）

どうでも良い作品情報

原作2巻終わるまで音ucciの本当の専用機は出てこない予定

47・当然の報い

IS学園第4アリーナ、その中央には4機のISが展開されていた。無論、白式とブルー・ティアーズに打鉄のF型と貸し出しの一般機だ。

「まさかタッグになるとは思わなかったよ」

「これも良い経験だろう」

「後で楯無シメる」

「ともかく始めましょう、私と箒さんで攻めますから。お二人で連携してくださいね」

白と蒼、二つの黒が舞い上がった。そういえば何故が一夏が箒とセシリアに追いかけられてボコボコにされるようなイメージが思い浮かんだんだが気のせいだろうか。それはそれで見てみたいような感じもするけど、言っておくが俺はSでは無いぞ。断じて。まあ、美月の困った顔を見てどこかゾクゾクするようなことはあるけども。

「では、行くぞ！」

「上等！」

「全速全身DA！」

「音羽は危ないネタを使わないでください！」

ちなみに俺はいつもの赤縁眼鏡をかけたままである、右目の抑制も兼ねているからな。じゃないと関係ないときに起動して面倒なことになる、この右目のこと知ってるのは俺とセシリアと美月に千冬さんだけ。何かあったときのために敵を騙すなら味方から実践しているのだ。事実、俺がIS学園に入ってから裏で動きが活発になっ

た組織があるとか。正体不明だけど。亡国とかつて名前だったな、
イージス？違うか。

「せやあああああ！！」

「やらせるか！」

篤が一夏にブレードで切りかかるところをハンドガンで牽制する。
もちろんセシリアがスターライトでの正確な射撃をしてくるのでシ
ールドで防ぐ。

「一夏、今だ！」

「おう！」

それから2時間、みっちりとISでの訓練をした俺達。一夏は汗だ
くで疲れきっていた、まあ、何も運動してないでいればそうなるよ
な。今は一夏と篤が反対側のピットにいるのだろう、なんか鈴ちゃ
んが上の通路歩いてそっちに歩いていったけど。

「ふは、ISってのは結構使いにくいな」

「まあ、慣れなければ大変ですからね。安心してください、私がし
っかり教えてさしあげますわ」

「ありがたき幸せでございます、お嬢様・・・ってな」

「やっと様になりましたのね、今更だと違和感ありますけど」

まあそりゃあ、本邸では普通にタメ語っていう暴拳を犯していたけども。良くあんなんで俺やっていれたな、そりゃまあ警護は体に覚えさせられて反射でしちゃうレベルにはなってるけど。執事的スキルは皆無だからな、どっちかっていうと年の離れた妹に今日はをするよって教えて連れて歩いたようなものだからなあ。護衛のほうメインだったし。

「俺の体のことがはつきりして片付いたら良いんだけどなあ」

「何か新しいことは分かりましたの？」

「裏でどこかの組織が動き出したってくらい、俺が一夏のどっちが狙いかも分からない」

死亡扱いになってたらしいけど、世界的ニュースになったからまた振り出しだ。中々俺自身の情報も出てこないし、結局俺はキャベツ特化56円なのか？近所のスーパーで1玉40円だったぞおい。

「右目のあれを使わなければ大丈夫だと思いますが」

「まあ、そうなんだけども」

コネ使ってフランス経由でドイツ軍に聞いてみるかな、こんな造った記録あるか？みたいに、確か遺伝子強化体が部隊配備されてるところがあるって噂程度に聞いたことあるし。そこらへんでなにかしら無いだろうか、せめて56円の本当の意味を知りたいです先生。

「は、厄介な体なこと」

「例えあなたがどんな存在だろうと、私は傍に居ますわよ」

「……（涙目）」

「あ、あら？どうしたの音羽」

「いや、嬉しくて……ああ、俺は今猛烈に感動している！」

いかん、嬉しすぎて涙が止まらない。何時振りだろうかこんなに泣いたのは、おそらくミリアさんに直々に鍛えられてそれがきつくて泣いた以来か。セシリアは何時の間にこんなに人間が出来上がっていったんだ、俺は嬉しいよ！あゝ、涙がやばい。汗みたいになんと流れる。

「もう、そんな大げさな」

「ありがとうな、セシリア」

「まあ、それは良いですから。夕食にでも行きましょう、ね？」
「そうだな」

二人して笑顔で食堂に向かって歩いてみると、何故か一夏と箒の部屋が騒がしい。またなんかやってるのか、どうせ性もないことなんだろうなあ。竹刀と金属がぶつかる音がするし、どうしてそうなった。

「またか」

「またですわね」

はあ、とため息をつくと突然鈴ちゃんがドアを蹴破り走っていつてしまった。……。仕方ないので箒に経緯を聞き、なんでも鈴ちゃんが昔に約束した「料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べてくれる？」という「毎朝味噌汁を」擬似四次元ポケットというものを「毎日タダ飯」と勘違いしていたらしい。腕時計からハーフサイズ月光を一機召還して痛みだけを与えるように命令して一夏をボコらせておいた。ついでに捨て台詞も。

「牛に蹴られて死ね！あ、箒も飯行かないか？」
月光

「ああ、一夏。死ねとはいわん、だが死ぬ気で反省しろ」

アッー！ー！とか遠くから聞こえたが気にしない、乙女の純情を弄んだ人間に当然の報いだ。え、月光だからシヤレにならないって？まあ、そりゃあ生体部品じゃなくて電磁人工筋繊維で脚部を作ったからやるうと思えばコンクリートくらいは砕けるが。非殺傷、痛覚のみっていう稼働命令だから死にはしない。痛みは半端ないだろうけども。精々ワイヤーアームで痺らせるくらいだし。

「は、まったく一夏が将来暗い夜道で刺される未来しか思い浮かばない」

「同感だ、鈴音とやらが不憫でならん。いくら恋敵とはいえあまりにあまりだ」

「いつから一夏さんはああでしたの？」

箒と俺が向かい合ってため息を吐く、そこからかよ。

「小学生のころからか、道理でなあ」

「やはり中学も変わりなくか、まったく」

「・・・一夏さんは一夏さんですね・・・」

食堂に三人のため息が響くように吐き出されたのは言うまでもない。

47・当然の報い（後書き）

どうでも良い作品情報

作中に出てきた月光は音羽宅にも一機オリジナルサイズで配備中
（ステルス状態で）

48・番外編 IF その1「幻想入り」(前書き)

息抜きに番外編、時間軸は音羽が高1のとき

本編のIFですので平行世界のことだと思ってください

(作者は詳しくなく、ノリですので細かいツッコミは無しが嬉しいです)

48・番外編 IF その1「幻想入り」

「あ？」

とある休日の土曜日、銃器などを裏ルートで仕入れてほくほく顔・
・・・それはそれでおかしいか。まあ、例えて言うならISの8巻
がやっと出て買えたぜ！って感じるくらいに嬉しいみたい感じた。
例えばメタなんて言っちゃいけない、分かりやすければ良いんだ。
で、なにこの足元の穴は。

「おわあ！？なんだこれ？つか、落ちるゝ！」

どうにか飲み込まれまいと道路を掴むも、穴がそれ以上に広がり飛
ぼうにもジェットパックが整備中であり手元に無いことを思い出し
た。あれ、詰んだ？なにこの状況、え、え？

「NO~~~~~!!」

最期の踏ん張りも効かず、その真っ暗な穴に俺は飲み込まれてしま
った。藍越学園に入学して初めての夏休み、初日の出来事である。

「どこだこい」

気づけば見知らぬ森の中、周囲には青々とした森林が遠くまで広がっていて、イオンが過剰摂取できそうなくらいだ。過剰摂取とかイオンにあるかどうか知らないけども、人っ子一人見当たらない、動物の気配も感じない。あるのは視界いっぱい広がる森林、もとい樹海だけである。

「携帯は圏外、GPSも不可。どうということなの」

衛星の回線に乗っ取る魔改造を施してあるにも関わらず、携帯の左上にはどや顔で圏外が鎮座している。まだ買って改造してから三日しか経ってないぞおい、すぐに使えなくなるとは何事だよ。せつかく米軍の軍事衛星乗っ取れるレベルにしたっていうのに、あ、身の安全って意味でね。軍用レーザー砲搭載されてるから。

「まあ、悩んでも仕方ないか」

まずはどこか人のいるところに出て、ここがどこかなど情報を手に入れなければいけない。悩んでいる暇なんてないんだ、早く家に帰らなければ・・・あのままイギリスに墓参りに行く予定だったけども。ひとまず、現状を打破するために俺は森を歩いていった。風の向きからしておそらくこっちに行けばいいはずだ。

そうは言ったものの、かれこれ二時間。さきからぐるぐると同じ場所を歩いているような気がしてならない、目印を付けてきたからそれは無いとわかるが・・・景色が変わらない。このままでは結局遭難してしまう、すでに遭難してるような気がするけども。

「まいったな」

諦めて死神の瞳を起動させようと眼鏡に手をかけようとした途端、
リーバース・アイ
近くの草むらから何かが動く音が聞こえた。

「リスか？流石に熊は無いだろうが」

とりあえず気になったので自身が遭難状態にあることも忘れて音の発生源へと近づいていった、できればリス所望、可愛いは正義である。誰か・・・確かジャックがそんなこと言ってた、絶対違うと思うが。

「うおっ!？」

突然足元に飛び出てきたものだから、思わず驚きのあまり後ずさり。そのまま後ろへと倒れこむように転んでしまった、丁度尻が当たったところに小石が突き出ていたみたいで痛い。まだ痛みが残るそこをさすりながら飛び出てきたそれをようやく見る。白い・・・毛玉？目と口はついていてみたいだが、何も言わない。じゅっと俺の顔をガン見している、なにか言ったら言っただけ怖い感じもするけど。油で揚げたらおいしそうだなこれ、抹茶塩を少し振りかけてサクツと。ひとまず初見の生物であるのは確かだ、なんだこれ。

「・・・・・・・・・・じゅるり」

「・・・・・・・・・・（ガン見）」

小腹が空いてるし、捕獲してみるか。新種だったらおそらく研究所とかから報酬とかも貰えるかもしれない、既に総資産が企業のそれを超えてるけど。一昨日に銀行口座の金額見たら大企業の年収数年分になつていたけども、どう使えと？オルコット家には裏ルートで送金したけどもさ、それより今はこいつを捕まえるのが先だ。

『・・・・・・・・・・』

今まさに手を伸ばそうとした手前で、その美味しそうな毛玉は素早い身のこなし（？）で遠くへと飛び跳ねて逃げていつてしまった。ああ、貴重な不思議生物兼食料になりそうだったなにか……。名残惜しくそれが居なくなつた方向を見ると、いくらか明るく見えた。どうやらその先は開けているようだった。

「お、おお！出れたー！！」

5分ほど歩いていくと、見渡す限りが広大な草原になつていた。まあ、濃い目の霧がかかつていて地平線が見えないんだがな。それでも森の中で過ごすようなことにならなくて良かった、持つてる食料なんてカロリーメイト食いかけの一本しか残つてなかつたからな。流石に寝袋無しで野宿はきつい、いくら大丈夫なように鍛え上げられてしまつたとはいえ。

「どうするか、このままここに突っ立つてるわけにもいかないし」

ここから人が住んでいそうな集落は見えないが、森と反対側になら入里くらいはあるはずだ。というか、無かつたらマリアナ海溝なみに深いため息を限界まで吐くことになりかねない。ジェットパックが手元に無い以上、上空から飛行して調べることもできないし。・

・・・歩くしかないか。

歩き始めて既に10分が経過した、どこにも集落なんて見えないし水田のようなものも見えない。心地良いそよ風が俺の顔を優しく撫で付けるだけ、あゝ静かだなあ。まあ、まさかこんな場所で迷子とは夢にも思わなかったわけですが。平原で迷子とかどうやったらできるんだろうね、俺がなうな感じでそれだけど。

俺のチタン合金ハートが傷ついてため息をはあと吐いていると、どこからか声が聞こえた。

「どうして迷子になっているか知りたい？」
「ん？」

項垂れていた顔を声の聞こえた方向に向けると、そこに青い服を着た小さな女の子がどしつと構えて立っていた。軽そうなのにどっしりとはこれいかに、帰れたら一夏にでも教えておこう。で、迷子の理由だつて？

「道に迷うのは妖精のせいなの」
「・・・厨二？邪気眼でも発動した？」

というか、このISっていう科学技術の塊が世界の中心となっていて世の中にそんな非科学的なものを出されても。普通ならはいそう

ですかつて納得できるわけがない、というか中二病患者を相手に話している暇など無いんだが。見たところ小学生っぽいし、ひとまず人里まで案内してもらおう。

「違うわよ！いきなり失礼ね」

「ああ、すまん。ところでどこか近くの人里まで案内してくれないか？君はどこに人が住んでるか知ってるかな？」

「もちろんよ！」

おお、助かった。元気に返事をしてくれただってことはもう安心だ、無事に人里に行ける。

「じゃあ、案内お願いしても良いかな？」

「道を教えてほしいの？それじゃあ・・・」

「勿論お礼はするよ、できる限りだけど」

俺が言い終わった瞬間、両手をこちらに向けてくる女の子。なに
するんだろっ、おんぶでもすれば良いのか？気の強い子みたいだから、それは流石にありえないか。以上、セシリアを相手に頑張った俺の経験による考察終了。

シユパン

「え？」

視界を埋め尽くすつまではいかなないものの、多数の小さな氷塊矢のように放たれて。そのうちの数個が俺のすぐ真横を通り過ぎていった。当たりはしなかったものの、サイドテールに少し掠った。体に命中しなかったものの、掠った髪が少々散らばったことから相当の威力を持つことがわかった。体に当たれば怪我だけでは済まないと

直感で理解した。

「いきなり何しやる！」

「案内してほしかったら最強のアタイを倒してみなさい！！」

「は！？」

一体何がどうしてこうなった、道案内を頼んだら何故か戦うことになったし・・・それ以前にあの女の子から氷の弾撃ち出したぞ。教えてくれないか、ジャック。ここに居ないから意味無いけどもさ。そうだ、良く考える俺。きっとこれは夢だ、幼女が手から氷塊撃ちだして俺を狙ってくるなんてことあるわけないジャマイカ。どこのゼビウスでも相手は女の子じゃないぞ。

「あいたたた・・・流石にこんなリアルじゃ夢なわけないか」

頬をこれでもかとおつねって見るが、考えるまでもなく非情なまでの痛みが伝わってきた。認めたくないが認めるしか道は無いらしい、これは紛れも無く現実だった。大人しくやられるわけにもいかないが。

「あんたを冷凍保存してやるわ！」

「話を聞きやがれ！！！」

「当つたれ！！！！！」

「言葉のキャッチボールしてくれ！」

いくら氷塊をばら撒いてくるとは言え、相手は女の子。むやみやたらと銃器を出すわけにもいかず、彼女の撃ちはなってくる氷弾の雨を避けるはめになってしまった。弾薬に非殺傷のゴム弾なぞ入れているわけもなく、対抗もできるわけがない。

「誰か助けてくれ〜！h e l p m e ! ! !」

「あらあら・・・幻想郷に来て早々、大変な目に会ってるみたいね」

さらにそれは言葉を続ける。

「まあ、私が助けてあげるのも良いのだけれど」

悩むような声を出す、気にせず続ける。

「こんなに面白いことに手を出すのもあれだし・・・もうちょつと様子を見ても良いかしらね」

ふふふと笑いながらその光景を見ていた。

「ここは一つ、彼のお手並み拝見ね」

48・番外編 IF その1「幻想入り」(後書き)

どうしても良い作品情報

本編に関する情報も一部出る予定

49・夏が原作読者に恨まれる理由（前書き）

今回はgdaってしまった感がヤバイです

49・一夏が原作読者に恨まれる理由

一夏に私的制裁を加えてから、一晚。

クラス対抗戦の初戦の相手は・・・鈴ちゃんと元二組代表さんであつた。

ついでに言えば、5月に入つたというのに鈴ちゃんは一夏と話すことなく嫌悪感をオーラとして見えるんじゃないかというほどに露骨に出していた。小さい虫くらいだつたらその気迫でやられそうだなと思うくらいだった、一夏、早く謝ってくれ。いくら自分に向けられたもので無いとはいえあの空気は気持ちが良いものではない。

「IS使つた訓練も今日で最後か、心配だなあ」

いつもどおりの一日を終え、日が西に傾き始めた放課後。明日からクラス対抗戦用にアリーナが試合用に調整する期間に入るため実質最後のISを使つた実習時間となる。まあ、これだけ大きいアリーナを使うんだから剣道などのスポーツとはする作業が比べ物にならないほどに多くなるので仕方ないことではある。

まあ、ISが飛び回つても端から反対側まで行くのに結構かかるかなあ。

「IS操縦もそれなりに様になってきたからな」
「まだまだ俺は足りないよ」

ちなみにメンバーは俺とセシリア、一夏に空気「空気ではない！」・
・ 箒である。最近ではクラスの女子が慣れたためか落ち着いてき
たために質問攻め（主に一夏が、俺は避けた）や追っかけ（俺は空
の旅、一夏は放置）も収まっていた。まあ、俺は見つかる前に逃げ
たり捲き菱をばら撒いていたから主に逃走手段を持たない一夏が楽
になっただけなんだがな。

「せめて助けてくれよ、男は二人だけなんだからさ」

「いや、そういうのは中学で十分だ。月単位のほうがマシだろう」

思い出すは、生徒会就任後から始まった俺の追跡劇。校内にいる間
はどこからか視線を感じ、カメラのシャッター音が聞こえ、知らない
間に生徒の間に俺の写真が広まっているという状況。IS学園祭
に美月が招待してくれたときは同期の並木野出身生徒による伝言で
あれこれ追われて女装する羽目になったりした。黛にはそのときの
写真を撮られた……一生の不覚！！

「それにしても、音兄の専用機って何時来るんだ？」

「早くても臨海学校ころ、遅ければ夏休み終わってからだってさ」

なんでも英国王室で、認定騎士だからと現在急ピッチで建造が進ん
でるらしい。しかも女王陛下直々の命令で……まさかの稼働デ
ータは機体の性能評価のだけで良いという計らい。逆にそれで良い
のか？とこちらが心配になるほど、「騎士としての生き方が対価で
す」と言われてしまったので……どうしようも無いけど。

「まあ、セシリアのおかげで良く動けるようになったし。フリーパ
スのためなら……ふふふふふ」

「少しどころか結構怖いんだが」

「待つてたわよ一夏!!」

いつもと変わりなく、第三アリーナのAピットのドアを指紋・静脈認証で開けると。そこにとある人物が仁王立ちで待つていた、腕組みをしているのは良いが一夏を籠絡させるには一部分が足りなかった。箒がやると威力抜群だろうなゝなんて考えながら痴話喧嘩をセシリアとともに紅茶を飲みながら眺める。我ながらどうでもいいことを考えるようになったものだ。

「で、一夏、反省した？」

「は？なにが？」

「・・・だから、あたしを怒らせて悪かったなあゝとか無いの？」

「そう言われてもなあ、お前が避けてたんじゃないか」

その瞬間、一夏を覗いた空間が凍りついた。ビシッという嫌な音がしたのは気のせいではない、決して。

頭痛が痛くなった（日本語がおかしいのはイギリス育ちだからと思いたい）、目の前に原因候補がいるけども。

「あ、あんたねえ。女の子が放っておいてって言ったたら放っておくわけ？」

「おう！」

「・・・一夏、お前に分かりやすく教えてやる「押すなよ！絶対押すなよ!!」だ」

「なるほど、勉強になるな」

「例えばそれなのはまあいいとして、そういうことよ」

これで理解する一夏も一夏なんだけどな、いつも面白いかどうかは知らないが洒落を思いついてるみたいだし。これくらいが丁度良いだろう、うん。セシリアは良く分かってないみたいだけど。

「謝りなさいよ！」

まあ、一夏が理由を説明しろとか言い始めて口喧嘩が勃発。理由を言えるわけがない鈴ちゃんが謝罪をとにかく要求し無限ループ・・・お前らなあ、もう少しお互いを理解したらどうなんだよ。ほら、鈴ちゃんなんて恥かしくて顔真っ赤にしちゃって、そろそろ仲裁しないとヤバイかな？

「じゃあ、負けたほうが買ったほうの言うこと一つ聞くつてのでどうよー！」

うげ、いきなり巻き込まれた。

「じゃあ、勝ったら理由説明してもらうからな！」

もうやめて、鈴ちゃんのライフはもう0よ！というか、それって死ねってことかよ。朴念仁って怖いな。

「い、いや説明は・・・／＼」

「なんだ、怖いのか？恐怖なんか捨ててかかってこいー！」

負けず嫌いに挑発とか、そんなこと言ったら鈴ちゃんが対抗しないわけじゃないか。これって俺も巻き込まれたってことだよな、確実に。ねえ？セシリアは「頑張って！」って顔で笑顔を向けたあ

と視線逸らしたし、筈は頭抱えてため息ついてるし。

「い、言ったわね！そっちこそ覚悟しておきなさいよ、この馬鹿！
鈍感！朴念仁！」

むかつ。

何か嫌な予感、こういうときは大抵良い事が起こらない。というか
起こせない。

「うるさい、貧乳」

『！！！！？』

瞬間、爆発音とともにピットが揺れた。音の先には、凹んだ壁と右
腕が部分展開されたISを纏った鈴ちゃん。どうやら壁を直接殴っ
たわけではないことから、とてつもない強い力だということがわか
る。え、え、どうしてこうなった。つか、酷いな一夏。

「い、言ったわね・・・禁句を言いやがったわね！！」

あ、ISアーマーがどれだけ強く握られているのかみしめし言いな
がら紫電を放ってる。これはマジで怒ってるな、昔から気にしてた
からなあ、それは一夏も重々承知していたと思ったんだが。おそら
く売り言葉に買い言葉ってところか、ガチで焦ってるし。まあ、自
業自得だよな！

「い、今のは悪かった！す、すまん！」

「今の「は」？今「も」よ！！対抗戦、覚悟しておきなさいよ！？」

鈴ちゃんがガチギレして去ってから……

「ひとまず、しっかり謝れよ？」

「……わかつてる、はあ」

「……まあ、頑張るしかないよね。プライベート・チャネルで鈴ちゃんが「一対一^{サシ}でやらせて」って言ってたし、本気で痛めつけるんですね、わかります。」

49・一夏が原作読者に恨まれる理由（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の呼称

美月・箒・セシリア・鈴音・虚・雅〓音羽

一夏〓音兄

黛・本音・ジャック〓音うち

千冬・山田〓如月

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い（前書き）

だいたい自業自得

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い

試合当日、第二アリーナ第一試合。対戦カードは織斑一夏 & a m p ; 如月音羽 V S 鳳鈴音 & a m p ; 河西愛理、二つの黒い影と赤と白が向かい合う。噂の新入生の試合と聞いてアリーナの観客席は満員御礼、通路で立ち見する人も現れるほど。それでも入りきらなかった生徒は中継モニターで観戦するんだって、風に聞いたところによると賭けをしている輩もいるとか。

それにしても、鈴ちゃんの専用機「甲龍」^{シェンロン}だっけか。スパイクアーマーが付いた非固定部位^{アンロックユニット}が特徴的である。殴られたら痛そうだが、それ以前に第三世代兵器が搭載されているからそれにも注意が必要だ。白式ならまだしも、こちらは所詮量産機。しかも高機動型だから射撃は避けなければすぐに撃墜される。しかも、今の一夏の技量ではおそらく二対一は無理がある。

『それでは規定位置に移動してください』

無常にも考え事をする暇も無くなる、お互いに向き合う。その距離5メートル、既に試合は始まった。

「一夏、謝るなら手加減してやっても良いわよ」

「そんなの、雀の涙くらいだろ。真剣勝負だ、そんなの要らない。全力で来い」

空気が張り詰める、河西さんもにこにこ笑顔で会話を聞いている。どうやら言わずとも良かったらしい、話が分かる人でとても嬉しい。鈴ちゃんがいなければクラス代表になっていたことから相当の実力者であることは………確実だ。そこらへんを一夏が理解している心配でもあるが。

「ISの絶対防御も完全じゃないのよ、シールドエネルギーを突破できる攻撃力があれば本体に直接ダメージを与えることも可能なのよ」

事実なんだよね、これがまた。秘密裏に操縦者にダメージを与えるためのだけの武装も開発されているからな、いつだか実物を見る羽目になったときはその趣味の悪さに気分を害したこともある。条約違反だから競技では使用が禁止されているがもし戦争になったらあちこちからそういうのが出てくることだろう。まあ、普通の武装でもやろうと思えばできるんだがな。つまりは。

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

この事実揺るがない、代表候補生レベルともなるとそれも容易くできるほどらしい（セシリア談）それほどまでに操縦技能レベルが高いということの証拠なんだよな。だから、一夏がセシリアにあそこまで迫れたのも、俺がセシリアに勝てたのも運が良かったからに過ぎない。俺の場合はほとんど不意打ちだったからな、まあ、だからこそ負けないためにこれまで特訓してきたんだ。奇跡は、自分から起こすためにある。

『それでは、試合開始！！』

同時に開始を知らせるブザーがけたたましく鳴り響く、その音が鳴

り終わる前に4機の影が素早く動き出した。

「悪いが、あいつらはあいつらでやらせてやってくれないか？」

「勿論、邪魔はしないわ。生徒会長さ・ま？」

ビクツと背筋に悪寒が走る、俺をそう呼ぶってことは・・・並木野出身か！しかも俺が逃走のためにばら撒いた撒き菱用写真の弊害、なぜか息を荒くして迫ってくる女生徒という理解できない事態。楽だからとやった結果がこれだよ！

「うふふふふ、会長の体をふふふふふ」

「させるかぁあー！！」

瞬時に大型対物ライフル「レインスパア」を展開し、三点バーストでタングステン合金弾 驚異的な貫通力を持ち対物射撃に良く用いられる、某13なスナイパーもそれで階下から上階の戦闘員を床を介して撃ち抜いていた を全て当てるつもりで撃つ。

「はぁはぁ、銃を撃つ会長も素敵！！」

しかし、普通ならば避けられない軌道のそれをこんな言葉とともに余裕で回避しているのだからすごい。そのセリフが無ければもつと素敵だったと思うんだ、あとそんなに怖い目で息荒く迫ってこないでくれ。まさかISの試合で貞操の危機を感じるようになってしまうとは思ってもいなかったよ、マジで。はぁはぁ言いながら銃弾を

横にずれて避けるし、スラスタ―使った三次元跳躍してショットガン「アンブレラ」を二挺持つて襲い掛かってくる。

「ヒッツハー！！」

「でえい！！」

銃撃の応酬が延々と続く、これは良い勝負になりそうだ。

「つぐ、重い！」

「初撃を防ぐなんてやるわね一夏！」

試合開始とともに先制攻撃で雪片を振るうも、巨大な青龍刀・・・もはや大剣と呼べるそれによって見事に防がれてしまった。しかもそれが二本、バトンを扱うかのように華麗な剣捌きでの連撃はどうにか防ぐので精一杯だった。あまつさえこちらは細身の刀一本、どうにか防ぎきっただけでもマシなほうだった。

「（このままだと消耗戦だ、どうにかして一回離れないと・・・）」
「フツ、甘い！！！」

後退しようとした姿勢を変えた瞬間、あの痛そうな棘付きアーマーが上下にばかりとスライドして開く。その中に見える球体が光り輝いた瞬間、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。あまりにも大きい衝撃に気を失いそうになってしまいが、ISのブラックアウト防護によってどうにか意識を保つ。

「今のはジャブよ、貰ったア!!」

にやりと笑った鈴、先ほどのそれを警戒してどうにか回避行動を取った瞬間。間髪要れずに権勢ジャブの後の本命が二発撃ち込まれた。その結果、着弾の反動と重力の相互効果でアリーナの地面に強く叩きつけられる。ずきりという鈍い痛みで立ち上がるのもままならない、見えない拳は言葉通りシールドエネルギーを貫通していた。既にシールドエネルギーが76も削られていることからその威力の高さに納得した。

「なんなのだ、あれは・・・?」

試合管制とモニターのためのピットで試合を見ていた篤が呟く、それが聞こえたのかセシリアが答えた。

「『ショックキャノン 衝撃砲』ですわ、空間自体に圧力を加えて砲身を形成して余剰で生じた衝撃を強固で不可視の弾丸として撃ち出す第三世代兵器ですわ」

しかし、その説明を篤は聞いておらず。モニターに映し出される一夏を心配そうに見つめていた。

山田先生が「流石、代表候補生ですね」と嬉しそうにしていたのはここだけの話である。

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い（後書き）

どうでも良い作品情報

作者がPV20万・ユニーク3万突破記念話のやつてほしい内容を聞きたそうにしている

51・番外編 IF その2「冷静になろう」(前書き)

本編のストックが切れていて無理だったので番外編です

51・番外編 IF その2「冷静になるう」

「喰らえっ!!」

「のわあっ!？」

少女からの弾幕をどうにか避ける、どうして氷が銃弾レベルで襲い掛かってくるのさ。どうにか話し合いで解決したいのだが、相手は聞く耳を持たない。耳はあるけども、コミュニケーションが取れない。怒り狂ったブラコン全開の千冬さんでもしっかり話せば和解できると言うのに・・・結局拳骨一発は食らわされるけども。このままだと全身が氷だらけになるのも時間の問題だ、多少力づくで取り押さえるしかないか。

「当たり前さいよ!!」

「誰が好きこのんで弾に当たるか!」

それにしてもどうやって捕まえようか、あの高速の弾幕をどうにか掻い潜って彼女に近づかなければいけないのだが・・・あ、使うのは少々気が引けるが・・・仕方ない。怪我したくないし、怪我させるわけにもいけない。いくら氷塊を大量に撃ち放って来ても、相手は小さな女の子なのだから。子供を傷つけるのは流石になあ。

「ああもう!!」

「なんなんだよ!!」

付近には立体機動装置のアンカーを打ち込んで使えそうな木も見当たらないし、機動隊が使うようなシールドも格納していないから使えない。まあ、ゴム弾でもあれば良かったんだが・・・生憎日常

で相手するのは実銃を使うお兄さんとお姉さんばかり。いつだかは重機の事故に見せかけて殺そうとしてきたこともある、俺って何者よ。なんかドイツ語が良く聞けたけどもさ。

「・・・お？」

しかし、避け始めてから結構経ってから気づいたのだが。この氷の弾幕には規則性があるみたいだ、右目を使わずともある程度の軌道は読めてきた。接近するのは無理だが、弾速がそれなりにあるので避けるので精一杯ってところ。

「（このまま弾切れとか無いものか、当たらないから奴さんも焦ってきてるみたいだし）」

できればお互い怪我もなく穏便に解決したい、既にそれは無理っぽいけども。弾幕が広がっている時点で・・・なんであるときはISに勝てたんだか。まあ、学園で破損したメーカー修理中のを強奪したのみたいだったらしいが。それでも、IS倒しておいて目の前の少女に苦戦してるってなによ。

「こうなったら当てて見せるわ、凍符『パーフェクトフリーズ』！」

「なあっ！？仕方ない！」

彼女が叫んだ途端、色とりどりの氷弾が俺に向かって先ほどまでとは比べ物にならないくらいに飛んでくる。さっきのよりも弾速が上だな、色々諦めてデフォルト装備だった眼鏡を耑るように外して死リ神の瞳を起動させる。同時に鞭型のワイヤーソーを召還して迫り来る氷塊を音速の一閃で弾き始めた。

「せいやあ!!」

「ええっ!？」

なんか・・・うん、結構これ脆いんだな、硬いけどワイヤーソーを振り回して叩きつけるだけで簡単に砕ける。割れた破片がナイフみたいに鋭くて油断できないけども、刺さったらおそらくその部分は凍りつくだろう。割れたところから異常なまでの冷気が噴出している。

「つて、やあ!!」

しかし、叩き落せるからと言って安心はできない。その氷塊が白くなつて縦横無尽に動き回ってくるのだからよそ見をしようものならすぐに直撃してしまう。ワイヤーソーもある程度休ませないと冷え切つて干切れてしまう可能性もある。持久戦もこのままでは逆転されてしまいかねない。

どうにか持ちこたえるも、そろそろワイヤーが撓りにくくなつてきた。限界が近くなつてきた証拠でもある、飛来する氷弾が最初のものに戻ったが。結局近づけずにいる、滅茶苦茶に撃つてくるおかげで弾幕が自然に激しくなっているのだ。例えるならば、子供が両腕をぐるぐると振り回してきたような状況。迫るのが可愛らしい手ではなく氷の弾なのだから甘んじて受けることなどできるわけもない。というかしたくない。

「そろそろ止めに「するわけないでしょうが!」ですよね」

そういえば、非殺傷のつて言えば候補があつた。確か、結構前にテスト格納つてことでゴムボール（近所の百均にて）を入れていたような記憶がある。確かそのままになってたはずだから今も格納されたまま眠つてるような気がする・・・多分。

「おっしや、そおい!!」

「へ、ぶへっ!・・・」

まさに神速とも言えるほどの速さでそれをイメージし、投げつける。俺の手から離れたそれは放物線を描いて少女の顔に金属光沢を見せ付けながら・・・顔に直撃した。ガッン!!とか聞こえたけど、なんか手が軽く冷えてるし、投げたのがゴムボールではないことは確かではある。

「やべ」

「ふにや~~~~・・・」

そのままふらふらとよろめきながら少女は地面へと倒れこんだ、まづつた、投げたのは球体ではあるが全然の別物であつた。何を投げつけてしまったのかと良く見てみると、見慣れた銃器的特徴的な金属光沢。・・・ガバメントアーミーカスタム用の50連ドラムマガジンだった、通称「かたつむり」。一番投げてはいけなもののような気がする、主に重量的な問題で。ぶつかって気絶しただけであざなどは見受けられないのがせめてもの救いである。

「キュー・・・」

「はあ・・・」

ゴムボールだからと全力で投げたのが原因だろうか、ものの見事に

気絶してのびていらっしやった。それはそれとしてどうするか、目を覚ますのを待っていると日が沈んでしまいそうだし。かといってここに置いていくわけにもいかない。

「どうしたものか……」

あてもなく彷徨うわけにもいかなかったが、だからと言って立ち止まるわけにもいけないという今現在。唯一の頼みの綱は気を失っていてどうしようもなく、八方塞だった。誰か助けてくれないかな、主にこの状況から。どうしようもなく、近くの岩に腰掛ける。はあ。

「なら、助けてあげましょうか？」

「はい？」

いま、どこからか声が聞こえたような。辺りを見回すも、いるのは俺と気絶して倒れたままの女の子だけ。俺は幽霊とかお化けとか苦手なんだが、それこそ縁日で開かれるお化け屋敷に入れないほどに空耳にしてははつきり聞こえたし……イヤアアアアア！！

「てえい！！」

嫌な予感がした俺は即刻、その場からイグニッションブースト瞬時加速もかくやというほどの速度で飛び跳ねて離れた場所に着地した。ここに来る前に飲み込まれた落とし穴に似た空気を感じたからである。

「まあ、上手くいくとは思ってないけどさあ！！」

着地した場所に、待ってましたとばかりに例の落とし穴がぽつかりと口を開けて待っていたのだから。

「……ここは……？」

気がついたころには、先ほどまでいた広大な草原ではなく、見知らぬ家の中にいた。どちらかと言うと伝統的な和風の住宅、掛け軸や生け花が飾りつけられていることから客間であることはすぐに理解できた。柱が綺麗に磨かれていて、ほこり一つ無いことから長年大切にされている歴史有る住居であることは理解に容易い。まさにTHE和室のようである、招かれた記憶が無いことは確実であるのだが。

「あら、気づいたみたいね」

背後からさつき聞こえた声がする、まあ、部屋の中をきよるきよるで見回していても結局は俺も人間である。首は180度回らないし、後ろを見ることもできない。ひとまず、振り返ることにした。

「ようこそ、幻想郷へ……とでも言っておきましょうか」

そこには、セシリア並みの長さの金髪ストレートな女性が立っていた。どことなく不思議な印象を受ける気がする、ひとまず初対面であることは確かである。というか、金髪の知り合いなんて数えるくらいしか居ないよ。米軍のISパイロットとオルコット家くらいだよ！

「如月音羽と言います、あの、どちらさまでしょうか？」

「あら、どうも。私は八雲紫、境界を操る妖怪よ」

「……妖怪？溶解……熔解……用かい？ＹＯかい？まさか、そんな空想上のものが居る分けないジャマイカ、しかもこんな美人な人が？妖怪ってあの某ゲゲの人に出てくるみたいなのじゃないのか？」「このロリコンどもめ！」のあれとかさ。なんにも俺の髪はアンテナ立たないよ？

「妖怪……ですか？」

「ええ、そうよ」

につこりと笑うその顔はとてもふつくしい、うん。でも……どう見ても妖怪なんてのは見えない、というか今の科学万歳な世の中で生きてきた身としてははにかにも信じがたい。まあ、さっきまでの出来事を思い返してみればそれを認めるしか無いのだが。

第一、実際にそうだとしても俺の目の前にわざわざ現れたのだろうか。それに……幻想郷ってなんだ？東京と京都の仲間か？日本国内にそんな地名なんて無かったと思うが。わけがわからないよ。

「まだ、今の状況に混乱してるみたいね。……無理も無いけど」

そりゃあ、そうだ。さっきまでの出来事を振り返れば冷静にいられるわけがない、冷静にしたら見る奴がいたら見てみたいわ。

「あなたの身に一体何が起こったか、説明したほうが良いかしら？」

「是非とも、k w s k」

「分かったわ、ひとまず座りなさい」

「はい」

説明中

「……つまりここは俺が居た世界とは別の世界と……」
「そういうこと」

ここは幻想郷という場所で、俺は彼女(?)、八雲紫の手によってこの世界に連れて来られた……ふん。まあ、一応状況と経緯については理解。納得はしてないがな。妖怪や能力の存在を認めればこれまでの出来事が説明できてしまう……から、この話を認めるほかない。

「分かってくれたかしら？」
「まあ、なんとか。……ただ」
「ただ？」

俺は、今までの話を聞いてきて一番気になっていた疑問をぶつけた。

「紫さんが俺を誘く……ここに連れてきたってのは分かったんですけど。他の人じゃダメだったんですか？」

「ついなんと言ったら……？」

「泣けるな、確実に。もちろんそんな理由では無いですよね？」

「ええ、一応理由があるのよ、一応」

え、一応ってなに、一応って。一気に心配になったんですけど、ひとまずどうしようもない事ではないだろうと俺は耳を傾けた。

51・番外編 IF その2「冷静になろう」(後書き)

どうでも良い作品情報

番外編では原作とは矛盾、キャラ崩壊アリ

52・失敗作という名・・・（前書き）

音羽のターン・・・ですね

52・失敗作という名・・・

「はあはあ・・・やるじゃないか」

「うふふ、二次の世界とはいえ最高です！」

だめだこいつ、早くなんとかしないと。え、今どうしてるって？お互いに近接ブレード出して鏢迫り合ってますが何か、河西さんマジ強い。突けば刃の横面を叩いて切っ先逸らすし、ショットガンで牽制しようとするばナイフで破壊するし。本当に一般生徒か？って思うほど、さつきから「神様ありがたいです」とか「転生とか俺得ww」とか言ってるのが玉に傷だが。中二病でもこじらせてるんだろうか。

「私のチートボディが火を噴くZE！」

「ホントにチートだよ、その技量は！」

大口径マシンガン「ガードブレイカー」を鼻歌交じりに反動無視してぶっ放すくらいには、あれって反動が凄すぎて反動相殺用のスタライザーが必要って聞いたことがあるんだが。デフォルトの打鉄で扱えるって何者だよ、普通の生徒が分からないまま使って転んだって聞くぞ？

「うおらあああー!!」

「きゃあああー!!」

しかし、雑な照準だったために高速機動状態のF型に追いつけるわけもなく。その多量の弾丸は軌跡を描いてアリーナの壁に穴を穿つ、弾跡が俺の一步後ろってだけで十分凄い。おそらく、油断した隙に本命をドカンとかます魂胆なんだろう。狙っているような笑みを浮

かべながら今も引き金を引いていた。

「まだまだ楽しみたいが、決着付けようぜ！」

「ええ、行きますよー！」

お互いに一気に上昇し、俺は「スティール・ハーツ」を河西さんはIS用刺突エネルギーランス「白牙^{はくが}」を展開し、同時に音速を超えた加速で接近した。

「よくかわすわね、衝撃砲「龍砲」は砲身も砲弾も見えないのに」

まさに、その通りだった。砲弾が見えないのは勿論、砲弾も見ることもできない。しかも今までの攻撃からあの衝撃砲、砲身斜角に制限がないみたいだ。後ろに回っても不可視の衝撃の拳を食らわされたからわかる、射線が直線状なのがせめてもの救いだ。鈴の技量と相まってそれすら弱点と思えないほどだった。俺はなんとかできている無制限機動から三次元躍動^{クロスクリッドターン}、全方位の軸反転など基礎のすべてを高いレベルで習得して自分のものにしていった。

「（ハイパーセンサーで空間の歪みと大気の流れを探らせてるけど、撃たれてからじゃ遅い。どうすれば……）」

不可視の衝撃をすれすれで回避しながら、先手を打つためのタイミングを見計らっていた。決め手は……この手の中にある。

「っらあああああ!!」

「はあああああ!!」

音速の一閃と刺突がぶつかり合う、反対側では零落白夜の刃を光り輝かせた白式が瞬間加速で懐に入り込んでいた。なんでも、千冬さんが現役時代に雪片とともに勝ち抜いた相棒とも言える技らしい身に付けるにはとてつもない特訓が必要だとか。どんなのかって言う、あれだ。バツアレグでジャンプして目の前に!!って感じた。

「鈴、貰ったあああ!!」

「な、きゃあああ!!」

零落白夜の一閃、それが甲龍のシールドエネルギーに食らいつく。その瞬間。アリーナの中央に極大のビームが撃ち放たれた。アリーナのシールドエネルギーを易々と破ったそれは、競技中だったIS全てに警告を発した。

『警告! 未確認ISの存在を確認! 白式がロックされています!』

「未確認機だと? つくそ、教師部隊が来るまで抑えなきゃいけないか……!」

「せっかくの試合の邪魔をするなんて、無粋な真似をしてくれるね」
「ホントに」

「まったく、一夏。……どうせ逃げないわよね」

「当たり前だ、って危ねえ!」

ズガガンッ！

音兄と河西さんの支援の銃撃で奴が注意をそちらに向けた隙に鈴を抱いて回避する、煙が立ち込めたままでどんな奴かは分からないが半端無い火力を持つことだけは確実にわかった。

『皆さん、試合中止です！退避してください！』

オープンチャネルで山田先生が通信で伝えてくるが、セシリアから送られてきたメッセージによるとアリーナは緊急時のレベル4で封鎖。アリーナ内のISでは突破は不可能、突入用の入り口はハッキングされて開閉不能。事実上、アリーナ内に馬鹿みたいな火力を持った不明機と閉じ込められた。

『織斑先生、教師部隊突入までこちらで抑えます。というか抑えるしかないです』

『わかった、ただし怪我はするなよ？』

なんとか千冬さんに許可を貰い・・・いや、もらえなくてもやるしかないんだけどさ。こんな状況じゃ、

たたかう

たたかう

たたかえ

たたかうしかない

こんなんだし、逃げれないし。というか、さつきから右目が疼いて仕方が無い。眼鏡で抑制してるけどちょいやバイ、俺自身説明できないし起動すると結構怖い。（鏡で見たら実際そうだった）まあ、

眼鏡かけてて良かったかな、というかこれってフラグっぽいが大丈夫だよな。ひとまず目の前の不明機の相手をしなければ。

「聞いたな？」

「ああ、わかった」

「当たり前よ」

「ふふふ、りょくかい！」

ひとまず、例の不明機がまさに異形だった。深い灰色の体に特徴的に長い両腕、脚部の爪先より長いそれは手に砲口を覗かせていた。なにより首と捉えることができる部分が見受けられない、肩部と頭が一体化しているように見える。背が高い某ピンク色の悪魔と言えはわかりやすいだろうか、そしてISにしては珍しい『全身装甲』フルスキンだった。頭部らしき部分はセンサー機器が剥き出しであり、その異様さをこれでもかと思せ付けていた。

「一夏は上空で巡回しながらタイミング図れ、俺と愛理で射撃。鈴ちゃんもは衝撃砲で牽制。いいな！？」

『了解！』

即席の作戦の指示を出す、おそらくそうでもしなければ4機ではまともに動けないだろう。俺以外はISだからとはいえ実戦は未経験、そんなこと言う俺もISでは未経験だがな。生身と戦闘機くらいだ、そのときのことは追々話すとして。さっさとあれを片付けなければな。

「一夏、今日はお前がヒーローだ。わかったな？」
「ああ、やってやる！」

「……………ねえ」

「なんだ、鈴ちゃん。言いたいことはわかるけど」

「どうしてあれは上半身ぐんにやり曲げて避けてるのよ！おかしいじゃない！」

「そうだね、人が乗ってないみたいだよ」

そう、コックピットにいるはずの人間の体がくの字みたいに曲がって銃弾を避けたり、保護機能があっても無理なはずの急加速・急停止をさつきからやってのけやがっているのだ。体がいくら柔らかくても肋骨がありながら胸部を90度曲げられるわけないし、どこの蛸さんですか。仕方ないので気づかれない程度に右目を起動させて生体反応を探る……………。

「無人……………だと！？んなアホな！納得できるけど！」

「え、そんなことがあるわけ無いじゃない！」

「事実だ、『ありえないことこそありえない』ってことだ・俺だつて信じられないけど。聞いたなお前ら」

「ああ、全力でやれるってことだよな？」

「ぬふふ、本領発揮なのだ！」

まあ、無人なら全力全壊でできるよな。機械ならばどれだけぶち壊しても文句は言われないだろう、多分後で調べることになるだろう

けども。ひとまずは安全のために無力化、もとい停止させなければいけない。

「アンロックユニットフル
非固定部位完全ブースターモード」

外見はただの物理シールドだった対照的なそれが中央の基部から横にスライドし内部を支えるフレームが露出する、そこに光の粒子が集結し^{最速}失敗作と呼ばれる所以の大型プラズマ複合ブースターが二機一対で顕現する。ただ、最高の速さのみを求めたIS史上の幻想とも言えるべき存在。

「打鉄F型。いや、『打鉄・疾風^{ハヤテ}』か」

外見だけは打鉄の特徴でもある防衛重視のシールドに見えるが、それは相手を欺くための仮の姿。実際はプラズマ複合ブースターの膨大な重量を支えるため、ここぞの勝負時に真の姿での最速の煌きで相手を切り裂く。疾風と名づけられたのはそのためである、その異常、いや、規格外レベルの速度を扱いこなせる者は全世界でも二人しかない。その一人が、今この場にその存在を誇示している如月音羽であった。

「さて、サポートは俺に任せな。今なら行ける」

音の壁を越えた翼が、今ここに、舞い降りた。

52・失敗作という名・・・（後書き）

どうでも良い作品情報

打鉄・疾風の最高速度は第三世代機に追いつくほど、これでも第二世代です（ライ

53・決着・・・・・・・・!!（前書き）

残心って大事だよね、そんな話も含まれる

53・決着・・・・・・・・！！

「はぁぁぁぁぁ！！！」

疾風の名に恥じない音速の速さでそれを超えるスピードの一閃が無
人機の左腕を切り裂き、本体から分離させられた腕が音速の機動で
生じた衝撃波で碎かれる。通り過ぎた場所には粉々に碎け散った機
体部品だったものが散り散りになって撒き散らされていた、「打鉄・
疾風」と「ステイル・ハーツ」の二つが揃って初めて繰り出すこ
との出来る必殺の一撃である。

「愛理、鈴！今だ！」

「待つてましたー！！！」

「ナイス！」

左腕部を切り落とされた無人機が左腕部切断による姿勢制御の狂
いと衝撃波の二つの阻害により体勢を大きく崩していた、更にそこ
へ愛理による炸裂チャフ複合グレネード弾の雨あられフルチャージ
された衝撃砲による四肢の内部機器へのダメージ。硬い装甲を持つ
機体に対抗するための実戦向けの有効的な攻撃方法だ。

「H A H A H A H A H A、こうもなつては無人機と言えど見る影も
ありませんNE！」

「結局、4対1じゃ勝ち目は無いのよ！」

「やり過ぎでは無いか？というか、一夏は何処・・・」

「・・・・・・・・空気ですわね」

さきほどまでの真剣な空気はどこへやら、千冬も少々顔を引きつらせながらモニターを見ていた。

「凄いですね如月君、疾風を使いこなせるなんて」

「まさか失敗作をここまでとはな、一夏が兄と呼ぶだけはある」

「・・・（ニヤリ）あれ、一夏って言いましたね？うふふはい、たゞいゝです！」

「・・・・・・・・」

みしみしと音を立てながら、山田先生が鬼のアイアンクローを見事に決められていた。人体から聞こえてはいけなはずの音が聞こえているが、それを見てみぬふりをする二人の少女は全力でスルーしていた。

「このままですと怪我無く倒せそうですわね」

「ああ」

「量産機だからって、弱いわけじゃないもんねー！」

「白牙」を展開して超高速で乱舞のように激しく刺突を繰り返す、

愛理さん。エネルギーカートリッジが採用され、「量産機の汎用性強化」という一時期の計画で開発された武装だである。機能特化のF型などと同じ思想であるが、「機体の一部変更による対応」と「主武装変更による多彩な対応」という二種類の開発思想である。実際に現行されているのは残念ながら後者である。

「織斑君、今です!!」

「おっしやあああああ!! 待つてましたあああああ!!!!」

上空で待機していた一夏が瞬時加速と重力による多重の加速で急降下する、無人機などの弱点。「不意打ちに対応できない」、思考を巡らせることができない無人機などはこれにめっぽう弱い。人間ならば、「多角的な思考」が可能であるが、無人機などの機械は「理解している状況から最善の方法を選択」するだけ、結局は感知しているものだけでしか世界を見ることができないのだ。そこへ長時間認知されていなかった存在がボロボロのそれに向かつて必殺の一撃を放つとどうなるか？

「でやあああ!!」

眩いほどに光り輝く零落白夜の光刃が無人機のシールドエネルギーを貪欲に、貪るように喰らい尽くした。シールドエネルギーが消滅した無人機は、その巨躯の動きを止め、そのまま重力に引かれて落下していった。

「お、終わったあ・・・」

「ふう、終わったわね。戻るわよ一夏」

「おう」

二人がそう言いながらピットへと戻っていかうとしている時、なぜ

か違和感を感じた俺は機能停止した無人機を見つめていた。愛理さんもさきほどまでの緩い感じではなく鋭い視線でそれを見つめていた、こちらが驚くほどの威圧感がある。なにか思うところがあるのだろうか？声をかけようとした途端、突然警告メッセージがポップアップする。

『警告！再起動を確認！！！』

見れば、もう動けるはずのない無人機が残された右腕の砲口をピットに着地した一夏に向けていた。表示される熱量が全開出力であることを否が応でも伝えてくる、ここからなら・・・間に合う！！残されたエネルギーを使って、限界ギリギリの土壇場の瞬間加速で無人機へと飛んだ。こちらを振り返った一夏たちの顔が見えた気がしたが、すぐに視界が真っ白に染まって見えなくなった。ただ、切り裂いた感覚は腕に伝わってきたのがせめてもの僥倖か。

「・・・・・・・・？っ痛ううっ・・・・・・・・ああ、生きてるのか」

身体に鈍い痛みを感じ、それを切欠に意識が覚醒する。節々からの痛覚を堪えて上半身を起き上がらせる、それに応じて特徴的な長い黒髪が放射状に広がった。どうやら髪留めが外れてしまったのか外されたのかは不明だが、身に付けられていないことは確かだった。

「起きたか」

「まあ、おかげさまで。ご心配おかけしました」

近くの柱に寄りかかっていた千冬さんが声をかけてきた、尤もいつもよりも厳しい表情を浮かべていらっしやるけども。まあ、仮定ではあるがあれだけの出力のビームの渦の中に装甲の薄い疾風で突っ込んで行っただから当たり前か。良く怪我してない俺。

「結論から言おう、お前が身体への負荷を考えずに突撃して放った攻撃により完全停止。怪我人はお前だけだった、まあ、怪我と言っても肋骨の二三本に少しヒビが入った程度だ。1週間も安静にしていれば治るだろう、お前ならばな」

「まあ、そうですね。やはりあれは無人機で？」

「お前が見抜いたのだから、分かっているのではないか？」

「そりゃあ、そうですね。一応、ね」

誰だってそうじゃないか、確信的な情報を自分で持っていたとしても人に確認したくなるってことは。まあ、俺以外に怪我人いなかったってだけでも朗報か。

「だが、無理はするな。誰かを救ってもお前がどうにかなってはいかん、泣く者もいるだろう」

「気をつけてはいるんですけどね、それが中々に難しいんですよ。まあ、善処します」

「なら、良い。……こそそしないで入ってきたらどうだ？」

千冬さんが保健室の入り口のドアを開け、顔を出して廊下にいたであろう人物に声をかける。

「では、私は戻る。調子が整ったら自室へ戻れ」

「わかりました、まあ当分戻れなさそうだけでも」

千冬さんと入れ替わりに入ってきたのはセシリア・一夏・鈴ちゃん・馬鹿第・河西さん、あと天災。保健室がまるでゲームセンターに入った瞬間のように騒がしくなる、それを見ながら俺は後ろ手に治療用ナノマシンの注射を腰にする。機能が停止すると体内で分解されて排出されるという身体に優しいタイプだ、ちなみにライセンス企業製。今使ったのは骨折治療用の物である、便利だねこれ。ちなみに使用済みの注射器はすぐに格納した。

「音羽、無事でしたの!？」

「音兄、大丈夫か？大丈夫っぽいけど」

「ダーリン、怪我は無い!？」

「少しは怪我人の前なのだから静かにしたらどうだ」

「音羽っちモテモテだね」

一夏は俺を何だと思ってるんだ、美月の夫になった覚えは無いし、愛理さんは関係ないこと言ってるし。まともなのはセシリアと第だけか、ひとまず全快したら一夏と肉体言語でちよっとお話ししよう。一度シバく必要がある。

「千冬さんの話だと肋骨にちょっとしたヒビが入ってて、1週間は安静だつてさ。以上」

「それって、あの打鉄の副作用か？」

「おう、無理な加速の結果らしい。結果オーライだけでも」

「まったく、一夏君は変わってないわね。曲がりなりにも剣道やってたんでしょ？」

「面目ない・・・」

「私がまた鍛えてやる、覚悟しろ一夏」

「つえええ！？またあれかよ・・・」

「ISだったらアタシも手伝うわよ？」

「む、二組のおまえは黙っている！！」

「なんですって！！」

「まあまあ、お二人とも落ち着いてよ」

騒がしくなった4人を一瞥し、二人へと視線を移す。

「あゝ、その。スマン・・・」

「音羽も変わってないわね、ホントに。少しは自分のことも考えなさい？」

「まったくですわ、人を守るなどと言いますが、自分のことも考えてくださいな」

「・・・はい」

女子二人に叱られるというなんとも情けない状況になっていた、あゝ・・・。ホントに情けない、この癖も考え物だな、自覚してはいるが自重したことは一度も無い。この二人に心配かけてしまうというのも申し訳ない気分になってしまふ、はあ。

「まあ、後先考えずに人のことを思って動けるのは良い事ですし。

その・・・かつこよかったですわ」

「セシリアちゃん、そういうのははっきり言わないとダメよ。ライバルにアドバイスするのもあれけども」

なんか、後が良く聞こえなかったが。ひとまず俺は保健室にいる全員を見回して、笑みを浮かべたのであった。

追記・どうやら鈴ちゃんと一夏は仲直りしたみたいだった、まあ、めでたしめでたし・・・？なんかまた何かひと悶着ありそんな予感がするけども。

53・決着・・・・・・・・!!（後書き）

どうでも良い作品情報

河西さんは・・・・モブな転生者っぽい存在・・・・のはず。まあ、気が向けばちよくちよく出てくる、フラグは立たないけども友人くらい？

54・アメリカンドリームを実現したっばいよ(前書き)

さあ、舞台は地球上のどこかです。なんともgdyってしまった

54・アメリカンドリームを実現したっばいよ

「どうもお久しぶりですな、如月音羽博士」

「いや、かしこまらなくても良いですよ。どうせただの学生ですから」

え、せつかくの休日なのに家に帰らないでどこに居るって？米軍の秘匿基地の一つ、「一地図に無い基地<イレイズド>」だよ。場所は言えない、いくら国防省に顔が効くからってそんなことしたら消されそうになるからな。ちなみにこの開発部門がナノマシン技術のライセンスを持つてる、その関係で「世界で二人の男性IS操縦者の一人」ではなく「一人のナノマシン技術開発者」の扱いを受けている。アメリカにすればIS操縦者ということよりそちらのほうが重要なのだ、たかが数機の世界最強の兵器より。今声をかけてきたのはイレイズドの司令官、はつきり言って嫌いな人間の部類である。さつさと別れて企業の看板が立て掛けられた真っ白な建物に歩き始める。

少し歩いていくとパイプ椅子に座った若い女性が声を上げる、久しぶりの対面である。

「あら、博士が来たのね。みんな、集合ー！！」
「博士って……」

ちなみに今、目の前で後ろにある大きな工場へと声を張り上げて叫んだのはこの主任を務めている「エルハイム・ネーブ」さん。彼女はなんとここに来てから2年で主任の地位へと実力で上り詰めた努力の天才である。ちなみに自称機械が恋人の23歳、眼鏡のレンズにナノマシンを使用して双眼鏡にしてしまうなどユニークなものを作ってしまう人だ、特徴的なブロンドの髪をポニーテールに纏めてい、体つきは一部を除いて所謂モデル体型である、悩みは鈴ちゃんと同じらしい。

「お、坊主博士が来たのか。久しぶりだな！」

「あら、カツコよくなったわね〜！」

「ははは、元気そうじゃねえか」

「どうもです、面白いものができたとかって聞いてですね！」

そろそろと賑やかな開発研究部の面々が作業をしていた手を止めてガラス張りの部屋から出てくる、ここ「ミクロドクター」の開発部門には年配の方から若者まで幅広い年齢層に加え様々な人種の人が勤務している。ナノマシンを含めその応用技術を使った医薬品から医療器具まで俺が提供しているナノマシン技術のライセンスをアメリカ国内で唯一持った世界シェアナンバーワンの企業である。その開発室には、「勉強ができる人」ではなく「科学と化学を使って医療を支えたい」人のみが在籍できる。なぜここにその開発研究室があるのかというと、ほぼ国家機密レベルである情報を扱う場所であるために適切な場所が選ばれただけ・・・である。

研究室の応接用のソファアに座りながら、提出された計画案を吟味していた。それを喉をごくりと鳴らしながら見つめる総勢8人の大

人、その視線の先には至って普通・・・には見えない黒のビジネススーツを着込んだ高校生。非情にシニールであるのは誰の目にも明らかであるが、それに慣れてしまった俺も大概か。

「おお、先天性部位欠損の患者の欠損部位の生成か。ふむ、神経組織の代替も必要だね」

「生体タイプを使った癌患者の切除部位の代替か・・・なるほど、患者の細胞への自動最適化があればもつと良いよ」

「視覚障害者用の人工視神経と眼球・・・良いアイデアだけど、どうせならW85で表面を覆ったほうが見た目も良いよ」

「ウイルス用の撃退システム・・・これはもう少し確実性が必要だよ」

「骨髄の正常化か、ファイリングしてからの生成にしたほうが負担も少ないよ？」

出るわ、出るわの大盛況(?) 数年前までの医療関係者が見たら驚愕のアイデアの数々だった、現時点では世界各国の大病院や医学関連施設での試験が必要だが。実用化すればこれまでで「治療にかかる日数の短縮」や「再生医療の停滞」、「新薬開発」の三つが爆発的に進歩する。

「よし、じゃあメアリーとジェシーはこれの改良、マックスとジムは手伝ってあげて。ヴェルと主任はこの二つを学会と政府に提出、これはそのまま通しても大丈夫だから」

「わかったぜ、ほらちゃちゃつと始めるぜ!」

「おっけ」

「ほいほい」

「俺の腕の見せ所だな!」

「書類はまとめておいてくださいよ?」

「おお、博士直々のオーケーが出たな。おっしや！」
「ふふふ、流石ね如月博士」

指示を出すとそれぞれが慌しくパソコンを起動させたり書類を出したり、電話をかける者やペンを走らせる者も。かくいう俺もノートパソコンを展開して採用時の工場用の機械部品の設計図をペンタブとCADを併用して描き始める、ほぼここが軌道に乗り始めたところからのいつもの風景である。確か中二の始めか、それまでは自宅からテレビ電話で指示してた。たまにこっちに来ることもあったけど。

「俺は滅多に来れないんだから、そこらへん考えるよー！」
『はい』

その後は、キーボードの叩かれる音とペンが走る音だけが研究室に響くのだった。

「おっし、お疲れ。休憩入って良いよー！博士もそろそろじゃないかい？」

「おお、そうだな。って、だから博士って呼ぶな。名前で呼べって言うてるのに・・・」

「じゃあ、音羽っちで！」

「おお、良いんじゃない？」

「あらあら、可愛らしくて良いわね」

「ははは、音羽っち（笑）」

「嬉しくねえ〜！」

散々呼び名で弄られてしまった、時計を見ると既に帰国しなければいけない時間になっていた。当初の予定の時点では顔見せが目的だったので当たり前だが、久しぶりに会った皆が元氣そうで良かった。ISがどうこうならなければ卒業後にここに正式に就職だったのに・・・おのれISめ。

「そこなの！？」

「まあ、ね。じゃあネーブ主任、後は頼みますね」

「ふふん、任せなさい！」

「次来る時には美味しいケーキでも持ってきます、それでは失礼します」

ガラスのドアを開けて開発研究室を出る、確か帰りはVIP専用機だってさ。まあ、今はスーツだし別に大丈夫か。VIP用のゲート通るから騒がれないし、そういう場所ではそれなりの扱いされるし。総資産が中小企業を余裕で買収できるレベルになってたとかは言えない、そーいや俺の追いかけてる組織ってドイツのらしいよ？

少年帰国中

「うああ~~~~！！帰ってきた・・・」

結局日本に着いたのは日曜日午前10時、丸一日結局経った。あるええ？まあ、夜中じゃなかったからまだ良いか。腹も減ったし、どこか近くのレストランでも寄るかな？

空腹に勝てず、俺は空港内にある高級（自称）レストランに入ったのだった。懐かしい顔に出会ったのだが、それはまた別のときにも。

54・アメリカンドリームを実現したっばいよ（後書き）

どうしても良い作品情報

音羽のイメージ落書きがみてみんな・・・後悔するなよ!!（某王子風）

55・前触れ（前書き）

なぜオリジナル展開にするとgoodってしまっのか

55・前触れ

「あ〜つと、今月分つと」

現在、午後3時。レストランで懐かしい人物と談笑しながら食事を終えた俺は自宅に荷物を置いて近所の銀行に来ていた、今月分の生活費を口座預金から引き落とすためである。例えるならば給料日に銀行で月分の給料を下ろしに来たつとところ、いくらライセンス料が振り込まれるとは言え引き落とさなくては使えない。電子マネーなんてあるがデータが吹き飛んだことがあるから却下、量子化して格納すれば良い話だし。

「〜」

鼻歌を響かせながらタッチパネルになっているATMの画面を操作する、え〜つと当分はこのくらいで良いか。ただでさえ半端無い金額が納められているのだが、使い切れない量なのに光熱費がかからないIS学園のために余計使うことがない。某東なMAXみたいにリアルでハンカチに使えるぞこれ、やらないけど。

「つと、こんなところか」

必要な金額（高校生には似つかわしくない金額だが・・・）をmy財布に仕舞いこみ、銀行を出す。自動ドアが開いた瞬間にこちらへ流れ込む外気の風が心地良い。さて、用事も特に無いしIS学園に帰るかな・・・家の中はmk?がやってくれているだろうし。警備はガチ月光がステルスで待機してるから完璧だし。民間人の家とは思えないくらい万全だからなあ、ISでも使わない限り無理だなHAAHAA。

そんなことを考えながら俺はIS学園行きのモノレールに乗り込んだのだった。

モノレール移動中

ガタンゴトンと規則的な音が車体を通じて耳に響く、ウォークマンで「STRAIGHT JET」という最近人気上昇中らしいアーティスト（声優さんもやってるらしい）の新曲らしい。なんでかどや顔で洋上を飛行する一夏が思い浮かんだんだが、なんでだ？まあ、いいや疾風が修理終わったら一夏を特訓という名目でボコろう。なんでかそうしなきゃいけない気がする。

「そついや、機体マニュアルが届いたんだっけか……めんどいなオイ」

「変わってないね、音つちは」

「どうせ俺の性格は変わらないですよ……あ？」

思いもかけず懐かしい声が聞こえたものだから、当時のままの態度で受け答えをしてしまった。声の聞こえた座席の反対側を見ると、沈みかけでの夕日のように燃えるような朱色をしたショートボブの少女がこちらを見てにこにこ笑っていた。着ている服が見たことのない黒の制服ではあるが見間違うことはない、中学転校時に俺に対決を申し込み物の見事に惨敗したジャクリーヌ・ウェルキンその人であった。

「……久しぶりだな、ジャック。ドイツに帰ったんじゃないかったかお前？」

「いや、本国で仕事を押し付けられてね」

そういえば、そんなメールが来てた記憶がある。なんでもドイツのIS用特殊部隊に配属されたとか、ありがとウサギ隊だっけか？いまいちすっかり覚えてないが、まあウサギであることは確かだ。ということはこの制服もその制服か、黒がメインつてのはまた汚れが目立たなくて良いな。

「仕事？ドイツ軍がなんでそれで日本に来るんだよ」

「機密だからまだ口外できないんだよね、まあISに関したことではあるよ」

「お前も大変だな・・・まあ、頑張れ」

「うん、そういえばたっちゃん元気かい？」

「ああ、毎日俺に嫌がらせで抱き着いてくるくらいにはな。俺だって年頃の男なんだからよしてほしいよ」

「あはは、やっぱ鈍感だねえ音っちは」

「あのなあ・・・、もし、もしだぞ？あいつが俺のことそういう方向で思ってたとしても、やり方があるだろう・・・？」

そうだ、仮にあいつがそういう方向でそういう行動を起こしていたとしても。俺が襲うわけが無いことは理解しているはずだからな、いくらナニが溜まっていようともしういう下種なことは絶対にしない。そういうのは男として最低だからな、そこらのどうしようもない輩と同じになるわけにはいかない。

「わかってないね、女心は」

「俺は男なんだから理解できるわけないだろう、てか理解できたら苦労しないっての」

いちいち「女心わかってないわね」by鈴ちゃんとか、「はあ、

戦術と経営の前に男としてry byセシリアとかつてなるんだよ。流石にどこぞのマンティスさんみたいにリーディングできないからどうしようも無いし。一夏に言われたときは凄いショックだったけど、上手いと思うよ？「女心は秋の空」とか、あゝあ。

「まあね、でも少しは努力しなきゃ」

「してるつもりなんだがなあ、それが中々上手くないんだよ・・・」

わからないからって聞くとはたかれるし、呆れられるし。じゃあどうしろと言っのさ、理不尽じゃね？そこは一夏も共感していた、まことに残念である。

「はあ、まあなんとかやってるよ俺は」

「そうみたいだね、あ、私の上官がお世話になるから」

「ほお、それは気になるな。強いんだろ？」

「うん、まあ、それだけ・・・じゃあ、また明日ね」

停車したモノレールから、ジャックがひょいっと飛び降りるように降車する。身のこなしは昔よりいくらか引き締まっていた、もしかしたら油断すると負けるかも、と思わせる動きだった。・・・え、また明日？どういうことだ、おい！？どうしようもなく、ジャックを見るが時既に遅し。モノレールは走り出してしまっていた、ちくせう。

「・・・まさか、転校なわけないよな・・・？」

まあ、ISに関係することって言ったらそれくらいしか思いつかないわけですが・・・mjk

55・前触れ（後書き）

どうでも良い作品情報

ラウラには一種のフラグ建築予定

56・三人目だつてさ（前書き）

短いです、すみません

56・三人目だつてさ

とある月曜日の朝、と言つても一晩明けたただけだが・・・ジャツクのことを話したら美月が笑つていた、おそらくいつものように「サプライズって良いわよね」で言わなかったただけだろう。まあ、困りはしないがな。

「ふわあゝ、あー眠い」

あれこれジャツクのおかげでナニ（と書いて性欲）が鎌首をもたげてしまったのだ、それを知つてか知らずか美月はいつもどおりに抱きついてくるし。そのおかげでまともに眠れなかった、俺の貴重な睡眠時間を返せ！と言えるほどの元気は無かったよ。ただでさえ飛行機での移動中は揺れた状況だから寝れるわけないし、現時点では2時間しか寝てないぞ俺。漫画家目指せるんじゃないかこれは、なる気はさらさら無いけども。

「うぬ・・・zzzz」

教室に入り、ぼやゝとした状態で自分の席。窓側最後尾に座る、のどかな陽気に誘われてついうつかり眠ってしまった・・・のだろう。仮定的なのは途中から記憶が無いからである、く、寝落ちかや・

・zzzz

「ルル・デュノアです、こちらに僕と同じ境遇の人が」

何時の間にやら寝てしまっていたようだ、奇跡的に千冬さんにはバレていなかったようだが……。まあ良しとしよう。で、転校生だつて？ ほう、可愛い女の子だなセシリアと同じ金髪だが短めにしてるのか似合っているが……。どうしてズボンなんだ、スカートじゃないのか？ そりゃあ制服は改造オーケーだし個人によつてほぼ別物みたいになってるけども、女子がズボンか。ミリアさんを思い出すな、あの人いつも「スカートなんてあんなの寒いじゃないの！」つて言つてズボンだったからなあ。

「居ると聞いて本国より転入を」

あれで男……。だと！？ 言われてみれば確かにどこか大人しそうな少年に見えなくもないか、俗に言う美少年というやつなんだろう。いや、ジャックが言っていた男の娘というものだったか？ まあ、今はいいか、男二人だけつてのは一夏も俺もきつかったし嬉しい限りだ。それに男の操縦者つてのも二人居たんだからもう一人出てきてもなにもおかしいところは無い、「ありえないということはあるえない」正にその通りだな。つと、耳を塞がなければいけないな、あ、セシリアもニコニコしながら耳に手を当ててるな。一夏は

『キャアアーーーーー！！！！』

遅かった、後方からのバインドボイス（超）をまともに受けて目を回してる。お前のことは多分2分くらいは忘れないぞ！（短けえよ！）「そりやすまなかった、ナイスツッコミだ。と、あと二人いるのk……………」

「男子、三人目の男子よ！」

「しかも守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~!!」

おおげさだな、いや、箱入り娘みたいな状況で長い間過ごしてればこういうものなのか？経験が無いから良くわからないが、まあ、ひとまず最後の奴はネタが古いと思うんだ。うん。ネタは鮮度が命って黛がいつだかどや顔で豪語していた、ネタ違いだと思うが間違っではないと思う。

「で、あと二人は・・・ドイツだろうな。こっち見てニヤニヤしやがって」

見知らぬ銀髪の眼帯少女と知らないわけがない昨日ぶりの朱髪の少女、同じクラスってのは各国の思惑が非情に感じられるな。・・・ジャックが付けてる眼帯がソリッドアイに見えるのは気のせいだろう、うん。世の中気にしたらいけないこともあるんだよ。

「あー、騒ぐな。まだ終わってない」

その瞬間、さきほどまでの喧騒が嘘だったかのようにクラス内が静まり返る。ここ最近見慣れた「リアル鶴の一声」である、自己紹介をした少年が少し狼狽してしまっているのをジャックが落ち着かせていた。気が利くというところはやはり変わっていないな、できれば前もって知らせるとかに気を利かせてほしかったが。

「ジャクリーヌ・ウェルキンです、ドイツから来ました。国の都合で年上なのに一年生からですが、気にせずに話しかけてくださいね！」

そこで俺にウインクをしてきたことによりクラスが再び沸いたのは
言っまでもなかった。

56・三人目だつてさ（後書き）

どうでも良い作品情報

ジャックの眼帯はソリッドアイのデザイン

57・一般人と俺とルーキー（前書き）

2巻が終わるころには驚きの展開を予定しています

57・一般人と俺とルーキー

「あと、並木野のみんなはお久しぶり〜！音っちの写真は私がバッチリ撮るからね〜」

おい、待て。

「流石ジャックさん、わかつてる〜！」

「向こうで随分と鍛錬されたんですね！」

「ジャックお姉さま〜！素敵〜！！」

倍率が一万越えてるのに一中学から三人つてのは凄いなよな、今はそこに感心してる暇や余裕が俺には無いが・・・中学時には撒き菱用の写真をジャックがちゃっかり撮影していたからなあ。その一部が高値で取引されているとか聞いたときはそりゃあビビったがな。俺ってそこらの雑誌モデルみたいな身体はしてないぞ？鍛えてはいるが見た目には細身でもやしっぱいし、どこに馬鹿みたいな身体能力があるのか不思議でならない。ムキムキのゴリラみたいなのはイヤだな。

「まだ、終わってませんから。皆さんお静かに！」

しかし、千冬さんのときのようににはならない。山田先生、頑張ってください、俺は応援しかできませんが。今ここで何か言おうものならば、息を荒くしてこちらを見つめる視線が3から増えるだけだ。って、ああっ！いつだかの例の写真を回してやがる・・・やはりあの逃げ方は失敗だったのか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ、山田先生がうつむいてぶる震えてる。流石にこれは助け舟が必要だよな、見てるこっちも悲しくなってきた。しかしそれを気にせず騒がしく会話する生徒のみなさん、やめたげてくれ。もう山田先生が不憫すぎるし、教師スルーは良くないぞ、しかも高校生が。話に花を咲かせるのは良い事だが生憎今はホームルームの時間である。

「お前ら、静かにしろって聞こえなかったんか？ああ！？」

え？

「返事は！ナメてんじゃねえぞ小娘共！教師の言葉は聞け、良いな！」

え、え〜っと。眼鏡を外し、ギロリという擬音が似合うほどに睨みつけるような目でクラス全体を一瞥する、山田先生。いつものだぼつとしたサイズの合わない服が今は風になびく特攻服に見えるほどだった、普段の優しく真面目で頑張り屋さんな面影は無く、そこにはレディースの総長の姿があった。

『はい！』

「（。。。）」

クラスの騒いでいた女子は勿論のこと、あの千冬さんでさえ傍目には分らないがぼかんとしていた。これが山田先生の素だというのか、あのほわ〜とした感じからは想像できない変わりぶりだった。一夏に至っては固まっていることからその衝撃の大きさが良くわかる、最後の転校生は軽く冷や汗を流しているように見える。

「スマンな、この空気が悪いが自己紹介してくれ」

山田先生がそのままの状態で「The 軍人」という印象を受ける長い輝くような銀髪の少女に話しかける、その左目は機械的な眼帯に隠されて見えないが、深紅の右目からは冷たいような空気が放出されているように思える。同じような眼帯を身に着けているジャックとは印象が魔逆である。どう考えても仲良くなるには大変そうだな、流石にこういう子に一夏はフラグ立てないだろ。多分。

そんなことを考えていると、その少女がおもむろに口を開いた。

「ラウラ・ボーデウィツヒだ」

「……………終わりか？」

「はい」

いつもの山田先生ならば「え、それだけですか？」とか言っていそうなのだが、どうやらあの状態では違うらしい。どうしてこうなった、あれ、ボーデウィツヒが一夏に向かって歩いていく。どうしたんだろうか？まさか、既に一夏に落とされていたとでも言うのか！？くう、やはり一夏は一級フラグ建築士なのか、これだから弾君は……弾君も結構イケメンだと思うけどなあ。どうしてこいつも違うのか、やはり世の中は平等では無いのか。そうか。

「貴様が織斑一夏か？」

「おう、よろしくなボーデウィツヒさん」

「ふん」

うんうん、挨拶はry……うむ？思い切り右手をボーデウィツヒさんが振るかぶって、振り下ろしたあ！？仕方ない、ここで銃を撃つこともできないし……手っ取り早くこれしかないか……！！

織斑教官のモンド・グロツソ二連覇を台無しにした張本人である織斑一夏を精一杯に叩こうとした途端、教室の後方から今までに感じたことのないほどの殺気を感じた。訓練でほとんど動じないはずの私が、そのあまりにも深く濃い殺気に思わず後ろに飛びのいてしまった。この場には軍に身を置く人物など、私とジャクリーヌしかないはず。ましてジャクリーヌがこれほどの殺気を出したことも出せるとも思わない、確かにその明確な殺気は私に向けられていた。その凍りつくような感情が叩きつけられるように放たれる場所へと視線を移すと、そこには笑顔を絶やさない一人の男が肩肘を突きながら私を見つめて、いや、睨みつけていた。

傍目には優しげで素敵と称される笑顔なのだろう、その結果誰も違和感を感じず突然飛びのいた私を不思議がるような視線で見つめてきていた。しかし、今の私の心の中は「恐怖」で埋め尽くされていた、明確な「確実に殺してやる」という強烈なその視線によって。当初ならば妨害があろうとも一度この織斑一夏を叩いてやろうと思っていたのだが、怯えきった兎のごとく私は「失礼」と切り上げ、宛がわれた私の席に着席したのだった。

「私は認めない、貴様が教官の弟であるなどと……！」

だが、これだけは譲れなかった。

どうやら、成功したみたいだな名づけて「殺意のスナイプ」^{ラフ}。腕力が足りない俺がいつの間にか身につけていた「実戦」用の脅しスキル。ただ一点、標的とした相手に本気の殺意を込めた視線を笑顔で突き刺すように叩きつける。あまりにも強すぎる殺意のために関係ない人物は露ほども気づかないというほどである、向けられたのが一般人ならば2秒と持たずに気を失ってしまうだろう。軍人だからと思って強めにやったらすぐに怯えてしまった。まあ、ナイフを首筋に突きつけられているような感覚に陥るらしいが、軍人がこの程度で引き下がるなんてなあ。もしかしたら大した奴じゃないのかもな。

「・・・・・・・・・・？」

どうやら一夏はあのようにされる原因に心当たりがあるのか、少し思案顔だ。まあ、そっとしておいてやるか。一夏の問題ならば自分で解決するものだ、関係ないならば徹底的に協力するがな。まあ、後で千冬さんに叱られる覚悟でもしておこう。主にこの一般人には到底不可能なレベルの殺気について。

「あゝ、ゴホンゴホン。ではSHRを終わる。各人はすぎに着替えて第二グラウンドに集合、今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う」
「織斑君と如月君は、デユノア君の面倒を見てあげてください。お願いしますね」

いつの間にか眼鏡をかけていつもの山田先生が帰ってきていた、さ

っきの訳を知りたいがおそらく教えてくれないだろう。まあ、某本田さん現象だと言うことにしておこう。

「わかりました、一夏。準備は良いか？」

「ああ、万全だ。いつでも行ける」

「？」

何のことか分からないデュノア……デュノア？デュノアってあのデュノアか、ふん。まあいいや、今は移動だ。説明をしていたら時間と出席簿がハハツ！してしまう。それだけはどうしても避けたい、自己紹介は後でもできるから今は着替えるために遥^更か彼方の安息地へと急がなければいけない。

「I can Fry!」

一夏とデュノアを小脇に抱えたまま、集結しつつある武家の家来らしき動きを見せる女子生徒を尻目に窓を開け放ち飛び降りる。

「キャアーーーー!!」

瞬間、ガクンと揺れて俺の背中に大きな機械の翼が現れる。言わずと知れたジェットパックである、ジェットエンジンを火を噴き、俺たちを前方へと押し出す。あまりにも豪快な「教室移動」であった。

57・一般人と俺とルーキー（後書き）

どうでも良い作品情報

「殺気スナイプ」は人を気絶に追い込むことはできるが虫は落とせない

58・携帯刃物は便利ですね

時速100kmでの空の旅with一夏&デユノアを終えた俺達は、アリーナの空いていた更衣室に到着した。

「よし、着いたぞ……大丈夫かデユノア？」

「だ、大丈夫……シャ、シャルルで良いよ」

「わかった、じゃあ俺は音羽で良い。如月音羽だ、よろしく」

「俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。よろしくな！」

いや、うん。どっからどう見ても女の子に見える、そりゃあ、女子っぽい男がいてもおかしくは無いけどな。しつこいと思うが、如月せん変装をして侵入したりしてきた輩が多かったオルコット家での経験から今でも警戒してしまう。いかんいかん、保身のために警戒することは良い事だが、こういうところまでピリピリしてたらどうしようもない。

なんとなくだが、やはり気になっていつの間にかシャルルを見つめてしまっていた。

「?どうしたの音羽」

「いや、シャルルって女の子みたいだなあと思ってさ」

「!?!そ、そんなわけないじゃない!」

「ははは、だよなあ。わりいな、変なこと言って」

なんか、ビクツてしてたけど。そりゃあいきなりそんなこと言われたら驚くしかないよな、いかん自重しなければ。早く着替えなくては鬼神・チフーユの邪剣「シュツセキボウ」が振り下ろされてしまっ、あれって絶対防御を余裕で発動させて来るから怖い。絶対おかしいだろ、いつぞやのチェーンソーならまだしも市販品があれだけの威力とか。

「まあいいか、よくいっと」

制服上下をすぐさま脱ぎ捨て空中に放り投げる、瞬間、制服と下着の格納と同時にISスーツ（小口径ならず対物も防ぐ）を展開する。専用機持ちの特権である「パーソナライズ」を行うとISの格納領域にエネルギーの多大な消費と引き換えで今俺がやったことと同じことができるらしい。一夏ならまだしも俺は「貸し出し」の域であるために仮フィッティングだけであるために不可能だがな。まあ、どっちにせよ某仮面を付けた風都のライダーさんみたいに光って変身してところだ。いや、この場合古代の戦士のほうか？まあ、そこは良いや。

「うお！？シャルルも着替えるの早いな・・・つくそ、引つかかる」
「ひ、引つかかる？」

「おっ、まったく。なんでこんなぴっちり密着したやつなんだよ・・・」

確かに、引つ掛かるとは言ってもナニがではない。ISを動かすために通電しやすいきつめに作られているため、無理やりにも身体を通すしかないのだ。俺はすぐに量子化しての変身で着替えているから今ではむしろ気づかれないレベルで一瞬涼しくなる感覚が気になるがな。制服と下着が一瞬消えて一瞬でISスーツが展開される、

ほんのコンマ0.0・・・レベルの時間全裸になってしまつのである。いや、システムの理論上仕方の無いことなのだが・・・どうにかならないから余計にきつい。

「お前用に作ってやろうか？」

「いや、良い。これ以上イメージが必要な道具とかは要らない、I Sで十分だ」

「なにそれ？」

「ん、ああ、俺が作った量子化応用の擬似四次元ポケットだ。ちなみに非売品」

制作費は・・・失敗作も含めてそれなり。市販したいが、俺自身が使っているように武装を格納しての兵器転用の可能性が多いにあるために予定は無い。空港の手荷物検査でも引つ掛からないから、やろうとすれば暗殺にも有効的な機能だ。冷蔵・保温・加熱もできて便利だから俺は重宝しているが、便利な道具は必ず兵器にされてしまう、人間の歴史はずっとそんなものだからな。俺が火種になるわけにはいかない、というかなりたくない。

「じゃあ、早く行こうぜ」

「そうだな、一夏、これに調理道具一式詰めてやろうか？イメージもそれならしやすいだろ」

「おお、それは助かる！」

「よし、じゃあ一週間ほど待ってる」

一夏がひやつぽいといでも言いそうなほどにテンションが引くほど上がって走っていった、そこまで嬉しいのか主夫よ。まあ、なんでもすぐに使いたい調理器具が手の中に出てきたら便利だよな。料理の効率化は良いぞ、うん。

「さて、俺らも行くか」
「そうだね」

残像を残しながら疾走していく一夏を追いかけながら、二人してグラウンドへと続く長い廊下を走ったのだった。

ズドム！

ひとまず、遅刻はしなかったものの。変などや顔をしていた一夏が魔剣シュッセキボウの餌食になっていた、どうせ大して面白くもないシヤレでも考えてたんだろう。それにしても良く思いつくものだ、俺にはとうていできない。できたいと思われないがな。ひとまず、今の音は出席簿から発せられる音ではないと思うんだ。日に日に強くなっている気がするよ。

「さて、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
『はい！』

一組と二組の二クラス合同での実習のために普段の人数の二倍であるために聞こえてくる返事も千冬さんがいうこともあるかもしれないが、やる気に満ち溢れていた。まあ、一般生徒にとってはこれが結構重要であるために外せない授業でもあるんだよな、放課後の自主訓練以外だと実習時間くらいしか使えないし。そこが専用機持ちと一般生徒の大きな差か、そういや俺の専用機は夏の臨海学校のとくに来るっていう確定情報。書類が束でマニュアルに挟み込まれていたからな。

「・・・今日は戦闘を実演してもらうか。　凰、オルコット!」

「・・・こういうときって教師がやるんじゃないのか?というか、いきなり戦闘かよ、そりゃあ国家代表候補生同士の試合から学ぶことは多いと思うが。それでも急じゃないか?まあ、いきなり見せて格を見せつけようってところか。千冬さんならそうやるだろうよ、それにしても相手は誰だ?なにか嫌な予感と同時に背筋がぞくりとしたんだが・・・。

「いささか、早いような気が致しますが・・・」

「まあ、千冬さんらしいけどさ。・・・相手は、セシリア?」

「わたくしは構いませんが」

「まあ、待て・・・来たようだな」

千冬さんがそう言って空を仰ぐように見上げる、それに釣られて生徒もそれぞれ見上げた。うん、なにか緑の物体が風切り声を響かせながら降下・・・いや、ふらふらしてるから落下か?ブレーキかけましようよ、山d

ズドガッシャーン!!

俺はひらりとかわしたが、どうやら前にいた一夏が山田先生の墜落地点から逃げ切れなかったようだ。辺りに落下の影響か、軽いクレーターが出来上がり砂埃が巻き上げられて視界を掠める。咳き込みながら爆心地を覗き込むと何故か下敷きであるはずの一夏が上になり、山田先生の素晴らしきメロンの一つを驚掴みという状況になっていた。さっきから一夏は状況が上手く飲み込めていないのか動かずにいるが、汗を滝のように流している辺り焦っているのだろう。

焦って動こうとした結果、山田先生がアレな声を上げてしまっているが。どこのギャルゲーの主人公だよ、と突っ込みたくなるくらいにラッキースケベをやらかしていた。正直見ていられなくて視線を逸らすついでに横に軽く飛ぶ、瞬間、一夏の前髪を軽く焼き青いレーザーが掠めていった。

「うおお！！？なあっ！？」

それに追撃をかけるように連結された青龍刀がフリスビーのように高速で回転しながら、一夏の首を狩ろうかというほどの的確な軌道で迫っていく。「一夏あああああ！！」とか憤怒の感情が込められた声が聞こえた、おお怖い。どうにか一夏が背筋を反らせて回避するが、悪手だ。

「！！！」

一夏の声にならない叫びが聞こえる、なにせ双天牙月はブーメラン状の形態をとっている。投げられた地点へとＵターンして再び一夏に迫る。反らせた状態ではまともな動きができるわけもなく、自身に迫り来る凶器を見つめて絶望の表情を浮かべる一夏。自業自得（？）だ、ガムバレ。

「ハアッ！！」

そこへ力強い声と同時に金属同士の衝突音が聞こえた、小型のコンバットナイフ。ISの装備だから大きいのが巨大な、それこそ一人分くらい大きさ。連結してるから二人分のサイズのそれに投げつけられて地面へと弾かれて突き刺さる。跳ね返ったナイフも近くの地面へとザックリ刺さっていた。

「大丈夫ですか、織斑君？」

「は、はい。ありがとうございます」

ナイフを投げたのは、さきほどまで押し倒された体勢だった山田先生その人だった。小型のナイフ投げて弾き飛ばすとか、どういう腕してるんだよ。普通なら、ナイフだけが弾かれて不可能なのに……一瞬ナイフを投げたときの山田先生の表情が怖かったことでも関係してるんだろうか。やはり、昔はヤンキーだったのだろうか、投げ方がその筋の人のものだったんだが……マジで何者なんだ？

『……………（ポカーン）』

離れ業をいきなり見せ付けられた驚きか、それともホームルームのときの例のあれの再来か理由は分からないが、ほぼ全員が啞然としていた。ボーデウィツヒとやらも、この時ばかりは同じように口を開けたまま驚愕の表情を見せていた。そりゃあ、そうなるよな。そんな、固まった俺らに千冬さんが補足を入れる。

「山田先生は元代表候補生だ、これくらい造作もない」

「いえ、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

それでも僅差で候補生の中では2位の實力だったんだとか、山田先生凄いな。まあ、過去が余計気になったが。その間に投擲したナイフを回収して腰部のストックに収納していた、ああ、だからすぐに取り出せたわけか。

「さて、いつまで呆けている。さっさと始めるぞ」

58・携帯刃物は便利ですね（後書き）

どうでも良い作品情報

山田先生は原作改変

59・疾風のごとく・・・（前書き）

サブタイは某借金執事とは関係ありません

59・疾風のごとく・・・

流石に数で攻めるということに二人とも抵抗があるようだ、いくら「お前ならすぐ負ける」と言われても簡単な挑発にのるセシリアではない。鈴ちゃんは・・・うん、セシリアが抑えてる。渋る二人に痺れを切らしたのか千冬さんが二人に何か耳打ちした。

「あいつらに良い所を見せられるぞ？」

何を言ったのか分からなかったが鈴ちゃんは一夏を、セシリアは俺をちらつと見てなぜか微笑んだ。俺も一応微笑み返したらなぜか顔を真っ赤にしてなにか蒸気っぽいものを噴きながらそっぽを向いてしまった。どうしてだ？

「ここは私、イギリス代表候補生セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「あたしだって居るわよ、中国代表候補生。鳳鈴音がね！行くわよセシリア！！」

「もちろん！」

いきなり名乗り口上を始めてやる気が一気に上がった二人、一体なにをしたんだ千冬さん。というか、突然やる気上がりすぎるぞ。いや、意欲無きやダメだけどさあ。極端すぎるぞ、いや、かの有名な千冬マジックか？って、そんなこと考えてたらシュツセキボウによる一撃を食らってしまうな。自重しよう。あれ、でもsyusse ki bowって書くとカッコいいなんか。

「では、はじめー！！」

千冬さんが笛代わりに手を叩く、それを合図に空中へ三機のISが飛翔した。

「さて、デュノア。山田先生が使っているISの説明をしてみろ」
「は、はい！」

ふむ、まあ俺はIS情報はある程度合法非法合わせてそれなりに知ってるから聞く必要があるのは一夏か。俺はセシリアの華麗な戦いをこの目に焼き付ける！

「え？」
「なあっ！？」

序盤はそれなりに動いていた二人だったが、徐々に山田先生の鬼畜とも言える弾幕によって誘導されて空中で衝突。衝撃から回復しきっていないままの二人に無常にもグレネード（炸裂弾）が6発全弾

撃ち込まれて綺麗な花火にされて現在進行形で落下している。しかもISが解除されて生身で落下してる、山田先生はそれに気づかず高笑いして見てないし……。まったくもう！

「一夏！」

「わかつてる！」

修理が終わった疾風を展開し、落下を続ける二人の下へ白式を同じく展開した一夏と共に飛ぶ。リミッターの部品が事実上の製造不可のため常時「疾風」状態。失敗作所以の製造用金型廃棄でたとさ、でも俺がこれでそれなりにデータ集まるおかげでもう一度やってみようぜの話が持ち上がっているらしい。そういえば簪ちゃんが作ってる打鉄式も機動力重視だったよな、データ使えるんじゃないか？今は先にセシリアをキャッチするのが先決だ〜！！

「イグニッション、ブーストオオオオ！！」

叫んだのはおそらく気分だと思う、余裕で白式を追い越して残像を残しながらセシリアの下へと接近する。詳細スペックによると「疾風」形態では最高速度時速3000kmオーバー、追加エネルギーパックの装着が必要らしいが。単体でも第三世代に速度は追い越してしまう、製作者はスピードジャンキーだったんだろうか？

「つと、ふう……。間に合った」

3m地点で逆噴射による急ブレーキをかけて真下に位置する場所で停止、抱きとめるようにして優しくセシリアを受け止める。反対側を見ると一夏も鈴ちゃんをしっかりとキャッチしたようだった、上空ではいまだに高笑いを山田先生だったものがしているが……。大丈夫だろうか（頭の意味と教師の意味で）

ひとまず、二人を抱きかかえたまま（所謂お姫様抱っこというやつか、一番安定するからな）地上へとゆっくり降下する。地上から見上げる他の生徒がキヤーキヤー騒いでいるがどうかしたのだろうか「羨ましい」とか無言で鼻から赤い何かを噴出す者までいるぞ。どうしてそうなった。

「おーい、起きろ」

「……………う……………うん？音羽？」

「生身で落っこちたから助けさせてもらった、怪我は無いか？」

「え、ええ……………大丈夫です／＼」

ふむ、怪我が無いなら良かった。どうやら鈴ちゃんもなんともないらしい、良かった良かった。ひとまずそのうちに山田先生とお話しなくちゃいけないな、待ってるよ！ひとまず実習の続きだな、セシリアをエスコートしながらクラスの場所へと戻った。

ひとまず、千冬さんの指示で専用機持ちがリーダーになつての訓練機を使用した実習をした。ほぼ三等分で男子に最初集結してしまつたのには少し引いてしまった、まともに教えられるわけ無いだろ。効率悪すぎるし、いくら男子が三人だったとしてもそこはしっかり分かれてやろうよ。まあ、名簿で振り分けられてボーデウィツヒの班になった人はご愁傷様しか俺は言えない。なぜかジャックと俺の班がとても賑やかだった（並木野中的意味で）

「ふう、いやゝ疲れたな」

「そうか？もう少し鍛えたほうが良いぞ一夏」

まあ、訓練機を載せたカートを一夏と違って俺はmk？に押してもらっているんだがな。こんな小さいのに動かせるなんて凄いな、作ったのは俺だけでもさ。ちなみに一夏は自分で押している、俺が横に並んで押すのを手伝っているがな。なんでかシャルルだけ「デユノア君にはやらせられない！」とかって体育会系女子数人が運んでいたが……どこか解せぬ。

「確か午後は整備実習だったか、さつさと上がるか」

「そうだな、シャルル、早く着替えに行こうぜ！」

「あ、いや。僕は少し微調整してから行くよ」

「別に少しくらい待っても大丈夫だぞ？」

「いや、結構時間かかるから先に行つてて良いよ」

「別に待つのは慣れてるから大丈夫なへっ！」

「じゃあ、ごゆっくり」

……しつこく連れて行こうとする一夏の頭を掴んで整備室を後にした、しつこい男は嫌われるぞ。友人だとしても、ストーカーだとしても、命を狙うにしても。最後のは違うか、まあいいや。昼だし今日はあれがあるゝ！

59・疾風のごとく・・・（後書き）

どうでも良い作品情報

今作品では山田先生が元レディース総長です

60 ダブル引越しです（前書き）

そついでです、はい

60・ダブル引越しです

「………申し訳ない」

「すみません、篤さん」

「いや、大丈夫だ。二人は悪くない」

昼休み、ボーデウィツヒ以外の専用機持ちが屋上にいた。とはいえジャックの姿が見えないが……？

普通の高校ならば屋上への立ち入りが禁止されているものだが、藍越学園のように自由に開放されている。

どうやら、一夏と二人でいたかったみたいだが、一夏が変に氣を利かせてしまったようだ。それを知らずに呼ばれてしまった……なぜ気づけなかったし。

「はあ……一夏エ……」

「まあ、今に始まったことでは無いですわね……残念ながら」

あくだこゝだ言っても意味が無いというか、のれんに腕押しとかどうしようもないので仕方なく弁当を広げる。なんと、セシリアの手作りなんだよ。羨ましいだろ？え、全然……あ、そう、後でやっぱ欲しいとか言ってもやらん。それにしても腕はどうなったかなあ、チエルシーさんはメールしてもはぐらかすし。なにかニヤヤしてそんな氣がするが。

「いただきます」

「ええ、召し上がれ」

ボックスを開けると、カツサンドにベーコンレタス、卵とダブルベリなど色とりどりのサンドイッチが華やかに鎮座していらしゃっ

た。美味しそう……。だと！？イギリスにいたころはどう見ても化学兵器だったのに……。頑張ったんだなセシリア、これどこにお嫁に行っても問題ないぞ！……。流石に早い、まずは一ついただこう。

「はむ……。…」

「（ゴクリ）」

最初は卵のを一口、いつかはバニラエッセンスとか投入してめっさ甘くなっていたりしたが……。おお、すっかり卵の甘みも残しつつマヨネーズと塩コショウがさっぱりとした塩味を舌に感じさせる。

「美味い！セシリア、美味しいよ」

「うふふ、頑張った甲斐がありましたわ」

「すごい見てるほうが恥かしいんだけど、音羽ってあんなんだっけ？」

「いや、全然。見たことないぞあんな顔した音兄なんて」

「どうみても付き合っているようにしか見えないのだが……」

「え、あれで付き合っていないの！？」

筭の言うとおり、経験が無い俺でもそう見える。あれ、やっぱり音兄って自覚無し……。？セシリアは太陽以上の眩しさの笑顔で「は

い、あゝん」をしてるし、音兄もまんざらでもない様子。楯無さんには言わないでおこう、IS学園で血の雨を見たくはない。シャルルの言うとおり、恋人同士みたいに音兄とセシリアが見えてしまうが、断じてそういう関係ではない。

「まあ、いいか。邪魔するのも無粋だし」

「そうね、はい、酢豚」

「おお、久しぶりだな！」

「ほら、一夏。お前の分の弁当だ」

「ありがとな箒、助かるぜ」

「じゃあ、僕らも食べようか」

二人から離れて、俺たちもそれぞれ昼食を食べ始めたのだった。なぜか音兄が鼻から忠誠心を噴出していたが、何かあったんだろうか？ひとまず、鈴の酢豚も、箒のからあげもとても美味しかった。

「お引越しです！」

「あ？」

「ふえ？」

いつもどおりの一日の授業を終え、夕食を済ませた俺は同じく仕事を終わらせた美月とそれぞれのベッドの上でくつろいでいた。といってもだらっと伸びながら俺は支給される専用機のマニュアルを読んでいたところだ。説明書は熟読する派だから。

「あの、山田先生。シャルルは一夏と同じ部屋ですよね？俺は必要無いんじゃないですか？」

「そうなんですけど、部屋の調整がついたので一人部屋です！」

「そんな「マジですか先生！待ってましたあ！」……」

これでやっと理性を毎日ガリガリ削られる心配もない、美月には悪いが俺も今となっては普通の男子なんでな。あれこれ思うところがあるんだよ、毎日理性が削られてもどうにか耐えたんだし、一ヶ月つてことだから丁度だしな。頑張つて耐えた甲斐があったというものだ。

「……私が移動なんですか？」

「はい、やはり年頃の男女が何時までも同じ部屋なのはいけませんし」

「生徒会長権限で「ダメです、約束は守ってくださいね！」……はい」

一瞬、山田先生の背後に禍々しいオーラが見えたような気がしたが、気のせいだと思いたい。てか、そういうところで会長権限使うなよ、もつと他にやるべきことがあるんじゃないか？ひとまず、山田先生には感謝だな、心が晴れ渡っているんだぜ！え、喜びすぎ？知らないなあ。

「わかりました。音羽、絶対トーナメント優勝しなさいよ！」

「あ、ああ。善処する」

他にもつとあれこれ言うんじゃないかという予想をしていたのだけでも、それだけ言うつと荷物をささつと纏めて部屋から出て行ってしまった。なんか妙にあっさりしてるなとか思ったが、まあ気に留め

てもどうせ重要なことならばすぐに俺に伝えてくれるだろう。することも無いので再びマニュアルを俺は読み始めた、なに、ビット兵器って・・・俺に使えるかどうか知らないだろ。システム適正試験も受けたことないのにさあ、あ、でも高機動型か。

「いや、シャルルが来てくれて助かったぜ。男二人だけだったし」「そう？あはは」

箒とシャルルが部屋移動になり、やっと本当の意味で落ち着ける。いや、箒と同じ部屋だったことがイヤだったわけではないけども、やっぱり少し意識してしまうものだったからな。やっぱり男同士なのは気兼ねなくて良いな。

「そういえば、一夏って放課後ISの練習してるんだよね？」

「ああ、そうだぞ。いつも箒とセシリアにやられっぱなしだけど」

ちなみに音兄には零落白夜があるからたまに勝てているだけ、ほとんどの場合はあの「ステイルハーツ」とかいっく剣でガリガリシールドエネルギー削られて終わる。もしくは銃器で蜂の巣、あまりにも銃の使い方が上手すぎるから前にどうしてか聞いたら「H A H A H A、偶然だつて」とあからさまにはぐらかされた、こういうときは「詮索するな」っていうことを暗に示しているときなのでそれ以上は聞かなかったが・・・とにかく基本三人にボコられる。

「た、大変だね。僕も専用機持ちだから協力できると思うんだけど仲間に入れてもらって良いかな？」

「ああ、歓迎するぞシャルル！」

「うん、ありがとう！」

思わず、シャルルのちよつとした仕草にどきつとしてしまう。男子だつてことはわかつているが、なんというか、人懐っこい印象だから驚いてしまうことがある。いや、けて俺はアレな趣味は無いぞ。俺だつて普通の異性に興味がある男だ、恋愛とかそういうのは今はそこまでする暇が無いけども。ひとまず、昼は砂糖を吐きそうになったただけ言っておこう。うん。

「さて、と。今日はもう遅いし寝ようぜ」

「そうだね、おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

そうして、それぞれの寢床に入り眠りに付いたのだった。

60・ダブル引越しです（後書き）

どうしても良くない情報

この「訳有り」がなんとお気に入り登録200件を突破してしまいました、まことに嬉しく思います。みなさんありがとうございます
く！！

とまあ、そんなわけで近日にでもお祝い記念をしたいと思います
すので楽しみに！

61・オリ設定（機体・キャラ編）（前書き）

今更感満載ですが

61・オリ設定（機体・キャラ編）

打鉄機動力特化タイプ「F型」機体名「疾風」

機動力を重視というコンセプトで、マジキチの無名開発者が設計・製作した「量産機の汎用性強化」の打鉄再開発計画案の一つ。機体カラーは原作の打鉄通り黒
計画の「機体の一部変更による対応」《機体の機能特化》「武装の特化」《主武装変更による多彩な対応》二つのうちの前者の一つである。評判は悪く失敗作と言われているところを音羽の要望により眠らされていたところを助け出された。一部部品は生産が終了しているため、後述のF型形態には戻せなくなってしまっている。

秘匿形態（打鉄F型）

一対の物理シールド内に、巧妙に高出力ブースターが内蔵されている。秘匿形態でも全開での出力は第三世代に追いつくほど、専用武装の「ステイルハーツ」と相まって攻撃力も十分。勿論、その機動力を求めるために物理シールドは防御性能がほぼ犠牲に。

疾風形態

物理シールドが基部を元にスライドして二基一対のプラズマ複合ブースターが展開・装着される。通称「アンロックユニットフル非固定部位完全ブースターモード」。

この形態では速度のみ第三世代を追い越す、現時点で世界最速のIS。その異常とも言える規格外の速度により、乗りこなせる人物は世界に音羽を合わせても二人しかいない。

偽装物理シールドは巨大すぎる四基のブースターを支えるためだけ

に存在しているため、F型形態よりも防御が格段に薄い。本来は「ここぞの時の一撃用」だが、前述通り一部部品が生産不可能のために形態が戻せなくなっている。スペックデータによると最高速度時速3000kmオーバーであり、高感度ハイパーセンサー搭載により高速戦闘に装備換装無しで対応できる。はっきり言えば速度では怪物レベル。

専用武装「スティールハーツ」

刃の背部分に小型ブースターが装着された「加速する剣」、回転式弾装に気化燃料が込められたエネルギーカートリッジを消費して刃を加速させる。その威力は、第二世代兵器の中でも三本の指に入るほどであり機体の加速も追加された場合はそれも加算されるため規格外である。F型・疾風用に開発されたほぼ専用武装であるため、他の機体では耐久力などの要因により使用ができない。元ネタは某グラール太陽系が舞台の4人で進むアクションRPGから。

IS用刺突エネルギーランス「はくが白牙」

前述プランの后者であり、現行計画の中で開発された近接武装。機体からのエネルギー供給ではなく、専用のエネルギーパックからのため機体エネルギーを心配する必要がない。（後者のプランで開発

された武装はほぼ全てが機体からのエネルギー稼動ではない）
刺突時のみ、高出力のエネルギー刃が展開されてピンポイントで相手のシールドエネルギーを削り取るというコンセプト。どちらかと言うと競技向きの武装である。

オリジナルキャラ

河西愛理^{かさい えり}

二組元クラス代表であり、並木野中の後輩である。音羽を真似てかどうか不明だが、右サイドテールの腰までほどの長さで茶髪。身長は165cm、体重は不明。原作でいう「鈴ちゃんに代表の座を奪われた娘」である。IS原作知識を持った転生者だが、大きく干渉することもなく音羽（の写真を求めて）を追いかける淑女。神さまにチートボディを貰うが自衛程度にしか使わないためほぼ目立たない。二次創作の世界と気づいているが自由気ままに二度目の人生を面白おかしく過ごしている。音羽の認識は「中二病をこじらせた残念な少女」であり、貞操の危機を感じている。

61・オリ設定（機体・キャラ編）（後書き）

どうしても良くない作品情報

Jonathanさん話し合いで相手になっていただきありがとうございます。
うございました、ここでお礼させていただきます。

62・特訓と乱入

「一夏が凰さんやオルコットさんに勝てないのは、単純に射撃武装の特性を理解してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかってるつもりなんだがなあ・・・」

シャルルが転校してきて5日、今日は土曜日。今週はイレイズドに飛ぶ用事もなく、午前の授業時間が終わった午後。自由時間となり、アリーナも全開放と言うことでほとんどの生徒がISでの鍛錬に励んでいる。知識や技術面でまだまだなため、俺もその一人である。一夏とシャルルの練習に付き合う形であるがな、やはり一般生徒とは知識・技術面でも遅れているため貴重な時間を無駄にはできないのだ。

「うゝん、知識としては知ってるってところかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「う、確かにそうだな。瞬間加速も読まれてたし」
イグニッションブースト

「お前のISは格闘オンリーなんだし、他の人以上に射撃武装の特性を理解しておかないといけないな」

「それに、一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で対応できちゃうし。それに音羽の『疾風』ほどの速度じゃないから余計にね」

まあ、疾風の場合は予測射撃したところには既にそこを通り過ぎてるってレベルだからな。それこそ大振りに動かさないといけないからその前に接近されるか撃たれる。シャルル曰く「ある程度近づかれなきゃ射撃は当てられないよ」とのこと、どれだけ速度が規格外かが良くわかる。代表候補生にそこまで言わせるってどれだけだよ。

「あ、一夏。瞬時加速中に急制動かけて曲がろうとすると機体も身体も変に負荷かかって骨折とか怪我するからな」

「むう……」

「あんまり無茶な動きはしちゃだめってことだよ、わかった？」

「おう、なんとか」

まあ、実際。操縦者保護機能があるとはいえ、完全ではないし、死にはしなくても限度を越えれば怪我はする。そうならないように上手く立ち回るようにするのが大事なんだよなあ。お、一夏がうんうんと頷いている。まあ、確かにシャルルの噛み砕いた説明はなんともわかりやすいものだ。個人的に教科書をそれでやってしまえば良いのではないかと思う。

ちなみに

『こう、すばーんとやってからじゃきんって感じた』

『なんとなく分かるでしょ？感覚よ感覚、はあ？なんで理解できないのよ！』

『防御時は上半身を上へ5度、回避の場合は後方へ20度反転ですわ』

……順番は第・鈴ちゃん・セシリアの順番である、個人的にはセシリアの説明が一番分かりやすい。数字で動き方が示されるんだ、擬音語や感覚だけの説明より理路整然として良いだろう。なんで一夏がそれを理解できないのか不思議でならない、それを言ったら第と鈴ちゃんに「ええ」って言われたし。うゝむ。

バンッ！！

「うおっ！？」

いつの間にか深く思考の海に浸かっていたらしく、突然実弾銃特有

の発砲音が聞こえた。どうやら、シャルルが自身の機体の一つに使用許諾を発行して一夏に使わせているらしい。ちなみに許諾を操縦者とISに出されない限り他の機体の武装は使用できない。例外もあるらしいけども基本はそうなっている、射撃系のものは実際にそうだし。事実上のID武装ってところか、まあ、後付武装が満杯^{バースロット}だとしても実際に使った経験は後の糧となる。

「やっぱ、速いな」

「うん、だから軌道予測さえ合ってれば簡単に当てられるし外れても牽制になる」

「だから、簡単に間合いが空くし、続けて攻撃されるのか」

「そうだよ、あ、1マガジン続けて撃ってみて」

「わかった」

規則的な銃声が響く、どうやら白式には射撃補助用のセンサー・リンクが搭載されていないらしい。武器が雪片だけだからだろうか、普通はどんなタイプのISにでも入ってるはずなんだがな。そのため一夏は補助無しにマニュアルで撃っている、オートで調整されると相手にロック警告が出されたり細かい調整ができないから俺は基本使っていないが。

シャルルの専用機「ラファール・リヴァイブ・カスタム？」の搭載武装が20とかいう驚愕の事実に驚いたり、一夏とシャルルが再び軽い模擬戦したりとゆっくりしていた。勿論、俺はセシリアにご教授願いながら高速でお空の旅をしていた。一段落付けようかと、一度俺が降下したとき。にわかにアリーナが騒がしくなった。なんだ？

「ね、ちよつとアレ・・・」

「ドイツの第三世代型よね、まだトライアル段階っていう」

ちようど、一夏も1マガジン撃ち終わったところらしい。騒ぎの原因へと視線を向けていた・・・ジャックはなんか授業終わってから即効でシエスタと洒落込んでいったが。あんなんでもドイツの候補生だつてさ、データとか取らなくていいのかあいつは、まあ、本人が「眠いから寝る、以上！」って言うてたから別に気にしないけども。

「・・・・・・・・・・」

そこに居たのは転校初日に一夏を叩こうとして俺の殺気スナイプで見事失敗したドイツ国家代表候補生、ラウラ・ボーデウィツヒだった。ちなみにクラスでは一切会話無し、部隊の仲間であるジャックとは事務的な話のみという孤高の少女である。そして、昨日だが食堂で一人「ぷりん」を頬を染めながら食べていたのを見かけた、ドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長であり階級は少佐だつてさ。ついでに言えば、ジャックは大尉、副隊長。H A H A H A、俺は英国王室認定騎士だから軍では中佐レベル・・・らしいすっかり忘れていたがな！

「おい」

ISの開放回線オープン・チャネルで一夏が話しかけられていた、まあ、初対面があんなのだから誰だつて忘れないだろう。

62・特訓と乱入（後書き）

どうしても良い作品情報

ここらへんからちよいと改変

63・偽りの仮面は今宵割れる

「・・・・・・・・なんだよ」

張り詰めた空気の中、刺すような視線に射抜かれた一夏が渋々といった感じで返事を返す。まあ、初日に叩かれそうになってしまえば応対がそうなってしまうのも仕方ない。誰が自身をいきなり叩こうとした人間と誰が仲良くできるだろうか。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

一夏が言い終わるかどうかのタイミングで言葉を紡ぎながら飛翔してくる、こいつ、何を考えてやがるんだ？普通に模擬戦ならば、普通に頼めば良いのだろうがやはり一夏になにかあるようでさっきから世界に一夏しかないかのように見つめている。

「嫌だね、第一理由が無い」

「貴様には無くとも、私にはある」

どこか思い当たる節があるのか、一夏がなにか思い出したような表情を浮かべて拳をギリギリと握っていた。どこか、自分への悔しさや情けなさに腹を立てているかのようなだった。まあ、後で説明してくれるだろう、無理やり聞くほいど野暮な真似はしたくない。

「貴様が居なければ教官が大会二連覇を成し遂げていただろうことは容易に想像できる。だから私は 貴様の存在を認めない」

どうやら、「教官」と呼んでいることから千冬さん絡みの内容であることは良くわかった。ドイツに行っていたからそれ関係・・・お

そらくボーデウィツヒはその時の教え子だろう。二連覇というときS世界大会のモンド・グロッソのことだろう、おそらくそのときの千冬さんが辞退ということに関連する内容か。しかし、何があったかは知らないが存在を認めないなどはひどい言い草だな。

「また今度な、今はよしてくれ」

「ふん、ならば 戦わざるを得ないようにしてやる!!」

言うが早いか、ボーデウィツヒは即座に戦闘態勢に機体をシフトさせる。火器が使用可能になった瞬間、右肩に装着されている大型実弾砲が火を噴いた。

ガキンツ!! ドカーンン!!

「軍人が拒否をした一般人に攻撃するとは、お前の頭は正常か?」

「こんな密集空間で戦おうとするなんて、ドイツの人はビールだけじゃなく頭もホットなのかな?」

即座に一夏の目の前に黒と朱の二つの影が立ち塞がる、言わずもがなISを纏った音羽とシャルルであった。ラファールの物理シールドが高速の弾丸を弾き、音羽が展開した対物ライフルがほぼ同時に実弾砲を真っ直ぐに撃ち貫く。即席のコンビネーションが見事に決まっていた、それを傍観していたほかの生徒からは歓声が上がっていた。

「・・・貴様とは問題を起こすなと言われている、今日は下がらせてもらおう」

音羽を一瞥すると、さきほどまでの氣勢はどこへ行ったのか踵を返して立ち去っていった。管制室から教師の声が響いて聞こえるが、

おそらくあのボーデウィツヒのことである、結局は馬の耳に念仏である。

「・・・た、助かった。ありがとう音兄、シャルル」

「いんや、気にするな」

「怪我がなくてなによりだよ」

まったく、いきなりぶっ放すなんてふざけやがって。というか、俺と問題起こすなっでどういうことだよ、え、もしかしなくてもドイツの一企業にもライセンス生産とかあるからそれか？そりゃあ、大企業だから国としても大事な税収入源だろうがさ、ここまでかよ。まあ、こういうふうにされたからってライセンス取り消しとかはないけど・・・なんだかなあ。

「まあ、もう四時になっちゃうし。今日はもう上がるうか」

「そうだな、あ、銃サンキュ。助かった」

「じゃあ俺も上がるかな、まあささつと着替えちゃうか」

また一夏がしつこくシャルルと一緒に着替えようとしたり、セシリアが俺と一緒に着替えても良いとか言い出したりしたが鈴ちゃんと算の説得（物理）によってなんとか解決した。・・・まさか、一部の腐った女子のBでLな薄い本みたいな趣味なのか一夏って？

「違うわ！」

「大丈夫だ、俺は否定しないから。あ、俺は対象にするなよ？」

「だから違つて……」
「え、一夏……」

いやあ、一夏を弄るのは楽しいね。む、山田先生がなにか急いでいるように走っていた、転ばなければ良いが……。やっぱり転んだ、すぐに起き上がったがもう少し落ち着いて歩いたほうが良いと思うんだ。

「あ、丁度良いところにお二人いましたね！」

「先生、おかえりはあちらです」

「ええ、それではまた来ます……。って用事があるんです！」

ふむ、ノリツツコミが大分板についてきたな。最近の密かな楽しみであるのだがな、千冬さんにあとで叩かれてもいいや、面白いし。で、用事ってなんだ？

「いえ、織斑君は「白式」の如月君は「疾風」の書類をちよつと書いてほしいんです。すぐに終わるので職員室に来てくれませんか？」

「ああ、そういうことですか。わかりました」

「じゃあ、すぐに来てくださいね！」

「シャルル、じゃあ先にシャワー使つててくれ」

「うん、わかった」

再び慌しく走り出した山田先生、あ、また転んだ。ひとまず職員室行こうか。

「すぐって言ったのに・・・」

「まさか、書類10枚もとは思わなかったな」

ただ単に機体の書類上の装儒者の登録で名前を書くだけのものだった、まあ、管理用の名簿と言ったところなんだが、それが10枚もなんだからそりゃあ20分もかかる。臨海学校ころにはイギリスから専用機が正式に来ることが確定していてもやはり貸し出しとは言え必要らしい。あゝしんどかった。

「一夏、ちょい紅茶飲ませてもらって良いか？喉渴いてさ」

「ん？音兄、いつものあれじゃないのか？」

「いや、丁度お湯が切れててさ。少しは男子同士三人で話もしたいし」

「わかった」

いやゝ、一夏が淹れる紅茶ってなんか知らないが美味しいんだよね。こつ、チエルシーさんが淹れてくれたのとはまたちよつと違うんだが、説明しにくいが実際そうなんだよな。お、着いた着いた。

「あ、シャルルはシャワー浴びてるのか。音兄「椅子は自分で出した」だったら良いか、ちよつと待っててくれ」

「おう」

ふかふかのクッションみたいな椅子を展開して、そこへもふゝっと座る。身体に合わせて形を変えてくれるから結構良いんだよねこれ、しかも緊急時に自爆機能付きという男のロマンも詰まってる。まあ、浸かったことは一度も無いし使う予定も無いけどさ。ふわゝ

「ああ、シャルル丁度良かったボディーソープ・・・・・・・・・・」

「い、一夏。ああ、ありがと・・・・・・・・・・」

ボディーソープが切れてたらしく、一夏がシャルルに渡しに行った。どうやら丁度出くわしたらしい、まあ、男同士なんだし手渡しでも問題無いしな。なんで途中で静かになったのかわからんが。

「う、ここに置いておくぞ?」

「う、うん」

なぜそんなに噛む、遂にニワトリの物真似でも始めたのか? どうして戻ってきた一夏の顔が赤くなっているのか知らんが……?

「ははは、どうしたよ。シャルルが実は女子でしたとか?」

「うん」

「そりゃあそうだよな、そんなわけ無いよな……」

は? 今ナンテイッタコイツ? 「うん」これは肯定の意味だよな日本語で、運勢の「運」でもくもの「雲」でもある。で、俺はなんて質問した?

Q・シャルルが実は女子でしたとか?

A・うん(yes)

「マジ?」

「え、音羽も?」

「ふへ?」

声のした方向に振り返ると、そこには金髪の貴公子ではなく一人の少女が居た……。おいおい、どういつことだよ!?

63・偽りの仮面は今宵割れる（後書き）

どうでも良い作品情報

一夏はシャワールームのドアを開けて渡した・・・どういづつと
かわかるよね？

64・知る者、知られる者（前書き）

キヤー、またgodった

64・知る者、知られる者

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「（気まずい）」

シャルル（女）がジャージ姿に着替えてシャワールームから出てきてから既に一時間、誰とも無く口を開かず沈黙だけがその場を窮屈なほどに埋め尽くしていた。正直、こういう状況はあまり経験が無いために俺もどうしようもなく無言でいるしかなかった。心地いい静寂は嫌いではないが、こういうのはあまり好きではない。

「あゝ、ひとまずお茶でも飲むか？」

「（コクリ）」

どうやら埒が開かないため空気を変えようと一夏が立ち上がった、俺は頷きで返したがシャルルはびくりと身体を震わせる。まあ、いままでのを考えればそうはなってしまうか。

「う、うん」

「わかった」

まあ、やっと会話なのだが。すぐにまた沈黙へと戻る、淹れ終わるまでがまた想像以上にきつかった。俺はどうすることもなく、なにが茶菓子を持っていなかったか少し調べた・・・・あ、ドーナツがあるな。よし、甘い物があるならば少しは良いか。ひとまずドーナツを皿と一緒に展開してテーブルに置く。

「もう大丈夫だろ、ほい」

「あ、ありがと きゃっ」

一夏が湯飲みを渡すときに手が触れたからか、シャルルが慌てて手を引っ込める。思わず落としそうになった湯飲みを無理な体勢で取ったために反動で中の熱い茶が一夏の手にかかってしまった。うわ、火傷するじゃないかよ。

「わあ、ごめん！」

「あち、あちちち！」

「ったく、初々しい奴らだよまったく」

蛇口を捻り、水を勢い良く流す。手招きして高温のお茶がかかって騒いでいる二人を近づかせる、すぐに冷やさないとダメージが深くまで行っちゃうからな。一気に空気が和やかになる、なんというシリアスブレイカーだよこいつは・・・そのほうが良いけどさ。

「シャルル、しっかり冷やしてやれ。俺は冷却シート出すから」

「わかった、ほら一夏。しっかり手を出して」

「うう、すまん」

えーっと、冷却シートは・・・確か部屋の入り口の棚の中に何枚か常備されてるんだよな。保健室や医務室などは寮よりはアリーナが近いという場所にあるために軽症程度ならば室内に薬品などが常備されているのだ。ちなみに薬品棚の奥にはナノドクター製の火傷用塗布薬と冷却シートを見つけた。ナノマシンによる効果の底上げがされているんだよね。ちなみに生体分解型の使用により人体に

影響無し。やったね一夏、2日で治るよ！

「まったく、ほれって一人で塗れないか。シャルル、すまんがやってくれ」

「オッケー」

「すげえ情けないんだが俺」

シャルルに塗布薬の小さい容器を投げ渡し、冷却シートのパックを開いて冷却開始まで振る。丁度カイロをぐしゃぐしゃやって発熱させるのと同じだ。うんうん、シャルルもしっかりやってくれてるし良いかな。塗り終わった患部へシート（小）を貼り付ける。

「はあ、俺って奴は・・・」

「はいはい馬鹿は安静にしてろ」

一夏の治療も終わり、今は三人して紅茶を飲んでいる。さて、と、そろそろ良いかな。

「なんで男のフリをしていたんだ？無理には聞き出さないけど」

「それは・・・その、実家の方からそうしろって言われて・・・」

「実家っていうとデュノア社か、だが、どうしてだ？デュノア程の企業なら俺が誰かわかっているはずだろ」

「うん、そうなんだけど。経営不振で焦ってたんだ社長・・・僕の・・・父さんが。それで直々の命令で」

一夏が？マークをひよこひよこ浮かべているが、まあ、後で良いや。だが、自身の父のことだと言うのにそこから表情が曇りだした、どういうことだ？罪悪感とは別の・・・嫌悪？

「命令って・・・親だろう？どうしてそんな・・・」

俺の疑問に一夏が代わりのように口を開いた、どうも表情が優れない。どういうことだ？

「僕はね 愛人の子なんだよ」

一夏は絶句していた、そりゃあ15にもなればそういう言葉の意味も分かってくる。俺も企業人としてそういう話は嫌でも聞こえてくる、あくまでも自身の子を「愛人の」というだけで使いやすい「駒」として道具のように扱う。正直反吐が出ることだが、これは古来から行われてきたことでもある。今に始まったことではないが、自分がライセンス許可をしている企業では厳しく禁止をしている。それほど俺個人としては嫌なことであるからだ。

「それでね、引き取られたのが2年前。丁度お母さんが亡くなったときだったんだけど、父の部下がやってきたの。連れて行かれて検査されたらIS適性が高いことが分かって、非公式だけどテストパイロットをやることになったんだ」

おそらく、話すことも苦しいのだろう。俯いたまま、今にも掠れそうな弱々しい声で健気に話してくれていた。心が痛むが、聞き逃すまいと耳をしっかりと傾ける。

「父に会ったのは2回くらい、会話は数回だけ。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度本邸に呼ばれてね・・・。本妻の人に「

この泥棒猫が！」って殴られたよ。あの時はひどかったなあ」

あはは、と無理やりということがわかる愛想笑いに俺らは返すこともできなかった。一夏が怒りを抑えて拳を強く握り締めていた、血が出るのではないかと思うほどの強さのため爪が食い込んでいた。

「それから少し経ってデュノア社は経営危機に陥ったの」

「なんでだ？ISのシェアは世界3位じゃなかったか？」

「言っちゃなんだが、結局ラファールは第二世代。今は世界中が第三世代開発に動いてるから開発がままならないデュノア社は状況が厳しいのさ。欧州連合の統合防衛計画「イグニッション・プラン」からも除名されてる、切羽詰ってるんだよ」

「うん、音羽の言うとおりなんだ。実際に、政府からの援助もこの先危ないし」

現在、それを理解した投資家たちがデュノア株を売り出したおかげで株価は現在暴落。どうにかラファールの利益と関連産業で生き残っている状態。企業としてはとても危険な状態である。

「それでね、次のトライアルで選ばなかった場合は援助カットとIS開発権の剥奪が言い渡されているんだ」

「でも、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔、それに」

シャルルが堪えるように息を吸い込む、どこか苛立ちと申し訳なさを感じられるそれが言葉になって吐き出された。

「同じ男子なら、日本で確認された特異ケースと接触しやすい。可能であれば機体と操縦者両方のデータも取れるだろうってね」

「俺らのデータを気づかれないうちに盗めってことか、気に入らん

な」

どうやら話を聞いた限り、罪悪感など微塵もなくもはや娘ではなく唯の「使える道具」としてしか考えていないらしい。まったくもって胸糞悪い、やはり実際にその目で耳で感じると余計にイラつく。

「聞いてくれてありがとう、少し楽になったよ。でも、バレちゃったから僕は強制送還かな。今までウソをついててごめん」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

深々と頭を下げるシャルル、そこには心からの謝罪が表されていた。遂に我慢ができなくなったのか一夏ががしつとシャルルの肩を掴んでいた。

「いいのか、それで」

「え・・・・・・・・」

「それで良いのか？良いはず無いだろう、そりゃあ親が居なけりや子供は生まれない。だけど、だからと言って親が自分の子に何をやってても良いはずが無い！自分の人生は、他人に決められるものじゃない！自分で決めるものだろ。それを親がどうこう言う権利は無いはずだ！」

「一夏、落ち着け。シャルルが驚いてる」

「あ、ああ。スマン、シャルル」

「い、いや。大丈夫、どうしたの？」

「俺は・・・俺と千冬姉は両親に捨てられたからさ・・・」

「あ、ご、ゴメン」

「いや、良い。別に今更会いたいとは思わないし、俺の家族は千冬姉だけだから良い」

おそらく、書類に書いてあったであろう「両親不在」の表記の意味を理解したであろうシャルルが謝る。俺も書類上は「両親不在」になっているが、実際は「不明」、うなじのバーコードから親がいるかどうかも怪しいが。まあ、実際はどうでも良い、ミリアさんが俺にとっては親代わりだったからな。感謝はしてもきれないが。

「で、だ。一夏の言うことはごもつともだが、どうしたい？」

「う、うん。できればここに居たい」

「そんな一夏に問題だ、特記事項21の内容を答えよ」

「え？・・・ああ、そういうことか。学園に在籍する生徒は全ての組織・個人からの干渉はされない！つまり3年間は大丈夫なんだな？」

「後は・・・それまでに俺がフランスに支社を建てて買収してやれば良い」

「え？音兄が？」

「あ、あゝそこからか」

音羽説明中

「ナノドクターって大企業じゃんか、そのライセンス提供者って・・・」

「おう、だからこれでシャルルも大丈夫だ。安心して良いぞ？」

「え、でも音羽にはメリットが無いよ？」

「ん？おかしいことを言うな、こっちはIS関連に産業を伸ばせる、収益は上がる。そゆこと、オーケー？」

「あ、ありがとう」

「感謝は一夏に言うんだな、俺は企業人として動くだけだ」

さてと、これで良いか。腹も減ってるだろうし、飯食いに行くか。シャルルも気が抜けたような感じだし・・・「ドンドン」誰だよ？

『一夏さん、音羽がどこに居るか知りませんか？』

げ、一夏にジェスチャーで「知らない」と伝える。今ここで返事をすればセシリアがドアを蹴破る勢いで入ってくるのは確実だ、シャルルの正体がバレるのは何がなんでも避けたい。

「セシリアか？俺は知らないけど、食堂にでも行ったんじゃないか？」

「そうですか、すみません。それでは」

「お、おう」

ふう、さてと。俺は窓から脱出でもしよう、その後に適当なところから行けば良いだろ。

「・・・・・・行ったか、じゃあ、シャルル頑張れよ。アデュー」

窓からダイブしジェットバックで俺は夜空をバックに飛び去ったのだった・・・・・・。後でセシリアに見つかり自室で「はい、あーん」をする羽目になったのは言うまでもない。

64・知る者、知られる者（後書き）

どうでも良い作品情報

ライセンスの金額は喋っていない

65・淑女と冷水

「そ、それは本当ですか？」

「学年別トーナメントで優勝したら音羽が一夏と付き合えるってやつでしょ？」

「へー、それは面白そうだね」

「ふふふ、これは俄然やる気が出てきましたね」

月曜の良く晴れた気持ちの良い朝、男子3人（一人女装だが）で教室へと入ろうとしたらなにか女子勢が騒がしく会話に花を咲かせていた。そういえば女子ってなにかと噂話好きだよね。

「おっはよー」

「おはよう」

「よっす」

それぞれの挨拶を終わらせ教室に入ったのだが、なぜか『きゃあああ！？』とか叫んであちこちに焦って散っていった。いきなりそんなリアクション取られると俺の超合金ハートが傷つくんだが、ひとまず訳分からん。

「なんか名前が出てた気がしたがどうかしたのか？」

「い、いえ。なんでもありませんわ！」

まあ、別にどうってことは無いけどさ。セシリアが妙によそしめいが・・・多分聞き出そうとしてもこれは無理だな。俺の場合はそれ以前にセシリアに嫌われたくないが優先されるが、多分そうなら俺は生きていけないと思う。

「まあ、座ろうか」

「そうだね」

「だな」

「（どうしてこうなった）」

一夏に思いを寄せる侍ガール、篠ノ之箒は校内に広まった噂に頭を悩ませていた。先日、部屋を移動する際に「トーナメントで優勝したら付き合ってくれ」と約束を交わしたのだが、なぜか「優勝したら織斑一夏・如月音羽・シャルル」デュノアの誰かと付き合える「というもの」に変わって広まっていたのだ。

「（これは私と一夏だけの約束のはず、なぜ音羽とデュノアが巻き込まれているのだ!）」

原因としては一夏に伝えた際の余計なまでの大きな声だったのだが、恋する乙女にはそれに気づくほどの余裕があるはずもなかった。それで聞かれた結果、尾ひれが付いての結果である。本人は「二人だけの秘密」にするべきだったのだが、こうなってしまった以上優勝するしか道はなかった。

「（だが、今度こそ私は道を誤らずに戦えるだろうか・・・）」

過去、ISによって一夏と引き離され、日本各地を保護という名目で駆け回らされ、連絡を取ることもできず、気づけば親とも引き離

され一人になってしまった。その時の負の感情を叩きつけるようにして剣道をしていた自分の姿が思い返される。それはもう、醜いものであった、今では克服したと思っていたがやはり心配であった。なにせ、心に付着したそれは簡単に洗い流せるほど単純ではないのだから。

「（いや、あの頃の私ではないのだ。やれる）」

そこには、自身の信念に従って進もうとする剣士が居るだけだった。

「あ」

「あら？」

二人揃って相手は違うが恋する少女が放課後、目的のための鍛錬に来ていた。

「あら、鈴さん。私はこれからトーナメントに向けて訓練しますの」
「そう、奇遇ね。私もよ」

二人の間に火花がバリバリと散る、お互い目的は同じためにライバル視していた。

「ねえ、音羽は譲るから優勝させてくれない？」
「いえいえ、一夏さんはどうぞ。私は優勝して音羽を賞いますので」

どちらも負けず嫌いということが災いしてか、どちらとも無くメイ
ンウエポンを展開する。一触即発の空気の中、お互いにISを全身
に展開してアリーナに降下する。

「じゃあ、勝った方が優勝ってことで良いわよね？」

「ええ、異論はありませんわ」

「では

セシリアの言葉を遮るかのように突然、超高速の砲弾が目前に飛来
した。セシリアが鈴を抱きかかえて後方に回避するが、それを追い
かけるかのように2発目、3発目と続く。そこまで来ると、左右に
分かれてセシリアはライフルを、鈴は衝撃砲をそれへと向ける。視
線の先には、先日の漆黒の機体。『シュヴァルツェア・レーゲン』
専属操縦者

「ラウラ・ボーデウィツヒ・・・」

「いきなりぶっ放すなんて、何考えてるのよ！」

ガシンと大型の青龍刀「双天牙月」を連結させ、二門ある両肩の衝
撃砲を準戦闘態勢にシフトさせた鈴が威嚇するように睨み付ける。

「鈴さん、その程度の挑発に乗っては思う壺ですわよ」

「そ、そうね・・・ありがとセシリア」

キツとラウラを見据えてセシリアが言葉を続ける、右手は後ろに立
つ鈴を抑えるかのように上げられていた。

「それで、一体何の用ですか？私たちはこれから大事な予定がある

のですが」

「ふん、中国の「甲龍」にイギリスの「ブルー・ティアーズ」か。データで見たときのほうがまだ強そうであったな」

あまりにも挑発的な発言に二人の頬がつり上がる、武器を持つ手に力がこもるがどうにか息を吐き出すことで落ち着く。

「何よ、やるの？わざわざドイツくん dari から来て結構な物言いね、常識を疑うわよ？」

セシリアが「鈴さん」と声をかけるが、既に本人の心は沸点を通り越し今すぐにも飛びかかろうと双天牙月の切っ先をラウラに力を込めて向ける。既にセシリアの腕を押しつけて睨みつけてしまい、セシリアの制止を振り切ろうとしていた。

「ほう、一人で十分か？まあ、訓練機に負ける程度の輩に私が倒せるとは思っていないがな」

「そんな見戯のような挑発に乗ると思ったら大間違いですわよ？」

「ふん、そちらはやる気のようなうだが貴様は傍観するだけか？とんだ腰抜けだな」

「言いたければどうぞご勝手に、模擬戦のお相手はしますけどもね」

それを言い終わるかどうかのところで、堪忍袋の尾が切れたのか、鈴が地面を蹴り飛ばしてラウラへと加速して突っ込んでいった。

「はっ！来い、数だけの国でも足掻いて見せる！」

65・淑女と冷水（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアは原作より良い子&冷静

66・傷つく翼、舞い降りる雫（前書き）

作者はラウラが嫌いなのではありません、あしからず

66・傷つく翼、舞い降りる雫

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、勿論だ。確か今日使えるのは

『第三アリーナだ』

『わあっ！？』

なんだ、いきなり口を開いたらそんなに驚くなんてひどいぞ。まあ、いきなり横から見知っている声とは言え聞こえてきたらそりゃあ驚くかもしれないが・・・そこまでか？まあ、箒はともかく俺は癖で足音と気配を消していたが。なぜか箒が「お前は忍の家の出身か？」っていうずれた質問されたときは面食らったがな。

今時忍者って残ってるのか？

「まったく、驚きすぎだぞ？」

「本当にな、少しは回りに気を配れ一夏」

「お、おお。スマン」

「ごめんね、突然だったからびっくりしちゃって」

「ああいや、責めてるわけではないぞ」

シャルルがこつちが驚くほどにぺこりと頭を下げる、流石にこつちが悪かったと非常に思ってしまったい少し言葉をつぐんでしまふ。箒も同じらしく、ごほんと咳をして気分を切り替える。

「ま、まあ。第三アリーナに行くでしょう。今日は空いているらしいから時間があれば模擬戦もできるだろう」

「そつえばセシリアと鈴ちゃんが走ってたし、丁度良いだろう」

丁度良ければ相手を頼めるだろうしな、最近では接近しても切り裂かれることが多いがな。やはり候補生は格が違っていてことだよ、決定戦は運が良かったんだよきっと。ああ、でもどうせなら専用機でやりたかったなあ。学年別トーナメント。

「じゃあ、早く行こうぜ！」

セシリアは鈴を抑えることを早々に諦め、アリーナ後方からじつくりと二人の戦いを解析していた。相手が軍籍の人間であるから情報を集めるためである、別に模擬戦程度であるから怪我をすることは無いだろうという常識に当てはめた考えからの行動であった。それに、軽い挑発に易々と乗っついては偉大な前当主の母に申し訳がない。それに本人は隠しているつもりのようなが、去ってから裏で支え続けてくれた音羽にも申し訳ない。

「それにしても・・・A I Cの完成度は素晴らしいですね」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、「慣性停止結界」とも呼ばれるそれはドイツが開発途上のI S用第三世代兵器である。目標とする物体を放ったエネルギー波による拘束で動きを止めてしまふという、サポート系統の武装である。無論、鈴の放った衝撃砲は10にも及ぶがその全てが見えない壁によって防がれていた。軍人であるからか、小型の腕部プラズマブレード二振りで重量のある青龍刀の猛攻を裁ききっていることから戦闘能力自体も高いレベルであることがわかる。

「っこの、当たりなさいよ！」

「そう言われて易々と当たる馬鹿ではないのにな」

既に戦闘を始めて20分、不可視の弾丸の雨は同じく見えない城壁に遮られて意味を成さず。ならばと青龍刀での連続の突き払いを繰り出すも全てが的確な角度、力でいなされる。そして、生まれた隙を狙って実弾砲が火を噴く。ぎりぎりまで避け続けているが、こう長時間の集中にさらされてしまえば流石の代表候補生も疲れが出てくる。今では回避もままならずギリギリ掠ってしまっていた、このままではシールドエネルギーが全滅するのも時間の問題である。

「どうした、もう疲れたのか？」

「うっさいわね、いい加減に、やられなさいよ!!」

そう叫ぶと同時に連結させた双天牙月をブーメランのように力を込めて投擲、同時にそれに対して加速とでも言えるのか衝撃砲をピンポイントで撃ち込み更に押し出す。大気を音を立てて切り裂きながら進むそれはもはや命を今にでも刈り取るつかというほどに刃を輝かせていた。

「何っ!？」

「ついでに食らいなさいよ、こんちくしょう!!」

ボーデウィツヒが防ぎきれないと思ったのか両腕をクロスさせて防御体勢に移った途端、迫る双天牙月の隙間を通して衝撃砲の連射をばら撒くように撃ち込み続ける。周囲に着弾した流れ弾が地面で爆

せて土を掘り返し、視界を煙幕代わりに埋め尽くす。

「まあ、良い手だったな。褒めてやる」

しかし、その土煙の中から双天牙月が投げ返され、同時に黒く細い何か。いや、5本ものワイヤーブレードが鈴の四肢、そして首にぎしりと鈍い音を立てて強く巻き付く。そして・・・上空へと持ち上げられ、そのまま地面へと突き落とすかのように叩きつけられる。まるで、幼子が無邪気に小さなスコップで虫を叩き潰そうとするかのように・・・意図に気づいたセシリアが向かうも時既に遅かった。

「っが!!」

「鈴さん!」

その瞬間、ボーデウィツヒの首筋を青いレーザーが怒りを込めて掠めるように通り過ぎた。

「そこまでですわ、ボーデウィツヒさん。ここからはわたくしがお相手しましょう」

「ほう、ならば来い。こいつにはもう用はない」

要らなくなった物をゴミ箱に投げ入れるように過剰なダメージによって気を失いISが強制解除された鈴をセシリアに投げ寄こす。容態を軽く確認したセシリアはアリーナの端に鈴を横たえ、キツと睨みつけるようにレーザーライフル「スターライトmk3」の銃口を向ける、その目はかつて子を、家を守るために戦った母に重なる。既に、セシリアの頭の中には「容赦」という選択肢は存在していなかった。

「覚悟なさい、ボーデウィッヒさん！わたくしを怒らせたこと、後悔させてさし上げますわ！！」

今この場所に、新たな戦いの火蓋が切って落とされた。

66・傷つく翼、舞い降りる雫（後書き）

どうでも良い作品情報

セカン党の皆さんごめんなさい

67・零、その先へ（前書き）

あんまり上手くセッシー無双書けませんでした

67・零、その先へ

「なんか騒がしいな、遂に鈴ちゃんが青龍でも召還したんだろうか」
「いや、鈴なら白虎だろ。猫っぽいし」

ちなみに今現在、第三アリーナに近づくに連れて廊下を歩く生徒がなんか騒がしい。なんかアリーナ内で候補生同士が模擬戦をしているらしい、心当たりがありまくるんだが・・・主に衝撃砲とかお嬢様とか。また一夏のこと騒いでるんだろうか、まあ、あの二人なら仲良く喧嘩していることだろう。周囲への被害が半端無いけどね。

「なんか、二組の代表が怪我だつてよ？」

「え、あの一組の転校生が行ったの？」

「大丈夫かなあ・・・」

あのさ、良いかな？

「音兄」

「わかってる、急ごう」

一夏の手を掴み、地面を強く蹴る。ISの操縦方法にも通じる徒手格闘での移動方法であり、体格差を覆すことのできる移動系の技術である。通常時の高速移動では実際スタミナの減りを無視すれば最速の域になる、なぜなら子供が大人の懐に入り込み攻撃に移れるように作り出されたものであるのだから。

「悪い、先に行く」

「わかった」

「うん、すぐに僕らも行くよ」

一声かけるのも忘れない、俺がこれで移動を始めると普通に一般人が追いつけなくなる。いやまあ、これはセシリアを助けに入ったあの日もお世話になった。これが無かったらおそらく今ここに俺もセシリアも生きていなかったろう。……。ひとまず、なんか走り際に見えた赤いスーツ姿でこっちに微笑んだ見覚えのありまくるブロンドの女性に手を振って通り過ぎる。一夏が「何に手を振ったんだ？」て顔をしていたがスルーする。

『娘をお願いね』とか聞こえたので呟くように「任せろ」と返事をし、更に廊下を更に強く蹴り飛ばす。床へ落下する勢いをそのまま前進する力へと変えるため、景色が後ろへと流れていく。一夏がうわうわ悲鳴を上げているが今はスマン、急がなければいけないような感じがする。

ダンッ！！

「くっ、久しぶりだからきついな」
「首がががががが！！」

ダンッ！！

「え、如月君？」
「織斑君も！？」

ダンッ！！

そして、1分後、普段ならば20分の距離をありえない速度で移動

し終えた俺は気絶しかけている一夏の頬を軽く叩き意識を覚醒させるとすぐにアリーナ内を見れる観客席へのゲートをくぐった。

アリーナ内を縦横無尽に青と黒の影が対照的に円を描きながら向かい合って銃撃の応酬を繰り返していた、実弾砲が火を噴けば放たれた弾丸をレーザーが撃ち抜き、逆にレーザーが放たればプラズマブレードで弾かれる。そんなイタチごっこの状況が延々と続いていた。

「流石、軍属ですね」

「ふん、貴様がここまでとは思わなかったぞ！」

AICでビット型のブルー・ティアーズを止めるも、その意味も無くレーザーの制射が襲い掛かる。接近すればミサイル型とビットが牽制に織り交ぜながら的確に射撃でシールドエネルギーが削られる。それを見つめる生徒の目には、徐々に押されているボーデウィツヒの姿が映っていた。

「行きなさい、ブルー・ティアーズ!!」

「邪魔だ、消えうせる金属板！」

激高したラウラがワイヤーブレードを武装の耐久限界ギリギリで射出し、目前に迫っていた2機を破断し残りの2機に2本のブレード部分を叩きつけ地面へと無理やり弾いた。そこにはもはや効率を考

えた行動などは無く、ただ目の前の物を破壊するという素人同然の動きだった。そんな隙を見逃すセシリアではなかった、すぐさまスターライトmk3をセミオートバースト（3点バースト分のエネルギーを使う）にモードチェンジを済ませて精密狙撃用モードに機体を切り替える。任意の位置に滞空し、射撃系の操縦に集中できる形態だ。機体操縦ができなくなるのが玉に傷だが、その分射撃精度が格段に上昇するためロングレンジでの戦闘に適している。

「はあああああ！！」

「あなたこそ、冷静に対処することをおすすめ致しますわ！」

直線的にプラズマブレードを展開したまま突っ込んで来るラウラ、セシリアはふうと息を吐くと再びスコープを覗き込み照準をラウラの頭に合わせる。標的が自身に向けて真っ直ぐ迫ってくるのだから狙うのも造作はない、それに今は狙撃重視の状態、外すわけがない。セシリアが今こそと引き金を引こうとした途端、なにかの影が二人の間に入り込んだ。

ガキンッ！

「そこまでしておけ馬鹿者、自分を見失えと教えた記憶は無いぞボーデウィツヒ」

「・・・・ハッ！・・・・はい、申し訳ありません」

「そこまで勝負をしたいのならトーナメントで決着を付けろ、オルコットも良いな？」

「はい、問題ありませんわ」

「了解しました・・・・」

ISを待機状態のイヤークラスに戻し、アリーナを出て保健室へと

向かう。プライベートチャネルで音羽から「鈴は保健室に連れてくぞ」と先ほど伝えられたからだ。

「さて、と。鈴さんはご無事ですわよね？」

「まったく、無茶はよしとけてのに」

「仕方ないでしょ！？その、あの、うにゅう……」

「あはは、一夏は鈍感だなあ」

保健室から鈴たちの元気な声が聞こえる、どうやら無事なようだった。ひとまずノックし声をかける。

「鈴さん？お身体の具合はどうですか？」

「あ、うん。身体は少し打撲だってさ、ごめんねセシリア」

「いえ、早く助けられなくて申し訳ありませんわ」

「いやいや、気にしなくても良いわよ。おかげでこれで済んだんだし」

音羽が言うには、ISがダメージレベルがD寄りのCらしくトーナメントへの出場は事実上不可能。機体の稼働データを取るためでもあるため、候補生の身としてはとても危うい。本人は自業自得と苦笑しているが、そうまでさせたラウラが許せずにいた。それに気づいた音羽がばんばんと頭を撫でてくる。

「まあ、今はゆっくり休め。それが一番だ」

「うん、ありがとね音羽」

「運んだのは一夏だ、俺は・・・まあ、特に何もしてない」

「な、治療の手もがあ」

「まあ、ゆっくりしとけ。じゃあ、俺は行くかr・・・・・・なんだ？」

なぜか、地面が揺れる。それも徐々に大きく、それにつれて多数の足音が響いてきていた。音羽が訝しげにしながらも保健室のドアノブに手をかけた途端。そのドアが吹き飛んだ。

「なにガツ！！ほぶふわあ！！」

なにか人体から鳴ってはいけないような、ベきぐしゃという音声と同時にドアに押されて反対側の窓の間の柱に叩きつけられる音羽。それと同時に視界を埋め尽くすほどの女子・女子・女子。目前に差し出されるなにかの書類を持った大量の腕。その気迫に気圧されてしまったのか、一夏とシャルルは軽く後ずさりしていた。ベッドに座る鈴は目を見開いてばかんと口を開けたままだった、ちなみに相変わらず音羽は柱とドアのサンドイッチ状態である。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「あれ？如月君は・・・まあ良いか」

『私と組んで！！』

一夏の目の前に差し出された何かの申込書、一夏が軽く頷きながら読み上げたところタッグ戦へとルールが変更された学園別トーナメント戦のタッグ申込書であった。困り顔のシャルルと一夏が視線を

交わし一夏が口を開く。まだ音羽はry

「あゝ、ごめん。俺はシャルルと組むからさ」

「・・・まあ、他の女子よりは良いわね」

「男同士つてのも絵になるげふんげふん」

「じゃあ、こうなったら残るは如月君よ。行くわよ!!」

おー、と元気な、もとい騒がしい女子が再び地面を揺らしながら嵐が過ぎ去るかのように走って出て行く。途端、静寂に包まれる保健室、ついでに音羽はry

「じゃ、じゃあ俺たちは行くぞ。頑張れセシリア」

「んな、なあっ!?!い、一夏さん!?!」

言い返そうとするも既に二人は気づいた頃には部屋から出て行っており、ベッドに座った鈴からは温かい視線が向けられていた。

「ぐ、うお・・・げほっ、げっほ・・・ああ、ったく」

「あの、音羽?」

「な、なんだ?」

「トーナメント、わたくしと組んでくださいまし!」

「・・・あ、ああ良いぞ・・・なんで飛び回ってるんだセシリアは?」

「音羽も大概ね」

「え?」

その日、大浴場で普段は見られないくらい浮ついた状態のセシリアが見受けられたとか。

67・零、その先へ（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズは原作とはもう別物

68・接戦の行方（前書き）

まあ、それだけの話

68・接戦の行方

さて、ドアと仲良く壁に平行ダイブ（強制）させられてからセシリアにタッグの相手を申し込まれてから1週間。5年の時間があつたにも関わらず、あの頃のように以心伝心で動けるようになった。え、そのころの話が聞きたいって？良いぞ、ミリアさん（幽霊）に許可取れたらな。

「で、今日に至ると」

「誰に言ってるの？」

む、どうやら久しぶりになにかしらの電波を受信してしまっていたようだ。まあとにかく言うことはセシリアとまた肩を並べて戦えると、それにしても相手は初戦誰になるんだろうな。一夏とシャルルがタッグらしいから油断できないな、それ以前に鈴ちゃんをあそこまでやりやがった駄兎をとつちめたいが。ちなみにジャックに報告したところ、「mjk」とだけ返事をして寝やがったので御礼にスタングレネード5個の詰め合わせ（ピン抜き済み）を置いてきた。その後に汚い花火と悲鳴を背景に紅茶を飲んだのは記憶に新しい。ついでに言えば今俺ら男子三人組みがいるのは男子に宛がわれた更衣室である。

「それにしても……一体女子はなにで騒いでるんだろうな？」

「あゝ、そうだね。なにか聞いても教えてくれなかったし。優勝したらなにかが手に入るらしいけど」

「へゝ、それは気になるな」

できればセシリアと添い寝権だったら個人的に嬉しい…….な.ん.で.お.前.ら.は.そ.ん.な.に.微.笑.ま.し.い.ね.ゝ.み.た.い.な.感.じ.の.目.で.見.て.く.る

んだ？なんか一夏が「セシリア、あと一歩だぞ！」ってはいやいでいるが、セシリアがどうかしたんだろうか。ハッ！まさか一夏はセシリアを狙っているのか！？お前には世界が許しても俺が許さん、むしろ俺g・・・・・・・・どうやら色々疲れてるんだな俺は。

「ま、まあ今はトーナメントに集中しよう。うん」

「そうだな、音兄に勝てる自信が無いけど・・・・・・・・」

「お前なあ、俺は一応普通のIS動かして数ヶ月の高校生なんだが」
事実、候補生相手ではなんとか勝てているという状況だし。油断すれば一夏に普通に負けるし、生身ならば余裕のような気がするが結局ISでは変わってきてしまう。今回は色々生身で覚えさせられた技を試していく予定だけでも。

「あ、そろそろ組み合わせ結果が出るんじゃないかな？」

「お、そうか」

急にタッグ戦にルール変更されたため、今まで使っていたシステムが正常に動いてくれなく急遽運営係によるアナログ抽選会での試合組み合わせの決定になった。それが一からの手作り作業をタッグ分、組まなかった人の分と大量になってしまうために予定ギリギリにまで食い込んでしまったのだ。今は第一試合の開始予定時刻まで20分、本当にギリギリだなオイ。まあ、一学年全員分を手作業でやっていればここまで遅くなるのも仕方はないことであるのだが。そりゃあ約300人ほどなのだから・・・・俺だって無理だわ。

「所変わって女子更衣室ですわ!」

「お前は何を言っているんだ……」

むう……。なにもボーデウィツヒさんとタッグを組むことにな
ってしまったからとは言えそこまであからさまに態度に出さなくて
もよろしいのでは無くて? まあ、私が同じ状況だとしたらそうなら
ない自信はありませんが。ですが、それはそうとして5年ぶりに音
羽と共に戦えるとは……。嬉しいものです。二度と会えないと思
っていました。今はISに心から感謝ですわ!……。一番は鈴さんの
仇取りですが、音羽も静かにキレていましたし問題無
いでしょう。

「さて、そろそろ組み合わせの発表ですわね」

「そうだな、どうなるうと。真剣に勝負だ!」

「望むところですわ!」

そして、遂にその瞬間がやってきた。

「え?」

「は?」

「何?」

「なんてことだ……」

「まさか、そんなことが」

「フン」

三者三様の驚きを示す6人、その視線の先には抽選結果が大きく映し出されていた。

第一試合「如月音羽&セシリア・オルコットVS篠ノ之箒&ラウラ・ボーデウィツヒ」

68・接戦の行方（後書き）

どうしても良い作品情報

本当は番外の予定だった

69・番外I F その3「新生活」(前書き)

今回は中途半端なところで番外編です

69・番外IF その3「新生活」

ひとまず、紫さんに俺が選ばれた理由を聞くことに。

「で、真意のほどは？」

すると、困ったような申し訳ないようなよく分からんがとにかく明るい方向ではない表情をする。ちなみに食うためとか言ったら全力で逃げさせてもらう。確実にスキマで無理だろうけど、この年で妖怪の食料にはなりたくない、それに美味しくないと思うぞ？血中に医療用ナノマシンが流れてるから、無機物飲んでも味は保障できん。

「実はね、少し、いや正直困ってることがあるのよ……」

「困り事？金銭的な物ならすぐに融資はできますよ」

「いや、お金では無いんだけどね。あなたの力が必要なの」

「はぁ……それで困った事とは？」

「あなたは、式って知ってるかしら？」

「式？」

なんだったか、確か陰陽師とかの使役する使い魔みたいなものだったと思うが。有名なものには十二神将だったか、だが今ではそれも廃れてしまっていて陰陽師も数えるほどしかいないと聞くがな。

「まあ、そこそこには」

「そう。それで私には藍式神とその式神の橙という式神がいるのだけれど……」

なぜかそこでその先を躊躇う紫さん、どうしたんだろうか、まさか

そこまで言いにくいことなのか？これは真剣に聞かなければいけない。

「……………その……とあることがあって……二人に……俗に言う……家出をされちゃったのよ」

「……………what？」

「それで……あなたにはその二人を探してきてほしいのよ……」

「……………つまりは家出人探しってことでオッケー？」

「まあ……………そうなるわね」

「……………その仕事って俺である必要性が全くと言って感じられないんだが、それこそ幻想郷の知り合いとかに頼めば良い話じゃないか？」

「それができないからあなたに頼んでるんじゃない」

「んな、どこに不可能な点があるんですか、俺には全然見当たらないんですけど」

「知り合いは誰も面倒くさがりでそんなことに構ってくれないのよ、……………それにね」

そう言つて紫さんがギリギリまで顔を近づける、うう、免疫無い俺には心臓に悪いんですけど。凄いドキドキしちゃうんですが（心臓的意味で）

「式は主に対して絶対服従なのよ。主のためなら例え火の中、水の中厭わない」

「まあ、そりゃあ従者は確かにそうですが。（俺は無茶な命令は即刻無視してたが）」

「それに、私は一応妖怪の賢者と呼ばれてるのよ。その妖怪が自分の式に逃げられたなんて言ったら……………」

「……………まあ、それはまずいな色々と」

「そうなのよ……はあ」

そう言うとき紫さんが頭を抱えて困ったようにため息をつく……まあ、賢者と呼ばれているほどのならばその大きな威厳が崩れてしまうよな。一度崩壊したら元に戻るまで多大な時間がかかる、やらかしたら2代、3代もかかってしまうという事実があるしなあ。元従者としては……まあ、なんとかしてあげたいがなあ。

「だけでも、その二人はどうして家出したんですか？ 訳もなく家出するなんてありえないでしょう」

「それには深い訳があつてね……」

「深い訳……それは一体？」

「えっと……それは……」

すぐにはつきりと言えは良いものの、言葉を濁す紫さん。そこまでに深い訳なのか？ それならば躊躇ってしまうのも頷ける、そういえばセシリアは元気かなあ、頑張ってるかなあ。最近雅にも会えないしなあ、ドイツの秘密組織さんも忙しいし。俺の家は大丈夫だろうかなあ。

「うちって……基本家事は藍がやって……それで私はこの幻想郷の境界の管理をやってるんだけど……」

「けど？」

「ここ数年間……いえ、もっと前からその仕事を藍に任せっぱなしにして……」

「……それで？」

「あと、お使いとか細かい仕事は橙にらせて……」

「じゃあ、紫さんは何をやってたんですか？」

「私は……基本寝てるか遊んでるか宴会に行ってるかで……」

「……（ダメだこいつ）」

「それで先日・・・神社の宴会から帰ってきたら手紙が置いてあって・・・。その手紙を読んだら『家出します、探さないでください』って・・・。」

「確か日本の言葉に『自業自得』っていうのがあってだな」
「はうっ!!」

笑符「積紙の祝福」
ハリセンストライク

「そんな扱い受けたら当たり前だボケエ!!」
「なんで教えてもないのに使ってるのよ!!」

breakするまでお待ちください

はあ、まったく。なんか知らんが

「うう・・・だって仕方ないじゃない。宴会には必ず出席するのが義務でしょう!?!」

「初めて聞くな、それ。日本来てまだ2年と少しだがそんな聞いたことないぞ」

「幻想郷ルールよ!」

「・・・いや、普通に嘘付くな。目が泳いでるぞ」

「むう・・・。」

「せめて家事くらいやりましょう?」

「それはそうなんだけど・・・。」

「家出の理由聞いたらどの俺である必要性が余計感じられないんだが、というか、自分で探してください」

「だって、私が探して見つけたって絶対帰ってきてくれないもの」
「・・・俺が仲介役をしろと?」

「平たく言えばそうなの……」
「マジか……」

こんな不思議な世界に連れて来られてきた理由が家出人の搜索、橋渡し……なんとも理不尽な気がしないでもないが、呼ばれた以上やるしかない。戻る方法なんて無いし。

「ところでその二人が居なくなってから食事とかはどうしてたんですか？」

「そこは……ほら、博麗神社のお菓子をスキマを使って……ね？」
「お菓子かよとか、人様のところから盗むなどか良いたいが……馬鹿か」

「まあ、最近じゃもうそれも無理になってきたけど」

「だったら何か適当に作りましようよ……」

「だから……その、ね？」

「……俺に料理もしろと？」

「だって、結界の管理ならともかく一人で家事なんか無理なもの」

むう……。まあ、一人暮らし長い間続けてるから家事は一通りはできるが……。ミアさんだって全部一人でできてたぞ？メイドと一緒に談笑しながら皿洗いしてたもの。でも……。やらないわけにはいかないな、元の世界に帰る前に飢え死にとかは避けたい。

「分かりました、引き受けましょう」

「ホント!？」

「やらなきゃ俺が終わるからな……」

「ありがと、じゃあしばらくの間よろしくね？」

「はい、よろしく願います」

こうして、高校一年の夏。幻想郷という不思議な世界での生活が始

まった、もう就職は決まってるようなものだし……もう良いや。吹っ切れなきゃやってられない……ああ、セシリア分が足りない。

69・番外IF その3「新生活」(後書き)

どうでも良い作品情報

作者の東方知識は二次創作と某笑顔百科のみ

70・風と雨、刃と雫の合奏（前書き）

気づけば作品中で一番長かった

70・風と雨、刃と雫の合奏

「どうせなら一夏にやらせてあげたかったんだがな」

「ふん、ならばここでやられておけ」

「残念ながら、俺も後輩やられてキレてるんでな。悪いが、駄兎は狩らせてもらう」

「ならば、『騎士』の動き、見せてみる」

「お、それを知ってるとは嬉しいねえ」

お互いにISを纏ったままで睨み合う、殺気には嫌と言つほど当てられたからこれくらいじゃ怖くもないな。いや、殺気に慣れちゃうつても悲しいような気がする・・・もし俺が普通の行き倒れだったとしても普通の子供ではないな。実際はどうでも良いけど、あ、試合終わったらボーデウィツヒにキャベツ56円のこと聞いてみるか。

『叩き潰す!!』

「・・・・・・・・」

「やあああ!!」

お互いに相手に向かつての加速、音羽は近接用ブレード二本、ボーデウィツヒは両腕に装備されたプラズマブレードを起動して切りかかって行く。確かに、攻める方向性では目を見張るものがあるが、逆に言えば、守りに徹した攻撃で返されればどうか?それも、護衛

を生業にし、返しと往なしを主としての複雑難解な技法で。

「良い攻撃だな、流石軍人だよ。まあ、それだけだが」

ブラズマ刃を滑らせるようにして振られた近接ブレードが、音羽の喉元を狙った一閃を地面へと叩き落す。それに追撃するように0距離からのサブマシンガンによる正確すぎる銃撃、抵抗するように残った左腕の刃を突き出すも、返しの刺突で押さえつけられた。

「…………ハッ、静かになったな？ほら、後ろががら空きだぞ」
「何？ぐあっ！」

蒼穹のレーザーが背後からボーデウィツヒを貫く、その先にはスタライトmk3を構えたセシリアが威風堂々とたたずんでいた。しかも、片手で横から襲い掛かる打鉄を纏った箒をビットによる牽制で引き離して。

「この試合はいつから2対1になったんだ！！」
「このおー！」

瞬間、音羽の身体が空間に縫い付けられたようにその躍動的な動きを止める。かすかにボーデウィツヒの周囲の大气が揺らいでいるのが慣性停止結界「AIC」の発動した証拠であった。

「なるほど、こう止められるのな？凄いなボーデウィツヒ」

「お褒めに預かり光栄だ、礼をしてやろう！」

「そりゃあ、嬉しい限りだな」

ボーデウィツヒの専用機、シュヴァルツェア・レーゲンの右肩部に搭載された80口径リニアカノン「ブリッツ」が砲口から雷を幻想

的に噴出す。最大出力時に発生するオーバーステークの兆候である、しかも装填されているのは対IS用徹甲弾、訓練機、装甲が薄い疾風ならば一撃の下に葬り去ることができるほど。しかも最大出力ならば、汎用的な物理シールドすら貫く。正に絶対絶命の状況であった。普通ならば、それこそ絶望に沈むが・・・生憎、音羽は色々と普通ではなかった、機体も然りと言ったところではあるが。

ズガン！！ ドカーン！！

「おお、こわいこわい」

「AICの拘束から逃げただと！？」

「ふふん（どやあ）」

まあ、簡単なこと。AICのエネルギー波での抑制より大幅に大きな力で無理やり動けば良い事なのだ、抑えられたら強い力で押し返す。疾風の規格外な出力のブースターがあるからこそその力技ではあるが、その結果、操縦者にもそれなりのダメージが行ってしまう。それこそ、ISで考えればシールドエネルギーの多大な消費として。

「じゃあ、こつちからも行くぞ」

何時の間にか格納されていた二振りの近接ブレードの代わりに、疾風専用武装「ステイル・ハーツ」が力強くその右手に陽光を眩いほどに反射して輝いていた。

「く、やはり候補生は一筋縄ではいかないか・・・！」

打鉄の基本装備である日本刀型の近接用ブレードを自身の剣道で培った技術で手加減無く振るう。無論、剣道をしたことすらないセシリアには有効であるのだが、生憎、機体の相性が悪かった。基本形態の打鉄は二枚の物理シールド非固定部位^{アンロックユニット}を装備した防御重視の近距離対応型。盾で防ぎ懐に入り込んでからが独壇場であるのだが、対するブルー・ティーズは中距離射撃型。それも全方位からのビットによる視覚外からの射撃に、無慈悲なまでに正確なレーザーライフルによる射撃。どうにか物理シールドと持ち前の反射神経を生かして避け続けているが、それも時間の問題になってきていた。物理シールドは幾数回もレーザーに焼かれてボロボロ、ビットを2機叩き落したとは言え数が減っただけ。

「なにおお!!」

「つく、強引ですわね!」

先日、音羽がアリーナへの移動の際に使っていた移動法「跳歩」。実際はステップングアクセルというらしいが今はそこは重要な事項ではない。どれだけ接近できるかであるのだから。

「やああああ!!」

「くう、ああっ!」

機体の重量さえも斬撃へと転化し、一撃必殺の一太刀を浴びせる。袈裟懸けになったその一瞬の隙を見逃さず続けて二の太刀、三の太刀へと刀を振るう。嵐のように間を置かず放たれる煌めきはそれを受けているセシリアでさえも魅了した、鮮やかに円を描くような切っ先。しかし、そのまま黙っている者などいるはずがなかった。

「素晴らしい剣技のお返しですわ!」

途端、セシリアが携えていたレーザーライフルが持ち手の形を変え、銃口がスライドしレーザーの奔流が流れ出す。これこそ、セシリアが不得手としている近接戦闘への対応策として開発させた光の槍。通称「スターライトmk3・ランサーカスタム」である。

ところで、近接戦に限らず。武器には得意とする間合いというものが存在する、そして、それは同時に一番攻撃力が高いという位置。刀剣ならば懐など、そしてその間合いを制したものが攻撃を加えることができる。剣は懐に入らねばならず、反して槍ならば離れた場所からの攻撃が可能。槍に限らず、弓や銃などもそうなる。間合いが長い武器は同時に相手からの攻撃から自動的に引き離されるのだ。

「くうっ!!」

「やああああ!!」

洪水のように荒れ狂うような連続の突き・振り・払い、力があれば刀で抑えることも可能ではあるのだが、運悪く槍先は全てを焼き切るレーザー。一度横へ振られてしまえば意図も簡単にレーザーの弾丸が自身を貫く。だが、だからと言って諦めるようなことをする女でも、理論的に打破する方法を考える女でもなかった。

「ならば、ただ突き通す!! 道理などいらん!!」

「なあ、箒さん!？」

レーザーに碎かれる物理シールドを知らぬと機体制御下から切り離し、そのままの加速のまま投げつける。そして、刺突の体勢のままでセシリアへと全力の加速で・・・上空から、それこそ捨て身で突っ込んでいった。その一閃はセシリアのシールドエネルギーを大きく削ったのだが、同時に打鉄が糸の切れた人形のようにその動き

を止める。見れば、腹部にレーザーの刃が突き立てられていたのだから。

「……くう、無茶を致しますわね篤さん」

「こつというのが柄でな、いや、スツキリしたぞ。礼を言う」

「いえ、わたくしこそ」

「どうやら、残りはお前だけみたいだぞ？」

「最初から数になど入れていない！さつさと落ちろ！！」

アリーナ内に響き渡っているのではないかと思う程の叫びと同時に、合計4本のワイヤーブレードがそれぞれ意思を持つかのようにバラバラに今すぐに食らいつこうかとも言うように音羽へと先端に禍々しく感じる鈍い光を讃えて縦横無尽に襲い掛かる。いくら、機体の速度が速くてもここはアリーナという限定的な閉鎖空間。挟み込むように上下左右からの噛み付くような斬撃が逃げ場を失った疾風へと切りかかった。

「まだ、終わってない！」

「小癪な奴めええええ！！」

独楽のように刃を外へ向けて回転しながら、アリーナの外壁を蹴りつけてそのまま4基のブースターを限界まで噴かす。三次元軌道でステップングアクセルの跳躍加速であつた、それも音速を易々と超えた証拠に円錐状に衝撃波を出しながら。連続で吐き出されるリニアカノンからの砲弾を物ともせず、周囲に迫るワイヤーブレードを回転しながら振るうス

テイル・ハーツで微塵に文字通り切り裂きながらボーデウィツヒの目前へと迫る。

「good night!」

「……………つぐ、あぁっ!!」

エネルギーカートリッジを5本全て消費したステイル・ハーツの衝撃波という武器を付加した音の壁を越えた一撃必殺の一閃、リニアカノンがその巨体を砕かれ、腕部プラズマブレードはその意味も無く児戯だと言わんばかりに衝撃波で四散し、機体を散々に切り裂かれて満身創痍の身体で反対方向のアーリーナの特合金壁へと叩きつけられる。奇跡的にシールドエネルギーは雀の涙の5が残っていたが、既に機体各所からは強制解除の兆候である紫電が暴れるように迸っていた。

「へっ、ざまあみろってんだ」

すぐ傍にはどうにかステイル・ハーツを杖代わりにして立っている音羽、機体各所には衝撃波の脅威をありありと示すように線状に細かい傷が大量に走っていた。攻撃時に自身もシールドエネルギーを大量に消費してしまったために、こちらもボロボロ。両者慢心相違であるが、音羽が有利であった。ボーデウィツヒはいまだ立ち直れずに、動きを止めて壁に倒れ掛かったまま。すぐに音羽が銃器を展開して一発でも入れることができれば勝利であった。操縦者保護があるとはいえ、全身に痛みを感じるために行動に移せないでいるが……。

如月の最後の一撃を食らった途端、私の心を悔しさが覆い尽くしていた。鉄の子宮から生まれ兵器としてそだてられ、ISの登場と同時にすぐさま今度はIS用の操縦者としての毎日。それまで部隊内トップだった私は、ISの適正を上昇させるためということでの左目への補佐用ナノマシン移植が行われた。その際に、絶対に失敗しないと言われたそれが私だけ常時稼動状態、制御不能。それにより、実績は転落するかのように最下位へ。出来損ないの烙印を押された私はある日、世界最強「ブリュンヒルデ」に出会った。

「安心しろ、私の言うとおりにしていれば一ヶ月でまた元に戻る」その言葉通り、教官に従い日々を過ごして行った結果、前以上に力が実感できるほどに身についていた。それこそ、部隊内で名実共にトップへと。教官は私を闇の中から引きずり出し、光の中へと出してくれた。教官がいたから今の私がいる、だからこそ、あの弟とやらが気に入らなかった。教官の栄誉ある二連覇を無に返してしまっただあの男が。そして今、あいつに一矢報いぬまま兄と言われている男に倒されようとしている。

『力が欲しいか？全てを破壊できるほどの力が』

ああ、欲しい。この男も、あの弟とやらも倒せるだけの、力が！！

『ならば、与えよう。その力を振るえ！！』

寄越せ、力さえあれば。力さえ！！

『Damage Level・・・D・』

Mind Condition . . . Uplift .
Certification . . . Clear .
《Valkyrie Trace System》
boot .」

「これで、俺らの勝ち「うあああああ!!」 なんだよ、奥の手か?」

やっと痛みも和らいでサブマシンガン「ネフェルテム」をどうにか展開し、両手で構えて照準を合わせた。引き金を今この瞬間引こうとした途端、ボーデウィツヒが奇声を上げて機体から紫電をばら撒くように放つ。ギリギリのタイミングで空へと回避したは良いが視線の先ではありえない光景が繰り広げられていた。

ボーデウィツヒの専用機「シュヴァルツエア・レーゲン」がその漆黒の装甲をどろどろに溶かして装儒者であるボーデウィツヒをその中へ飲み込む。まるで高温にさらされた蠟人形のように形を変えるそれはもはや面影を失っていた。流動的なそれは徐々に人の形を取り、一つの固体へと姿を変えた。その仮定はISでのフィッティングやファーストシフトとは違い、形そのものを作り変えているようなものだった。確実に、異常事態だった。

「これは 暮桜! ?」

体躯はボーデウィツヒを拡大したかのような形、その右手には千冬

さんが現役時代に使っていた雪片、こちらを見下ろす顔には不気味な赤いラインアイセンサーがあった。そして、異様なまでに巨大。歩き出したかと思ったら既にその場には存在していなく、軽々とその刀を振り、俺の身体をISごと吹き飛ばしていた。その衝撃で眼鏡が外れてしまう、それに応じてか普段は停止状態の「死神の瞳^{リバーズアイ}」が強制的に起動する。どういうことだ!?

「つく、くそ、どうなってやがる!」

『緊急事態発生、試合参加生徒は即座に退避してください!』

「そう簡単に言われてもなあ、困るんだよ!」

唯一新品同様の最後の近接ブレードを展開し、構える。セシリアもスターライトを構えて頷いている。

さあ、第二ラウンドと行こうか。

70・風と雨、刃と雫の合奏（後書き）

どうでも良い作品情報

次回に持ち越しです、すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335v/>

訳有りの記憶喪失でも生きていける

2011年11月5日20時18分発行